

齊興公史料

市來四郎編

弘化二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十六枚）」の記載あり〕

弘化二年乙巳

清曆道光二十五年
洋曆千八百四十五年

神武天皇御即位紀元二千五百五年

仁孝天皇惠仁第百十九代御即位文化十四年丁丑十月二十九年御宝算四十七

將軍家慶公第廿二世襲職天保九年戊戌月八年

藩主齊興公第廿七世、當時大隅守ト称ス知政文化六年己巳六月三十七年年十五

世子齊彬公修理大夫年三十七表三十八

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球国受封（人皇八十二代後鳥羽天皇寿永五年即子文治三年）凡六百五十年

老中

阿部伊勢守正弘

牧野備前守忠雅

水野越前守忠邦

堀 大和守親憲

青山下野守忠良

若年寄

遠藤但馬守胤統

本庄伊勢守道貫

本多豊後守助賢

大岡主膳正忠固

本多越中守忠徳

所司代

酒井若狭守忠義

京都町奉行

伏見町奉行

国老

頼姓信濃久喬

新納内藏久命

島津將監久泰

岩下典膳道格

島津安房久備

島津 登久兼

島津久馬芳馬

町田監物久視

市田美作義宜

北郷内記久珉

島津和泉久風

島津丹波久長

川田信濃佐摸

猪飼 央尚敏

二階堂言計行典

調所笑左衛門廣郷

諏訪解勘由武敬

菱刈安房隆觀

島津石見久浮

島津 登久備

島津豊後久寶

島津壹岐久武

末川近江久平

島津將曹久徳

川上筑後久封

以上二十五名、文化六己巳年ヨリ嘉永四年辛癸二月迄凡四十三年間、前代ヨリ在職連統ノモノ朱〇印ヲ付ス

五〇二 総覽

正月

廿二日

齊興帰国ノ報鹿兒島ニ達ス、

齊興帰国ノ途ニ就ク、

廿四日

江戸大火、廿日ヨリ廿五日ニ至ル、青山權田原ヨリ麻

布・芝・二本榎・三田臺町ヲ経テ高輪ニ延焼ス、

幕府貧民ヲ救助ス、

廿七日

江戸本丸城造營式ヲ行フ、

砲台ヲ浦賀ニ築ク、

二月

八日

幕府令シテ前年ノ凶作ヲ顧ミ非常ノ備ニ充テン事ヲ注意セシム、

十一日

幕府令シテ物価高貴四民困究スルヲ以テ、物価ニ係ルヘキ冥加金ヲ免シ、姦商ヲシテ巨利ヲ占メサラシム、

十七日

米国捕漁船阿波及ヒ南部ノ漂民廿二人ヲ房州館山浦ニ送致ス、

十八日

江戸永代橋成ル、此日渡橋式ヲ行フ、

廿一日

閩老水野忠邦病ヲ以テ職ヲ辞ス、此日之ヲ聴ス、

鳥居甲斐守ヲ評定所ニ召喚ス、

廿三日

金座改役後藤三左衛門ヲ獄ニ下ス、

天文方澁谷六藏ヲ獄ニ下ス、

廿四日

水藩士民數十人老中ヲ途ニ要シ齊昭ノ冤ヲ哀訴ス、

廿八日

江戸本丸城落成シ將軍之ニ徙ル、

三月

十日

幕府水野忠邦ノ邸ヲ没収ス、此時群集礫ヲ擲ツコト雨ノ如シ、

幕府水野忠邦ノ高島高敷連類者ヲ処分スルニ当リ、不正ノ措置ヲ責メ詳悉事実ヲ具申セシム、

十二日

水戸藩桑原幾太郎・豊田武次郎等齊昭ノ冤ヲ老中ニ哀訴ス、

十三日

齊興帰国鹿兒島城ニ至ル、

十五日

漂民送致ノ米国捕鯨船去ル、

十八日

戸田忠温ヲ以テ老中トナス、

諸侯ノ紋譜ヲ調査シ録上セシム、

廿一日

齊興封内大隅・日向ヲ巡視シテ海防ヲ指揮ス、

四月

朔日

阿部正弘ノ本丸城造営ノ功ヲ賞シ、刀及ヒ馬・虎皮・

鞍覆ヲ与フ、

六日

將軍吹上園内ニ騎射ヲ覽ル、

廿九日

飯田親憲ノ老中ヲ罷ム、

五月

朔日

幕府、俳優市川團十郎（八代）ノ父母孝養ヲ賞ス、

四日

將軍阿部正弘優遇シ、曩ニ与フル所ノ物ヲ平常用ヒシ

ム、

十五日

英国船琉球ニ来ル、

淡路海ニ獲ル所ノ白亀ヲ下谷不忍池ニ放ツ、

十七日

英国船琉球ヲ去ル、

六月

朔日

老中等連署^{〔署カ〕}シテ和蘭国政府ニ書ヲ送り、曩キニ忠告ノ

厚意ヲ謝シ、併テ国法ノ変スヘカラサル旨ヲ回答ス、

幕吏ノ各藩ニ音信贈答スル事ヲ嚴禁ス、

六日

越前国丹生郡大雨洪水、

七月

三日

英国船長崎ニ来リ薪水ヲ乞テ去ル、

異船東蝦夷「エトロフ」ニ来リ食料ヲ乞テ去ル、

六日

林大學頭・古賀小太郎・佐藤捨藏ノ和蘭国王ニ贈ル回
答書取査ノ勞ヲ賞ス、

十九日

新版書籍出版ノ制ヲ改ム、

廿一日

天文曆算・蘭書翻訳・世界絵図・蘭方医書等ヲ出版セ
ント欲スル者ハ、天文方ノ指揮ヲ受ケシメ一部ヲ納本
セシム、

廿七日

幕府文武ヲ奨励シ元録〔禄〕・享保ノ令ニ則ラシム、令シテ
和蘭人船載ニ係ル「ドンドロ」ノ売買ヲ禁ス、

廿八日

江戸地方大風雨、倒家多シ、

廿九日

幕府令シテ文武二道ヲ尚奨励シ、元禄・享保ノ制ニ依
ラシム、
令シテ灰吹銀及ヒ潰金並ニ銀箔猥ニ売買スルヲ禁ス、

此月芝新橋南大坂町某家庭ニ於テ、唐黍ニ蓮花ヲ生シ

群集之ヲ見ル、

八月

六日

国老島津主計名ヲ豊後ト改メ、威權ヲ專ニス、

八日

土岐丹波守・平賀三五郎・松平式部少輔ヲ以テ海岸防
禦掛ト為ス、

將軍浅草觀音境内ニ於テ一回十反織ノ機械器械ヲ見ル

廿七日

北国地方大風雨、損害多シ、

各藩ニ令シテ普化宗ノ事蹟ヲ調査セシム、

九月

二日

水野忠邦ノ罪ヲ罰シ封地二万石ヲ削リ、邸ヲ没収シテ
致仕ヲ命ジ、下邸ニ蟄居セシム、

飯田親憲ノ罪ヲ罰シ封地一万石ヲ削リ、致仕逼塞ヲ命
ス、

六日

將軍、諸有司ノ武技ヲ白書院ニ覽ル、

十日

野州宇都宮大風雨、洪水アリ、

廿七日

寺社奉行、金地院ニ命シ普化宗ノ事蹟ヲ録進セシム、

十月

三日

鳥居甲斐守町奉行在職中不正ノ罪ヲ罰シ禁固ニ処シ、

京極高朗ニ命シ之ヲ監守セシム、

五日

後藤吉五郎ヲ以テ金・銀座改役トナス、

十一日

將軍、吹上ニ於テ草鹿ヲ覽ル、

廿三日

後藤左衛門(三脱カ)ヲ死刑ニ処ス、

澁川六藏ヲ禁錮ニ処シ、稻葉觀通ニ監守セシム、是外

連座スル者数人、

十一月

廿一日夜

鹿兒島城下上町ヨリ失火シ延焼數百戶、

晦日

水野忠經(山形ニ脱カ)ヲ秋元志朝ヲ館林ニ、井上正春ヲ濱松ニ各居

城ヲ交換セシム、

十二月

京都學習所ヲ改メ學習院ト稱ス、三條實滿之ヲ斡旋ス、

五〇三 將軍家令条鈔

阿部伊勢守三阿彌ヲ以達(近衛家所藏、重複アルモ其儘

ニ置ク)

弘化二年二月四日

去ル申年遠作ニテ及難儀候モノ不少候間、銘々非常ノ

備致シ置候儀ニハ可有之候得共、年ヲ経候ニ随ヒ自ラ

其心懸薄ラキ、夫食ニ不相成品等作増候哉ニモ相聞候、

非常ノ備ハ平常ノ覚悟ニ可有之儀ニ付、五穀ハ勿論都

テ夫食ニ可相成品出精作付致シ、万一遠作ノ年柄有之

候共、他ノ力ヲカラス銘々無差支、取統方ノ儀専ラ心懸候様厚世話可被致候、

右之趣領分・知行有之面々へ可被相触候、

二月

阿部伊勢守大目付深谷遠江守ヲ以達

弘化二年三月十八日

此度

御本丸御普請出来、御移徙も被為濟、恐悦ノ御事ニ候、就テハ御用途も不輕儀ニ付、御勝手向ノ儀追々被仰出候趣厚相守、弥御儉約筋御取締向不弛様可心得候、此旨末々迄申聞置候様ニトノ御沙汰ニ候事、

三月

阿部伊勢守大目付稻生出羽守ヲ以達

弘化二年六月四日

御目付方支配向ノ者共へ諸家ヨリ用向相頼候ニ付、贈物ノ儀近来不取締ノ筋モ相聞候ニ付、以来用向ノ儀ハ

是迄ノ通居置、贈物ノ儀ハ參勤其外都テ是迄贈来候廉ハ、御徒目付其以下ニ至マテ御徒目付組頭へ相贈可申候、若相對ヲ以差贈候ハ、贈物受候当人ハ勿論、其家々へモ御沙汰ノ次第可有之候、若又是迄贈物ノ廉減少致シ、又ハ名前ヲ差シ相頼候儀ハ有之間敷候間、頼ノ者明キ有之候節ハ、御徒目付組頭へ承合候様可致候、尤唯今迄濟来候分ハ不苦候間、向後右之通急度可相守候、

右之趣万石以上以下不洩様可被相触候、

右之通去々卯八月中相触置候处、品ニ寄銘々用弁ニモ相拘リ可申、彼是差支之筋モ有之哉ニ相聞候間、向後用頼ノ儀ハ御徒目付組頭へ引合候ニ不及、家々ノ仕来通用弁宜様可致候、尤右之通相達候迎如何敷取計方等ハ勿論、都テ不取締ノ筋無之様相心得、御改革以来ノ廉々不相崩様可致候、

右之通万石以上以下へ可被相触候、

六月

大目付土岐丹波守達

弘化二年六月八日

阿部伊勢守殿供連ノ儀、此度拜領並御免ノ品々平日可被相用候処、当時諸家一同質素ノ風習ニ押移候折柄ニ付、内存之趣被申立、平日ハ是迄ノ通供連被居置、式立ノ節ハ拜領並御免家格ノ品共被相用候事、

六月

阿部伊勢守大目付土岐丹波守ヲ以達

弘化二年七月廿八日

新版書物ノ儀ニ付、去ル寅年相触候内、天文曆算・蘭書翻訳・世界絵図・蘭法医書等ノ類蔵版ニ致度存候輩ハ、向後天文曆算・世界絵図等ハ天文方ノ内へ草稿差出、蘭書翻訳・蘭方医書ノ分ハ天文方山路彌左衛門方へ草稿差出、任指図、彫刻出来ノ上一部宛同所へ相触候様向々へ相触可被置候、

七月

阿部伊勢守大目付深谷遠江守ヲ以達

弘化二年七月廿九日

文武ノ道常々相嗜候ハ勿論ノ儀ニテ、追々御世話有之趣遺失無之、当時別テ出精ノ由ニハ相聞候得共、猶此上無油断修業可致儀專要ノ事ニ候、因テハ先年相達候別紙相添又候申達候間、兼々相達有之趣等於頭支配モ猶更不怠心附、稽古相励候様厚教育可致候、

右之通向々へ可被達候、

七月

右老通

寛政十二年申

学問之儀ハ、御代々御世話被遊、就中元禄・享保ノ間厚御引立被遊候、今度於学問所御教育有之儀候条、人々相励候様可致候、尤文武ノ道一致ノ事ニ候間、武芸ノ儀モ弥無怠可心掛儀勿論之事ニ候、

右老通
天保七年申

文武芸術之儀ハ常々嗜候ハ勿論ノ事ニ候得共、何モ御

奉公一廉御用立候心得ニテ修業可有之候、因テハ稽古モ実意ニ精出シ、且今日ノ行跡等心掛是又專要ノ儀ニ候、毎々相達置候趣弥不忘、於頭支配モ無油断世話可有之候事、

別段達

諸稽古場近来風儀不宜向モ有之哉ニ相聞候、畢竟師弟共深切薄ヨリノ事ニテ、教候者モ修業致候者モ互ニ実意精入候儀專要タルヘク候、夫々頭支配ヨリ心ヲ付候様可被致候事、

阿部伊勢守ヨリ友阿彌ヲ以達

弘化二年七月晦日

灰吹銀其外潰銀類銀座並下買ノ者へ売渡、銀道具下銀入用ノ者ハ銀座ニテ買受致間敷旨先達相触候処、猥ニ売買致者有之趣相聞不届候、先達テ相触候通急度相守、銀座並下買ノ外、他ニテ売買致間敷候、

一 銀箔ノ儀銀座ヨリ鑑札並箔下カネ相渡、於京都職人共打立世上へ売出候処、他国ニテ紛敷下カネヲ以銀箔打

立候モノ有之由相聞候、右ハ京都箔方職人ノ外、於他所銀箔打立候儀ハ難成事ニ付、一切致間敷候、

右之通先年相触候処、其後諸株仲間等差止候ニ付テハ、何売買ニテモ勝手次第ノ儀ハ心得、近年猶又猥ニ相成銀箔隠打イタシ候哉ニ相聞不届候、以来急度相守灰吹銀其外潰銀ノ類銀座ノ外堅売買不致、銀箔ノ儀モ京都定職ノ外他所ニテ打立候儀一切致間敷候、右之趣於相背ハ吟味ノ上急度答可申付モノ也、
右之通可相触候、

七月

阿部伊勢守大目付土岐丹波守ヲ以達

弘化二年九月廿一日

馬喰町御用屋敷ニオキテ、御貸出相成候御貸附金拜借ノ儀ニ付、口入或ハ世話人（ト）申也、其向ニ寄候テハ掛リ役人ノ由品能申偽、借方へ及相對謝礼等申請候族モ有之趣相聞、不届ノ至ニ候、右様ノ儀ハ一切無之事ニ候条、向後如何敷モノ於有之ハ、月番ノ町奉行へ早

速可相達候、

右之趣向々へ可被相触候、

九月

阿部伊勢守大目付堀伊賀守ヲ以達

弘化二年十月十二日

後藤三右衛門不屈之儀有之御仕置ニ成候ニ付、右代り

四郎兵衛倅後藤吉五郎へ申付候、金改包方等諸事は迄

之通取計候間、為心得向々へ可被達候、

十月

阿部伊勢守三阿彌ヲ以御渡

弘化二年十月廿九日

古金銀・真字式歩判・古式朱銀並文政年度ノ文字金銀

草字式歩判・式朱銀・壹朱銀共通用停止被 仰出候ニ

付、当巳十月迄引替候様、去辰年相触候処、今以引替

残モ多ク有之、停止ノ品貯置候儀有之間敷ハ勿論ニ候

得共、遠国辺鄙等引替不行届次第も可有之哉ニ付、引

替所ノ儀猶又來午十月迄是迄之通被差置候条、諸事先

達相触候通相心得、右月数ヲ限り急度引替候様可致候、

万一心得違ニテ貯置候モノ於有之ハ不屈ノ事ニ候条、

末々ノ者共へ能々申諭、早々引替差出候様、御料ハ御

代官私領ハ領主地頭ヨリ入念可被申付候、

右之趣可被相触候、

十月

阿部伊勢守林阿彌ヲ以御渡

弘化二年十二月十六日

御挙場ノ内へ近比怪敷姿ニテ立入、鷹等据徘徊致候者

有之段相間(聞カ)不埒ノ至ニ候、此以後右体ノ者及見候ハ、

早速可申出候、若見遁シニ致外ヨリ於相知ハ、村役人

共迄急度可申付候、右之趣御料ハ御代官、私領ハ領主

地頭、寺社領共不洩様可被相触候、

右之通天明六午年相触置候処、近頃触面之趣等閑ニ相

心得候者モ有之哉ニ相触(聞カ)不埒之至ニ候、向後御挙場ノ

内鷹等据候テ徘徊致シ候輩於有之ハ、吟味ノ上嚴重ノ

御沙汰ニ可被及候間、右体ノ者及見聞候ハ、早速可申出候、

右之通可被相触候、

十二月

牧野備前守大目付土岐丹波守ヲ以達

弘化二年十二月十八日

出火ノ節見物ケ間敷モノ罷出間敷旨去ル辰年モ相達候間、面々其心得ハ可有之候得共、兎角火近ノ場所へ多人数立集及混雜、消防等ノ妨ニ相成候由ニ候間、以来心得違ノ者有之候ハ、時宜寄滞刀^{〔帶之〕}致候者タリ共捕押相糺候儀モ可有之候間、弥心得違ノ儀無之様向々へ可被達置候事、

牧野備前守大目付深谷遠江守ヲ以達

弘化二年十二月廿八日

御医師中供方ノモノ共風儀不宜、病家へ罷越酒代又ハ弁当料ト唱、ネタリケ間敷儀申掛候モノ有之候ニ付、

去ル丑年相達置候處、近来又々馳^{〔馳カ〕}候趣相聞候ニ付可及沙汰處、御医師手限りノ制度行届兼候由ニテ、其筋

へ取締相願候ニ付、町奉行へ達、口入ノモノ共呼出夫々相糺、以後心得違決テ無之様、奉公人共へ精々可申聞旨申渡置候、若相背モノ於有之ハ無用捨拾捕可及吟

味条、侍共ノ儀ハ敵科ニモ相当リ候間入念可申付置、

今度ノ儀ハ御医師中ヨリ取締ノ儀相願候事故不及沙汰候、此後銘々申付方等閑ノ儀於有之ハ、其方共ニオヒテモ不束ノ事候条急度可及沙汰候間、能々申渡置候様可致候、

右之通奥医師へ相達候間、為心得諸向医師共へ可被達置候、

十二月

阿部伊勢守大目付堀伊賀ヲ以達

弘化二年十二月廿九日

御本丸御普請ニ付、万石以上ノ面々上納金年割納願濟後、御役 御免又ハ家督ニ付金高増減被 仰付候處、

右ハ当年ヲ限り来正月ヨリ居屋敷焼失等ノ外ハ、都テ最前願濟ノ金高之通上納可有之候、右之趣寄々可被相達候、

十二月

五〇四 齊彬公史藩内事項総覧 弘化二年

〔本号記事カラ五〇四号ノ二二三文書マデハ齊彬公史料ノ一部ナラン〕

〔本号記事カラ五〇四号ノ二二三文書マデハ齊彬公史料ノ一部ナラン〕

正月十一日、奥茶道重久玄碩ヲ茶道頭ト為ス、

七月廿八日晝、第二公子寛之助高輪邸鶴乃渡ニ生ル、

母ハ横瀬三郎兵衛克富貴子ノ女

八月四日、側役山口直記初舎人ヲ側御用人ト為ス、

十一月廿一日、鹿兒島上町行屋町酒屋相良嘉兵衛ヨリ

出火、全市焼亡、近代稀有ノ大火ナリ、

三月廿一日、太守様高岡辺巡視、

四月朔日ヨリ領分南邑大隅國肝付郡大始良郷ノ内南村ニ赴キ同十日帰家、

六月六日、大目付島津頼母ヲ家老ト為シ、小姓与番頭

兼御用人島津中務ヲ大目付ニ転ス、

七月三日、太守様演武館諸稽古ノ掛声不聞得旨ヲ令ス

八月朔日、於御書院太守齊興公へ謁見、家ニ付持参太

刀着座御祝義申上、

八月六日、義村王子御膳進上ニ付、城中ニテ式ヲ行フ

十一月十五日、用人兼務拜命、奏者番是迄ノ通、家老

島津豊後久寶ヲ以被 仰付、

十二月廿四日、厩掛兼勤、家老菱刈安房隆觀・用人島

津要人久寛ヲ以承知之、

十一月廿五日、太守様来年三月参府ノ祝儀ヲ行ハル、

五〇四ノ二 御歌会初

種子島時助日記ニ、左ノ歌ハ近衛家ヨリ齊彬公へ

送付ニ係ルモノナリト云フ、

御題 春生人意中

参考(鎌田正純日記)

三月十三日、大守様御着城

三月十七日、島津主計城代被仰付、

正月廿四日

御製仁孝天
皇憲仁

としの名もひろくやわらく春なれハ

わきて長閑き人こころかな

有栖川中務卿宮 韶仁

長閑にもけに花鳥の春をえて

楽しみ尽きぬ人の心か

近衛右大臣 忠熙

霞より花よりさきに世の中の

人の心や春を知るらん

飛鳥井大納言 雅光

咲梅も鳴鶯も春になる

人の心の花の種かな

久我權大納言 建通

皆人の心よりこそ立春を

花うくひすにまかせけるかも

柳原中納言 隆光

鶯もまたつけそめぬ春の色を

まづしるものハ心なりけり

飛鳥井中納言 雅久

天地の中にも春をとくしりて

やはらくものハ心ならまし

綾小路宰相 有長

諸人の心の春のいろくくに

めくみしらるゝ君か世の春

萬里小路權中納言 正房

押なへて世の長閑さも知られけり

春立けふの人の心に

烏丸權中納言 光政

諸人の心のとかに立にけり

めくみある世の春のはつ風

千種正三位 有功

皆人の心は花に成にけり

雪も氷もさもあらハあれ

風子三位 公元

いかなれハ心の中に立春を

またき霞の空に知らん

正親町三條右衛門督 實愛

何となく心そゆらく新玉の

年の初風今ハ吹らし

清水谷右中將 公正

春をえてのとけしと思ふ人心

花に成行く初めなりけり

庭田權中將 重胤

春になる人の心を種として

言葉の花も咲匂ふらし

綾小路三位 俊賢

のとかなる心を種の花の色に

やはらく春の光り知るらし

外山三位 光親

皆人の心にはふ春よりや

世は花鳥に霞行くらん

五〇四ノ三 樺山資之日記鈔

弘化二巳年

正月

元日晴

致出勤祝儀ニ廻リ暮ニ帰り候事、

四日風晴

太守様宮城^(マゴ)辺ヨリ真幸ノ様御巡見ニ付、兄上御供ニテ

先月廿一日御光越被為在候事、

四月

八日

今日御光越御供ニテ御帰り被成候事、

七月

二日

牧野喜平次殿誘ニテ大久保正助殿外ニ兩人、今日舟ヨ

リ加治木迄差越シ、翌三日早朝ニ打立日入時分ニ栗野

へ行着、牧野氏下代ニテ蔵ニ泊リ御当地ヨリ余多被参

居候、先比御巡見ノ節踊御覽之由、其故ニヤ当年ノ見

物人多シト申事ニ候、

四日晴

四ツ時分ヨリ飯屋ニテ踊ヲ見ル、夫ヨリ若宮八幡へ差
越流石御渡海ノ様奉忍候、相濟候テ松尾ノ城へ登リ、
未石垣モ残り一入ニ覚候、翌日ハ萬膳氏へ参リ持ツタ
へノ刀、又ハ御談合人数留ノ名ナト有之候、

六日

早朝ニ打立帰候処、列レモ段々有之候事、

五〇四ノ四 江戸城造営着手布告

正月廿七日御本丸御普請、於大広間御祈祷・御歟初・

御柱立御式（マツマ）在有之、布告シテ之ヲ賀セシム、

布告文送ス、

五〇四ノ五 七月十九日布達、新版書物一部宛天文方江

差出へキ布令

去ル寅年相触候内、天文曆算・蘭書翻訳・世界絵図・
蘭方医書等ノ類蔵板イタシ度存候事ヲ、天文方へ草稿
差出シ、差図ニ任セ彫割出来ノ上ハ、一部ツ、同所へ
可相納旨、向々へ可被相達候、

別紙之通從 公義被仰渡候条、不洩様可致通達候、

八月廿九日

御家老座印

五〇四ノ六 七月廿七日文武芸術奨励達書

天保七申年文武芸術ノ儀平常ニ相替候儀ハ勿論ノ事ニ
候へ共、何レモ御奉公一廉御用立候様之心得ニテ師業
可有之候、依之稽古モ実意ニ出精、且今日ノ形勢ヲ以
テ習候ハ專要之義ニ候、毎々相達候趣弥以テ不怠、頭
支配ニテモ油断無之世話可致候、

別段達書覚

諸稽古場近来風義不宜向モ有之哉ニ相聞、畢竟師弟ト
モ深切薄キヨリノ事ニテ、教候者モ致修業候者モ、互
ニ実意精入候義可為專要ト、夫々頭支配ヨリ不怠候様
可致教諭候、

文武ノ道常々相嗜候ハ勿論ノ義ニテ、追々御世話モ有
之趣無違異、当時別テ出精之由ニハ相聞候へトモ、猶
此上無油断可致修業義專要ノ事ニ候、依之先年相達候

書付別紙申達候間、於頭支配不怠心付、稽古相励候様
厚教育可被致候、此段向々へ可被達候、

別紙従、公義御諭達相成候ニ付不洩様向々へ無屹度
可申達候、

八月

御家老座印

五〇四ノ七 七月廿七日町触

近来世上ニテ翫ノ紅毛人持渡ノ内「ドントロ」又疳癩
玉ト唱候品々、並真鍮ニテ拵候通用金銀形ノ品、縁日
商人等売弘ノ義可致無用候、

別紙通町奉行ヨリ触達相成候間、御屋敷中へ無急度
寄々可申通候、

八月

御留守居

五〇四ノ八 人数操練ノ布達

八月二日大御番頭へ達書

大御番組ノ人数調練ノ儀、仮令一組ツ、ニテモ手輕ニ
イタシ、先ツ試ノ為相始メ、急々手当出来イタシ兼候
分ハ、手当次第追々相試候ハ、往々惣組調練ノ義可
相伺候間、右之趣先府内ノ衆丈ケ評議イタシ被申候
様追々相達置候処、此程書付ヲ以テ委細被申聞候通り、
仮令急速ニ可難相整ニ付、何レニモ組々厚ク申合、先
一組ツ、ニテモ調候儀相始候積ニ可被心得候、場所ノ
義ハ鼠山拜借被 仰付候間、其心得ヲ以取調候様可被
致候、且又鉄砲等相用候義モ有之候ハ、右場所ハ四
月ヨリ七月迄ニ限り其余ハ難相用候旨被相達候、此旨
差含候様可有之候、

八月

五〇四ノ九 八月六日三番頭へ御達書

文武芸術ノ儀ニ付、文政・天保ノ度相達候趣、此度猶
又相達候ニ付テハ、組ノ者共向後弥相励、此上一際出
精ノ廉相願、往々拔群御用立候者出来候様致勘弁可相
伺候、

五〇四ノ一〇 海防掛ヲ命ス

八月八日

大目付土岐丹波守・御目付平賀三五郎・松平式部少輔
等海岸防禦ノ儀御用取扱被 仰付、

評定所留役ハ同九日御仕置類例集取調御用相勤候ニ付
拝領物被 仰付、

評定所留役組頭松井助左衛門へ金六枚別段銀十枚被下
之、

御勘定評定所留役大森善次郎・豊田榮次郎へ銀十枚別
段同十枚ツ、

御勘定木場龍平・吉田雄藏銀五枚別段同三枚ツ、被下
之、

五〇四ノ一一 齊彬公水戸中納言殿へ与フル書簡(第一)

五月二日

拝受ノ刀試断並琉球事件

尊書謹拝見仕候、入梅中鬱々敷天氣御座候得共、益御
機嫌克被遊御座恐悦御儀奉存候、然ハ過日ハ国狎(仲カ)・豚

肉進上仕候処、不存寄以御直書御手製ノ佳品拝領被仰

付重疊難有奉存候、先年頂戴仕候後久々ニテ拝味仕候

テ難有奉存候、将又先頃拝領ノ御刀早速於国許試仕候

処、一ノ胴土壇通ニテ切味申分無御座段申来、早速拵

申付置永ク家宝ニ可仕ト重疊難有奉存候、扱琉球之義

如命誠ニ不一方心配仕候、去ル三月十六日便(モウ)ニハ未タ

跡船モ不相見得段申来候、異人之様子且申掛候趣意内

密可申上候得共、今日ハ書取出来兼候間、近日中極内

以直書申上候様可仕候、先ハ御請迄早々可申上如斯御

座候、恐惶敬白、

巳五月二日

修理大夫齊彬

上御請

五〇四ノ一二 全上第二

弘化二年十月十一日薩侯往復

洋書及琉球事件

寒冷之節先以起居万福拵賀之至存候、其後ハ異船之義

モ不承候処、何ソ珍事モ有之候ハ、極密承リ申度候、
扱ハ此品不腆ニ候ヘ共、弊国之産故御一笑ニ進申候也、

巳月十一日

二白、不順時候御加養專一ニ存候、先達テ御書藏蘭書
目録御問合申候処、今以何等御答モ無之候得共、海内ヘ
広リ候品拙老ヘ御秘ニモ及申間敷、彼カ術ヲ取テ彼ヲ
防禦シ、乍不及天下ノ御為ニ仕度事ニ候故、相成ハ御
申聞ニ致度候也、

修理太夫殿
参

齊昭

五〇四ノ一三 全上第三

弘化二年十月十三日薩侯答書

蘭書等貸借

寒冷之候御座候得共益御機嫌能恐寿之至奉奉存候、然
ハ昨日ハ御国産ノ御品頂戴仕、千万難有奉存候、早速
ニ拝味仕候処珍敷御品ニテ重疊難有奉存候、将又蘭書

之義珍敷品モ無御座候得トモ、書目差上申候トテモ、

御用立候品ハ御座有間敷奉存候、当年ハ是非砲術ノ新
書取寄候答ニ仕置候間、長崎ヨリ参次第早々申上候様
可仕候、昨日ノ「ゼーアルチルレリー」ハ余程珍敷和
解書ニ御座候間、御沙汰次第ニ四・五冊ツ、差上候様
可仕候、全部三十冊ニ御座候、此以後珍敷書類外ヨリ
借出候ハ、御内々申上候様可仕候間、何卒御藏書之内
ニモ不苦候品拝借奉願候、先ハ右可申上如斯ニ御座候、
恐惶百拜、

十月十三日

修理太夫

上
申上

五〇四ノ一四 全上第四

御書難有拜見仕候、益御機嫌克被遊御座重疊恐悦奉存
候、然ハ異船之義其後可申上程之義モ承リ不申候、唐
国ヘ中山ヨリ及尋問申候佛人之義、回答御座候処、イ
ッレ佛船当年可参候間、篤ト及示談候テ帰国之義取計

可申トノ事ニ御座候、其外ハ英船兩度薪水所望ニ着船

仕候計リニ御座候、且亦蘭書之儀恐入奉存候、秘候ニ

ハ無之候得共、御用立候程之書類所持不仕、分離術之

書物計リニテ其外本書之類少々所持仕候、右故是非珍

書取出候テ可申上日々ト延引仕候、重疊恐入奉存候、

所持之分珍書ハ無御座候得共、明日中書付入御覽候様

可仕候、和解書ニハ一部海上砲術全書ト申候「ゼーア

ルチルレリー」、天文台ニテ和解出来候品、極内分相

頼、先月末手ニ入申候、右御用ニ御座候ハ、入御覽候

様可仕候、他ハ何卒御秘シ被下候様奉願候、今日書

目差上候筈ニ御座候得共、無抛義ニテ取込ミ恐入候得

共明夕迄ニ差上候様可仕候、将又何寄之御品頂戴被仰

付難有早速拜味可仕、重疊難有奉存候、先ハ御請早々

奉申上候、謹言、

十月十二日

松平修理太夫

上
御請

尚々、御端書難有奉存候、寒冷之候乍恐御自愛被遊候

様奉存候、以上、

五〇四ノ一五 全上第五

弘化二年十一月十一日 薩侯往復

洋書貸借及狎其他物品贈受

寒冷之節益御機嫌能被遊御座奉恐寿候、然ハ所持之書

物三部入貴覽候、甚見苦敷書物モ御座候得共其儀ハ御

仁免奉願候、「ゼーアルチルレリー」之義ハ、當時少

々外ヘモ借遣シ置候間、帰リ次第可奉差上候、夫共御

急ニモ御座候ハ、手元ニ在合之処可差上候、実ハ有馬

筑後懇望ニテ借用致写候事ニ御座候、且又御蔵書御目

録難有奉存候、左之分御序之節拜見奉願候、「ロイテ

ン」一代合戦記・草木養方書・「エウロツパ」帝王列

伝、右之分相願度甚恐入候得共、和解御出来ノ品ハ和

解書拜見仕度奉存候、将又此節イキリスブツク之珍書

御取入ニ相成候哉ニ外ヨリ承知仕候、若シ不苦義ニ御

座候ハ、拜見之義奉願候、且豚肉此節ハ時節モ後レ風

味モ如何ト奉存候得共、御好ニ付進上仕候、将又狎之

義時々不快之由持病ニ相成候義ト奉存候、此節宍疋在合モ御座候間今日差出申候、尊意ニ叶候ハ、進上可仕候、無病ニ御座候仲間合モ宜敷狎ニ御座候、先ハ御請旁奉申上候、猶後日万々可申上候、恐惶頓首、

霜月七日

松平修理太夫

上
申上

「スマルレンヒユルグ」

五冊

「カステレイン」

三冊

「ヘルハンデリング」

一冊

五〇四ノ二六 水戸侯齊彬公へ与ル書翰

朶雲拜誦、雪寒一層栗烈、先以起居万福拵賀之至ニ存候、陳ハ御一諾之寄書三部御許借、其他数品御投惠、御厚意令深謝候、急遽ニ謄写申付、卒業候ハ、返却ト存候、将又拙家所蔵ノ三書、弊邑ヨリ来着次第可供覽祝候、先ツ御報迄、早々不尽、

巳仲冬十又一

修理太夫殿
御報

齊昭

別楮、御所蔵之奇書和解申付候テハ隙取返却モ遅引可致、若別ニ和解ノ書有之候ハ、夫ヲモ御許借希度申進候処、和解ハ未御出来ニ不相成由何モ承リ申候、

一七一・アルチルレリーハ有馬へ御廻シ置ニ付、若急候ハ、末之方ニテモ宜敷哉ノ由、御懇篤之儀、謄写先後ニ相成候テ全備可相成候事故、御有合之分御許借可給候、ロイテン一代合戦記・草木養方書・歐羅巴帝王列伝、右三書ハ一昨九日国許へ申遣候、将又近来珍書取入候哉之儀、一小冊之地図ノミ、外ニハ得不申候、

一御国産之黒狎^種殊ニ御秘蔵之由、御割愛不堪感謝候、御左右御馴^{眺カ}眺ト相見ヘ直ニ拙膝ヲ離レ不申候、御手入故毛艶又格別ニ存候、尚又食物等之義御示教可給候、去春放逸ノ狎モ取寄候処至極静ニ相成、一同無事ニ有之候得ハ、其内ニハ育子モ可有之楽ミ申候、

一御国産之大根扱々見事ナル珍品、早速賞味、尚又御守殿へモ内々差上申候、

一豚肉不相換膏味沢山賞嗜致候、扱ハ弊産鰯・鯛〔鰯カ〕廉少

〔御入器返却之証迄ニ候、芝〕御法事等ニテ延日ニ相成、

風味如何ト令苦心候、扱又黒狎ノ御報何ソト心懸候得共存付モ無之、偶手元ニ有合候弊邑拙工之鉄鏝、並拙著之碑本表寸志候、御叱留候ハ、大幸不斜候、御近臣伊集院・折田・伊木・菊地・山田等蘭書並狎之儀ニ付家僕ヨリ度々対談、彼是周旋ニモ預リ候由、依テハ此碑本之内各賜候様ニト内々存候也、丙丁、

五〇四ノ一七 齊彬公水戸中納言殿へ与ル書翰第六

弘化二年十二月廿九日薩侯答書

西洋種樹法 発焰火法並書籍ノ件

昨夕ハ尊書被成下難有拜見仕候、寒冷之砌御座候得共、益御機嫌能被遊御座恐寿之至奉存候、然ハ寒中御尋トシテ御懇命被仰下、且又珍敷御品頂戴被仰付重疊難有奉存候、先ハ御請御礼可申上如此御座候、余ハ来春可申上候、恐惶謹言、

極月廿九日

尚々、寒氣折角御加養專一奉存候、此鳥不珍存候得共一昨日於下屋シキ捉飼仕候付進上仕候、以上、

修理大夫

上 御側中御請

五〇四ノ一八 全上第七

御添書拜見仕候、拝借蘭書之内種樹書之分少々和解モ取掛リ拜見仕候、今シハラク拝借奉願候、外二部〔ハカ〕ニ圖之分拜見仕候テ此間返上仕候、種樹書ハ成丈和解為致候心得ニハ御座候得共、工者之モノ無之候間少々手間取可申ト奉存候、扱発焰火ノ儀私ニハ未タ製作モ不仕候、外々委敷存モノ御座候間承リ候テ、近日中委細可申上候、乍末昨日拜領之御着誠ニ美味ニテ、昨夜早速頂戴仕有難奉存候、将又先頃ハ家来へ遣候様石摺沢山拜領被仰付、重疊難有、銘々へ申聞皆々難有頂戴仕候、私ニ置千万難有奉存候、且又和漢之御藏書之内拝借相願候テモ御許容可被下哉、尤當時差掛リ相願候品モ無御座候得共、御内々伺置度乍恐奉申上候、此段宜敷御

披露奉願候、以上、

弘化二廿九日

添書 御側中御請

五〇四ノ一九 灰吹銀

弘化二巳年七月(吹塵録鈔)

灰吹銀々箔ノ令ヲ申明ス、

五〇四ノ二〇 諸幣引替

弘化二巳年十月二十九日

諸幣引替当十月ノ積リ去辰年十月相達候処、今以残リ
アルニ付、来十月迄引替所差置ル、ノ令アリ但シ去年ノ令私記ニ見スヘ、

五〇四ノ二一 拝借金之件

弘化二巳年十二月

領分半毛、余損毛有之、可為難儀思召候段、別段之訳ヲ以拝借

一金五千兩

戸田山城守殿

午ヨリ十ヶ年賦

同

一金貳千兩

右同断

本多越中守殿

同

一金貳千兩

右同断

松平玄蕃頭殿

五〇四ノ二二 弘化二年十一月達書

廿三日

金三枚・時服三別段 巻物五

御目付

遠山半左衛門

長崎表御取締之義立合、並当七月長崎表ヘイキリス

船渡来ノ節御用向立合候ニ付被下之、

右於御右筆部屋縁頼老中列座、下野守申渡之、

若年寄中侍座、

弘化二年十二月十三日

上使伊奈熊藏

御鷹之鷹二

松平大和守

同 馬場大助

同

松平阿波守

同

美濃守養父隠居
松平備前守

同

同 戸田能登守

松平攝津守

同 黒田五左衛門

同

同 村上周防守

松平左京大夫

右之通被遣之、

松平大學頭

同

同 淺野一學

大隅守嫡子

松平修理大夫

時服ニツ、

御先手

林 式部

勤仕並寄合

筒井紀伊守

同

同 青木新吾兵衛

細川越中守

學問所御用相勤骨折候ニ付被下之、

同

同 本多丹下

松平出羽守

若年寄中侍座、

右於御右筆部屋縁頼老中列座、備前守申渡之、

同 馬場大助

西丸御小姓組

阿波守養父隠居

松平彈正大弼

銀十枚

大島甲斐守組

井戸鎮次郎

同 村上周防守

於學問所講積仕候ニ付被下之、

同

左京太夫父隠居

松平式部大輔

右於同席同人申渡之、侍座同断、

同 戸川助次郎

銀座年寄

弘化2年

右於燒火之間主膳正申渡之、

數年出精相勤候ニ付
取來飯米十人扶持ニ
被直被下、別人扶持
扶持被下之、三段三人

辻 傳右衛門
秋 田 内 記

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

弘化三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数五二枚）」の記載あり〕

目録

総覧

仁孝天皇崩御ノ報

和宮御生誕

米国軍艦浦賀ニ渡来通信貿易ヲ請フ

各藩狼狽武備ヲ修ム

洋変ノ小寇ヲ不侮云云ノ勅命

外国処分ノ令

異国渡来届振

漂流人列レ渡リ云云、和蘭人申立長崎聞役届書

和蘭人風説書和解

外国船処分長崎奉行意見

米国軍艦浦賀ニ来リ貿易ヲ乞フ

松平下總守伺書

当時ノ形勢

幕府、松平大和守・同下總守浦賀警衛ヲ勞フ

異国入相当時ノ概況

丙 弘化三年

紀元二千五百六年 清曆道光二十六年
西曆千八百四十六年

仁孝天皇（惠仁）即位三十年文化十四年丁丑

十月 四十八才

將軍家慶（十二代）襲職九年天保九年戊戌月

齊興（二十七世）知政三十八年文化六年己巳六月五十六才

五〇五 総覧

正月

水戸支族松平申之助、徳川齊順ニ徳川齊昭ノ冤ヲ^{〔其カ〕}袁訴ス、元日

江戸大火アリ、此日西北風烈シ、死人山ノ如シ、

小石川馬場武家邸ヨリ夫火シ、十五日
築地・鉄砲洲・佃島ニ至ル

幕府旗下士ノ類焼スル者ニ拝借金ヲ許ス、十九日

天皇不予ノ報江戸ニ至ル、晦日

二月

令シテ諸国人口ヲ調査ス、三日

天皇崩ス、仁孝天皇ト諡ス、十日（実ハ正月六日）

和蘭国王ノ献品ヲ江戸佃島ニ焼ク、十七日

三月

琉球国久米島ニ異船一隻来リ上陸シ食料・薪水ノ乏シキヲ手真似スルヲ以テ、之ヲ与へ去ラシム、十七日

丹羽長富、明朝記事一部ヲ幕府ニ献ス、

幕府、江川太郎左衛門^{謹山代官}ヲシテ管内諸島ヲ巡視セシ

ム、二十三日

筒井紀伊守^{奇合}海防意見書ヲ上ル、

四月

英国船来球シ医一名・妻子四人ヲ留メテ去ル、五日

佛国船来球シ甲辰年留置ノ佛人ニ面語シテ去ル、七日

幕府、松平慶親ノ政績ヲ賞シ鞍鍔ヲ与フ、廿三日

五月

三河国幡豆郡雷雨雹降ル、四日

諸家ノ蔵版ニ係ル者ヲ学問所ニ納本セシム、五日

齊興、方今海防ノ必要ナルヲ察シ各自ニ節儉ヲ専守セシム、八日

米国人七人東蝦夷「エトロフ」ニ漂到ス、十一日

佛国船琉球ニ来リ交易セン事ヲ乞フ、許サス、一人ヲ留メ、甲辰留メノ二人ヲ載セテ去ル、十二日

齊興、江戸芝藩邸ニ至ル、十五日

幕府、細川齊護祖先以来ノ政績ヲ賞シ時服及ヒ鞍鍔ヲ

与フ、十八日

琉球国運天港ニ佛国軍艦渡来ノ報鹿兒島ニ至ル、廿七日

閏五月

先帝皇女降誕和宮ト称ス、五日

幕府令シテ突ヲ嚴禁ス、五日

幕府、長崎奉行ヲ旧ニ復シテ二人ト為ス、十九日

齊興、佛国船来琉ノ報ニ接シ直ニ之ヲ阿部正弘ニ告ク、

廿日

寺社・町・勘定三奉行及ヒ大目附・目附並ニ林大學頭

等ニ命シテ異国船ノ処分ヲ議セシム、廿二日

阿部正弘、佛国来琉ノ事ヲ聞キ商人ヲシテ事実ヲ料

シ、齊興ニ意見ヲ問フ、廿二日

阿部正弘、筒井肥前守ヲシテ齊彬ニ処分ノ意見ヲ問フ、

二十三日

齊興、齊彬ト議シテ国老島津久浮ヲ帰国セシメ、警衛

ヲ指揮セシム、二十五日

阿部正弘、留守居早川兼彝ヲ呼ヒ、齊彬、齊興ニ代リ

帰国指揮セン事ヲ内論ス、二十七日

米国軍艦二隻浦賀ニ来リ交易ヲ請フ、警衛諸侯兵ヲ増

シテ變ニ備フ、廿七日

京都学修院成ル、二十七日

齊興、閣老ノ内論ニ随ヒ、齊彬ヲシテ帰国指揮セシメ

ン事ヲ請フ、即日之ヲ聽ス、二十八日

齊彬、阿部正弘ノ邸ニ臻リ外国ノ処分ヲ議ス、二十九日

六月

齊彬登營シ帰国ノ恩ヲ謝ス、將軍躬親カラ対外国臨機

処分セン事ヲ委任ス、又閣老等委任書ヲ授ケ更ニ優待

ス、朔日

齊彬、六日ヲ期シテ発程セン事ヲ稟申ス、朔日

大久保因幡守・一柳一太郎並浦賀奉行ニ命シ、米国軍艦ニ国

法ヲ論シテ其請ヲ許サス、五日

阿部正弘、留守居ヲ呼ヒ大命ノアルアリ、齊彬ノ発程

二日ヲ延期シ六日ヲ以テ来邸セン事ヲ促ス、五日

齊彬、帰国発程ヲ八日ニ延期ス、五日

齊彬、阿部正弘ノ邸ニ閣老及ヒ筒井肥前守等ト会シ、
外国処分並開港ノ可否ヲ議シテ刻ヲ移ス、

浦賀碇泊ノ米国軍艦去ル、七日

佛国船三隻長崎ニ来リ、前年其国人漂到ノ事ヲ陳シ以
後救済セン事ヲ乞フ、七日

国老島津久寶ヲ海防掛トナス、十四日

用人倉山久壽ニ番頭ノ權ヲ假シ、一隊ヲ附与シ山川港
ニ出張シ、琉球ノ再報ヲ俟チ渡琉スヘキヲ命ス、十四日

齊彬、外国船処分ノ為メ帰国ノ飛報^{日六}鹿兒島ニ達ス、十
四日

国老島津久浮昼夜兼行シテ江戸ヨリ至ル、十七日

島津久浮ヲシテ指宿郷ニ出張シ琉球ノ再報ヲ俟チ渡琉
セシム、十八日

鎌田出雲・川上式部等ヲシテ島津久浮ニ從ヒ臨機琉球
国ニ出兵セシム、十七日

和蘭商船曩ニ依囑ノ劍付銃・鉄煩・小軍艦ヲ齎ラシ長
崎ニ至ル、二十一日

薩摩国山川沖ニ外国船出沒ノ報至ル、廿二日

七月

国老碇山將曹、財政ニ関シテ照会ス、五日

諸侯從者ノ行装等旧来拝領免許ノ由緒ヲ録上セシム、
五日

藤堂高猷、資治通鑑ヲ幕府ニ献ス、十七日

齊彬帰国入城ス、廿一日

高島高教、長崎商館ノ例規ヲ乱セシヲ以之ヲ罰ス、二十
五日

本庄茂平次・武田矢柄・盛善右衛門・神代徳次郎等三
十余人ヲ処刑スル各差アリ、尋テ百四十余人ヲ罰ス、
廿五日

伊澤美作守粗忽ノ罪ヲ問ヒ之ヲ譴責ス、廿五日

齊彬、久光ヲ召ヒ琉球ノ処分及ヒ警戒ノ意見ヲ問フ、
廿六日

齊彬、国老等ヲ会シ琉球及ヒ海防策ヲ問フ、廿六日

齊彬、在魔琉吏ニ在琉外国人ノ動靜ヲ問フ、廿七日
藩士島居平七・同平八、高島高教ノ嫌疑ニ確リ姓ヲ成

田ト改ム、

松平大和守、松平下總守ヲシテ浦賀港ヲ警衛セシム、
齊彬、大砲ノ製造方ヲ指揮ス、
齊彬、琉球ニ飛舟ヲ発シ、幕命ヲ奉シ専ラ平穩ヲ旨ト
シ、処分セン事ヲ令ス、廿九日

八月

琉球ヨリ再報アリ佛国軍艦既ニ内地ニ向フト、或ハ暗
礁ニ触レ辛ク那覇港ニ帰ルト、乃チ齊興之ヲ阿部正弘
ニ告ク、朔日

佛国船敢テ異状ナキヲ以テ、鎌田出雲等ノ山川港ノ警
衛ヲ解ク、朔日

熊倉傳十郎・松平隠岐守・小松典膳浪人一橋門外ニ於テ
親伯父師匠ノ為ニ讎本庄茂平治ヲ討ツ、

齊興、琉球ノ事アリ来年期ニ先チ正月月中旬帰国シ、齊
彬ヲシテ参府セシメン事ヲ請フ、之ヲ聽ス、二十日

英国船三隻琉球国ニ来リ国王ニ面セン事ヲ請フ、王病
ト称シ許サス、二十三日

英国船琉球ノ沿海ヲ測量シテ去ル、廿八日

齊興、英国船琉球及ヒ諸島ヲ測量セシ事実ヲ具申ス、
詔シテ海岸防禦ヲ嚴ニセシム、廿九日

九月

六月初旬ヨリ九月初旬ニ至ル迄淋雨、江戸近傍洪水甚
シ、

京都大風雨、加茂川水溢ル、二日

齊彬、和洋砲術ヲ封内谷山郷中ノ鹽屋大砲場ニ覽ル、
十六日

三奉行・兩目付ニ命シテ、長崎奉行ノ上申書及ヒ佛人
ノ書翰ヲ議セシム、二十八日

十月

所司代酒井忠祿ニ命シテ、琉球・浦賀・長崎ニ来リシ
外国人ノ事情ヲ奏セシム、三日

齊彬、城下近傍ニ放鷹シ民ノ疾苦ヲ問ヒ偶々細民ノ喫
食ヲ見テ飯ヲ饗セシム、後、世子ナル事ヲ聞キ大ニ恐

懼ス、十二日

因老調所廣郷、種子島六郎ヲシテ指宿郷温泉場失火ノ原因ヲ調査セシム、

齊彬、軍事掛及ヒ大砲教師等ヲ率ヒテ封内西南海岸ヲ

巡視シ、砲台建築場ヲ検定シ、各所ニ操練ヲ見ル屬従
国老

島津、十五日

齊彬、騎馬微行シテ民情ヲ視察ス、

齊彬、正装出行ノ途次、神社・仏閣ヲ過レハ必ス鹵簿

ヲ停ム、是ヲ以テ人民愈敬伏ス、

江戸大風雨、廿三日

十一月

松平豊熙、藩内海備ノ事ヲ以テ例期ニ先チ国ニ就カン

事ヲ請フ、之ヲ聴ルス、二十五日

齊彬、家伝ノ犬追物ヲ見ル、此日天気清明、廿五日

十二月

齊彬、城北伊敷村ニ放鷹シ民家ニ入り疾苦ヲ問フ、二日

幕府令シテ絵草紙ノ禁令ニ触レシモノヲ戒飭ス、三日

江戸大震ス、八日

三奉行・両目付ニ命シ浦賀ノ守備ヲ議セシム、十三日

清国道光帝崩御ノ報琉球ヨリ齎ラス、廿八日

三奉行・両目付ニ命シテ長崎ノ守備ヲ議セシム、廿四日

五〇六 仁孝天皇崩御ノ報

正月晦日主上御不子ノ旨京都所司代ヨリ注進ニ依テ、

品川豊前守民繁ヲ被遣、

天気ヲ伺ハシメタリ、

二月十日 主上御諱
惠仁 御不子之処御養生不被為叶、当

六日実ハ正月
六日ト云 崩御ノ由諸司代ノ注進來ル、

依之来ル十四日迄鳴物停止、伺御機嫌惣出仕、崩御

後大行天皇、後ニ仁孝天皇ト諡シ奉ル、同三月四日

山陵弘化廟泉誦寺緩山、御塔如例、〔痛カ〕

五〇七 和宮御生誕

閏五月十日姫宮御誕生有之

和宮ト奉称 御母公新興侍伊房也、

五〇八 米国軍艦浦賀ニ渡来通信貿易ヲ請フ
弘化三年丙午

閏五月廿七日

米艦二艘浦賀ニ入り通信貿易ヲ乞フ、浦賀奉行諭シテ之ヲ聽サス、其論ス処ノ太意左ノ如シ、

此度我ト交易致シ度旨願出ルト雖、我日本国ハ新ニ外国ノ通商通信ヲ許スコト古ヨリ堅キ国禁ナル故早々帰帆イタスベシ、先年ヨリ度々通商ヲ願ノ国アリト雖同様ノ事ナリ、此後幾タヒ来リ願フトモ無益ノ事也、勿論外国ノ事ハ長崎ニ於テ取扱フノ国法ニテ、此地ハ外国ノ事ニ預ル所ニ非レバ、願申旨アリテ来ルトモ事通セザレバ、再ヒ爰ニ来ル事ナカレト云云、此艦居ルコト三日ニシテ重テ来港セント辞シ去レリ、此時幕府ハ浦賀奉行ニ密諭シテ薪水・肉菜ヲ与ヘ懇諭シテ去ラシメタリト云フ、○此時邊ニ大久保因幡守・

一柳一太郎ヲ浦賀奉行ニ命シテ諭サンメタリ、○浦賀及ヒ内海ノ守備各藩ニ令シ、各多少ノ兵ヲ出スニ付テ雜沓極マレリ、本藩ニ於テモ在邸ノ人員ヲ田町ノ別邸ニ屯シテ予メ不虞ヲ戒メタリ、

五〇九 各藩狼狽武備ヲ修ム

幕府ヲ初各藩モ同シク泰平ヲ謡ヒ、操練ハ勿論武器ノ修繕サヘ閑等ニ附シ、幾百千年モ如此キノ者ナルヘシノ思ヒシニ、近年外国船屢々渡来、或ハ沿海ノ地ニ出沒スルニ由リ、少シク心ヲ之レニ用ルノ風アリト雖モ燒眉ノ急ニ迫リタリトハ思ハサルノ人多シ、然ルニ近年和蘭人ノ忠告ニ依リ、幕府ハ武備ノ必要ナルヲ覺リ操練ヲ催ス等ノ令ヲ発スルニ至リシモ、僅ニ其期ヲ止ムルニ至ラサリシヲ以テ、當時ノ形勢ヲ知ルニ足レリ、之レ幕府ノミニアラズ各藩モ皆然、本藩ニ於テモ従来大砲操練ハ四月ヨリ八月二期トシタリ、之レ他ニアラス、放鷹ノ為メ田島ノ間ニ諸鳥ヲ聚養スルカ如キ設ヲナスカ故、秋期ヨリ春末ニ至ルマテ砲発ヲ禁シタル者

ナリ、今ニシテ之ヲ名ツクルニ何トカ云ハン、如此ノ
施政ナリシ故、嘉永ノ始外船渡来ノ際周章狼狽モ怪ム
ニ足ラス、

五一〇 洋変ノ小寇ヲ不侮云云ノ勅命

八月十九日

朝廷ハ關東ニ勅シテ、国体ヲ辱シムルコトナカレトノ勅
命左ノ如シ、

近来異国船時々相見候趣風聞内々被聞食候、^{〔難カ〕}難然文道
能修武事全整候御時節、殊ニ海辺防禦等堅固之旨被聞
食候間御安慮ニ候ヘ共、近比其風聞屢々有之、彼是被
為掛靨慮候、猶此上武門之面々洋変之事不侮小寇不畏
大賊宜シク籌策有之、神州之瑕瑾無之樣精々御指揮候
テ弥可被安宸襟候、此段宜有御沙汰候事、

此勅令ハ布告シタルニハ非サレトモ、一般ニ流布シテ靨
慮ヲ惱シ玉フノ一端ヲ窺ヒ知ラシメタリ、

五一 外国処分ノ令

外国船処分一変
七月

幕府令ヲ下シテ曰、異船ヲ処スルノ法ハ文政八年ニ於
テ已ニ令セシ所ナルカ、今ヤ政務皆寛大ヲ以テ旨トス、
是ニ由テ外国船ト雖トモ、其難破漂流ニ遭テ薪水・食
料ヲ乞フカ如キアラハ、義之ヲ救ハサルヲ得ス、救ハ
サルニ於テハ是怨ヲ外国ニ結フナリ、之ヲ結フヤ寛大
ノ政旨ニ戻ル、故ニ異船ヲ見ハ情状ヲ視察シ、若シ漂
泊抛ル所ナキ者ナルニ於テハ宜ク救恤スヘシ、然レト
モ決シテ上陸セシム可ラス、又決シテ辺備ヲ忽ニスヘ
カラズ、彼、我カ救恤ニ狎ルカ若クハ異議ヲ主張シ、
我言ニ從ハスンハ、直ニ撃テ之ヲ卻ケヨ、其然ラサル
モノ、如キハ努メテ寛大ノ処置ヲ施シ、一ニ文化年間
布ク所ノ令ニ從フヘシトノ議ニ依リ左ニ布令セリ、

文政八年打私ヒ令
参考

外国船ノ処分ハ屢変更セリ、中ニモ文政乙酉月ノ令ハ
左ノ如シ、<sup>當時ノ老中久保加賀守、
ノ建議ニ出タリト云フ</sup>

異国船渡来之節取計方之義前々数度被仰出有之、魯西
亞船之義ニ付テハ、文化之度改テ相触候次第モ候所、

「イギリス」之船先年於長崎及狼籍、近来ハ所々へ小

船ニテ乗ヨセ薪水・食料ヲ乞ヒ、去年ニ至リ候テハ猥ニ致上陸、或ハ廻船ノ米穀島方ノ野牛等奪取候段、追々横行之振舞、其上邪宗門ニ勸入候致シ方モ相聞難捨置事ニ候、一体「イギリス」ニ不限南蛮西洋之儀ハ御制禁邪教ノ国ニ候間、以来何レノ浦方ニ於テモ異国船乗寄候ヲ見請候ハ、其所ニ有合候人夫ヲ以テ、不及有無一凶ニ打払、遁延候ハ、追船等指出ニ不及其分ニ差置、若押テ致上陸候ハ、搦捕又ハ打捨候テモ不苦候、本船近付居候ハ、打潰シ候共是又時宜次第可取計旨、浦方末々ノ者マテ申含メ、追テ其段届出候様改テ被仰出候間、得其意浦々備向手立之義ハ土地相応実用專一ニ心掛、手重ニ過不申又怠慢ニモ無之永続可致便宜ヲ考へ、銘々存分ニ可被申付候、尤唐・朝鮮・琉球杯ハ船形・人物モ可相分候得共、阿蘭陀船ハ見分ケモ相成兼可申、右等ノ船万一見損シ相誤リ候共御察度ハ有之間敷候間、無ニ念打払ヲ心掛図ヲ不失様取計候義專要之事ニ候条、無油断可被申付候、右之趣可相触候、

二月（文政八乙酉）

別紙之通從公義被仰渡候条、御当国之儀ハ東西之海岸数十里ヲ相拘候ニ付、何時渡モ難計候得ハ夫々御手当向嚴重可被仰付候、津々浦々郷士・百姓・町人・浦人等ニ至迄厚相心得、帆影見懸次第注進第一之事ニ候、右之趣早々不洩様可致通達候、

三月日詳ナラス

御家老座印

此ノ布令ニ依リ藩吏ハ東南西ノ沿海各郷ヲ巡回シテ警備ヲ敵令シ、然シテ後毎歳春秋其筋ノ吏員海岸守備ノ巡視ヲ例規トス、又同時ニ左ノ如ク達セラレタリ、

五二二 異国渡来届振

異国船国々へ渡来或於海上出会候節、向々ヨリ之届書多分荒増之義ノミ申聞、内実之事情ハ難相分儀モ有之候間、以来浦々末々迄モ不相包有体ニ可申出旨兼々申含置、兎角事実無相違申聞候儀可為專要候、今般異船打払之義被仰出候モ事ヲ好ミ候筋ニハ無之候へ共、近来之様子難打捨置次第ニ付被仰出候事ニ候条、精々念

入可被申付候、国々廻船・漁船海上ニ於テ異国之船ニ
相親ミ候義ハ前々ヨリ御法度ノ事ニ候、今般浦々ニ於
テ異国船乗寄次第可打私旨改テ被仰出候間、船方・漁
民等弥嚴重ニ相守、船々乗筋等可成丈ケ異船ニ不出会
様心掛可申候、若異国人ニ親ミ候義ヲ隱置キ後日相頭
ル、ニ於テハ可被処嚴科、有体訴出候ハ、一旦同意之
者ニテモ御褒美可被下候間、不相包可申出者也、

二月

右之趣浦々へ建札致シ置候様向々へ可被相触候、
右通被仰渡条堅ク可相守モノ也、

三月 日詳ナ
ラス

御家老座印

右城下揭示場ヲ初各郷並津々浦々毎ニ揭示セリ、
天保十年英国船我国海辺ニ来航スベキ説アリ、思慮アル
輩ハ妄リニ掃攘スルハ却テ費端ヲ開カン事ヲ憂フル者多
シ、然シテ又左ノ布令アリ、

大目附へ水野越前守殿御渡

異国船渡来之節無ニ念打私可申旨文政八年被仰出候（
前記）、然ル所當時万事御改正ニテ享保・寛政之御政事

ニ被復、何事ニ寄ラズ御仁政ヲ被施度トノ難有思召ニ
候、右ニ付テハ外国之者ニテモ逢難風漂流等ニテ食物
・薪水ヲ乞候迄ニ致渡来候ヲ、其事情不相分一凶ニ打
私候テハ万国へ被為対候御処置トモ不被思食、依之文
化三年異国船渡来之節取計方之義ニ付被仰出候趣ニ相
復候様被仰出候間、異国船ト見受候ハ、得ト様子相糺
シ、食料・薪水等乏敷帰帆難成趣ニ候ハ、望之品相
応ニ相与へ帰帆可致旨申論、尤上陸ハ為致間敷候、併
此通被仰付候ニ付テハ、海岸防禦ノ手当ユルカセニ致
置宜敷ナド心得違ヒ、又ハ猿ニ異国人ト親候義ハ致間
敷筋ニ付、御警衛向之義ハ弥嚴重ニ致シ、人数並武器
手当等之義ハ是迄ヨリ一段手厚ク、聊ニテモ心弛ミ無
之様相心得可申候、若異国船ヨリ海岸之様子ヲ窺ヒ、
其場所人心之動静ヲ試ミ候為ナドニ鉄砲ヲ打掛候類可
有之哉モ難計候へトモ、夫等ノ事ニ動揺不致、渡来ノ
事实能々相弁へ、御憐恤之御趣意貫キ候様取計可申候
サレトモ彼方ヨリ乱妨之始末有之候カ、望之品々与へ
候テモ帰帆不致及異儀候ハ、速ニ打私ヒ臨機之取計

ハ勿論之事ニ候間、備向手当之義ハ猶追テ相達候次第
モ可有之候、文化三年相触候趣、書留ハ可有之候へ共
為心得別紙写相達候、

参考

文化三年相触候写

先達テ魯西亞船長崎へ渡来イタシ通商等之儀相願候へ
共、難取用筋ニ付其旨申論シ、先年与置候牌モ取上ケ、
以来乗渡間敷旨堅ク申渡シ帰帆為致候ニ付、再渡ハ致
間敷候へ共、此後万一漂流ニ事ヨセ乗渡リ、何レノ浦方
へ船ヲ繋キ申間敷者ニモ無之候間、異国船ト見受候ハ
、早々手当致シ、人数等ノ差配リ先々見分之者差出得
ト相糺シ、弥魯西亞船ニ無相違相聞候ハ、能々申論シ、
可成丈ケ穩ニ帰帆致候様ニ可取計候、尤実ニ逢難風致
漂流候様子ニテ、食物・薪水等乏シク直ニ帰帆難相成
次第ニ候ハ、相応ニ望ノ品相与へ帰帆可為致候、且
何程相願候共決テ上陸ハ不為致、帰帆迄ハ番船付置見
物等ヲモ相禁シ、其段早々可有注進候、尤再心申論シ

候テモ相拒帰帆不致及異議候ハ、時宜ニ応シ不及伺
打払、其旨可申聞候、右体之始末ニ至リ候節ハ、諸事
寛政三亥年異国船ノ義ニ付相触候趣ニ准シ取計可申候

正月

其他猶警備ノ事ヲ令セラル数条アリ、其要ヲ約スレバ之
ヲ待ニハ寛ヲ以テシ、之ニ備ルニ嚴ヲ以テスルノ趣意ニ
外ナシ、是レ外国船処分一變ノ期トス、

五二三 漂流人列レ渡リ云云、和蘭人申立長崎聞

役届書

十月

当秋長崎入津ノ阿蘭陀船主ヨリ申立候イギリス船ノ内
ニ、日本人七人漂流仕候ヲイギリス船洋中ニテ救助候
由、右ヲ蘭人見受候間、日本国ノ義ハ鎖国ノ禁ニ候得
ハ、他国ヨリ直ニ届候事ハ出来不申、阿蘭陀人へ受取
候テ相属可申旨兼テ申渡有之候間、此方へ渡シ可然由
申談候処、イギリス人申候ハ、此方ヨリ直ニエフ江府ト云フ事
ナラへ届可申、其方ノ世話ニハ相成不申ト申断候由、

十月

五一五 外国船処分長崎奉行意見

右長崎聞役ヨリ藩庁へ注進ス、

右書付写別ニ書通共二冊、五通添、越前守田中休藏
ヲ以一座へ渡シ、勘定奉行遠山左衛門尉受取之、

一 漂流ノ日本人為乗組候異国船渡来可致哉ノ風説書、阿
蘭陀カビタン差出候ニ付、取計方ノ義文化程度松前表へ
ヲロシヤ船渡来ノ節被仰渡候御書付之趣意、今般評議
ノ様ニ付テハ不明ニ有之哉取調可申上旨、

五二四 和蘭人風説書和解
当秋阿蘭陀船入津ノ節カビタン共ヨリ書出候風説書ノ
様、長崎奉行久世伊勢守伺ニ付、

天保九戌年十月

左候へハ来春ハ浦賀へ参リ可申哉、送り参リ候者ハヒ
チマンホント申者ニテ、東洋十六島ノ総督ノ由、人数
モ多ク召連可申由、

去ル五日評議致シ可申上旨被仰聞、御渡被成候久世伊
勢守相窺候書面一覽仕候処、此度入津仕候阿蘭陀カビ
高野長英カ夢物語ハ斯書ニ因ス
ンタ差出候横文字書付和解為致候処、漂流之日本人七
人為乗組候モリソント申エゲレス船漂流人送越候様
右ハ内実商売相願候為メ江府近海へ至ル之風説有之由
右之通日本人異国へ漂流罷在候趣ニ付、手寄モ有之候
ハ、重テ入津之節連渡候様、当秋阿蘭陀人出帆之砌可
申渡哉之段、御内意相伺候様ニ御座候、此度林大學頭
並神尾山城守・水野舍人・御勘定奉行・吟味役等取調
申上候書面夫々一覽之上勘弁評議仕候処、元来異国へ
漂流之日本人連渡候義、兼テ阿蘭陀人ニモ得心罷在、
殊ニ今般カビタン申立候風説書之義ヲ以、右漂流人連
渡候様阿蘭陀人へ申渡候ハ、漂流ヲ憐ミ求候義ト彼
国之者共推考致間敷共難申、左候テハ外国ニ被対候趣
意ニ被触候筋ニ付、漂流人連渡候義ハ阿蘭陀人へ申渡
候ニ不及旨被仰渡可然、且前書之次第ヲ以此後エゲレ
ス船江府近海へ渡来之程モ難計候得ハ、異国船打払之
義ニ付テハ文政八酉年之御書付ニ、イギリス船先年於

長崎及狼籍、近年ハ所々へ乗寄薪水・食料ヲ乞ヒ、去ル寅年ニ至候テハ狼ニ致上陸、或ハ廻船之米穀島方之船・野牛等奮候段、追々横行之振廻、其上邪宗門勤〔勳カ〕入候致方ト相聞候ニ付、旁難捨置事ニ候、一体イギリ〔カ〕スニ不限南蛮西洋之儀ハ御制禁邪教之國ニ候間、以来何レ之浦方ニ於テモ異國船ト見受候ハ、其所ニ有合セノ人夫ヲ以一円ニ打払、逃延候ハ、追船等ヲ不及差出其分ニ差置、押テ致上陸候ハ、擲取又ハ打留候テモ不苦候、本船近付候ハ、打潰候共是又時宜次第可取計旨被 仰出候、尤唐船・朝鮮・琉球ナトハ船形・人物モ可相分候得共、阿蘭船〔脱カ〕ハ見分ケ相成兼可申、右等之船方一打誤候共御察度有之間敷候間敷、無二念打払〔行カ〕ヲ心懸凶ヲ不失様取計候処專要ニ有之、況交易願望之趣意ヲ含、信義ヲ唱、漂民ヲ困ニ乱ヲ謀候段、猶更不屈之仕方ニ付、大學頭申上候様モ有之候得共、右体蛮夷之奸賊ニ対シ接待之礼ヲ可設筋ニテハ有之間敷、縱令漂民連渡候共、山城守申上候文化度長崎表へ渡来致候魯西亞船、日本漂流人連渡候節被仰渡候様等思弁

候テモ、御仁恵被為施候ハ平常ニ可有之義ニテ御國之災害ヲ被為除候為、賤民之存込ニ不拘御取計可有之ハ

御國政之大事、一時摧蛮之御所置ニ付敢テ君徳ヲ薄シ候道理ハ有之間敷候間、向後弥右書付之趣ヲ以無二念打払候義勿論ニ有之、尤海岸御備之義ハ兼々向々ニ於テ心得罷在候得ハ、今般風説之様別段右之向へ御沙汰ニハ及ヒ申間敷義ト奉存候、右評議仕候趣書面之通ニ御座候、書付五通返上仕候、以上、

参考

天保十三年壬寅七月「カヒタン」へ可申渡旨ノ書付、異國船日本之沖合へ渡り来ルノ時打払方之儀〔ヒカ〕ヲコソカニ取計フニ付、阿蘭陀船モ長崎之外へ乗ヨスル事有間敷ニモ無之、船之形似寄候得ハ兼テ其旨相心得不慮之過無之様心懸通船致スヘキ旨、文政八年申渡置候処、當時何事ニヨラス

御仁恵ヲ被施度トノ難有 思召ニ付、外國之モノニテモ難風ニ逢漂流等ニテ、食物・薪水ヲ乞迄ニ渡り来リ

候テ、其事情ニカ、ハラス一凶ニ弓・鉄砲等ヲ打放候
 テハ、外国ニ対シ信義ヲ失ハレ候御所置ニ付、今ヨリ
 以後ハ異国人渡リ来候共食物・薪水等ヲ乞ノ類ハ打払
 ハス、乞フ旨ニマカセ帰帆可為致事ニ取計フノ間、阿
 蘭陀人共心安ク通船致スヘク候、外国ノ者タリ共簡程
 迄ニ信義ヲ厚ク 思召難有儀ヲ能々相ワキマヘク候、
〔脱アルカ〕

参考

文政之末和蘭加比丹江戸ニ来リ定規ノ拜礼ヲ修ム、此
 時從医シールトナル者諸学ニ通達ス、高橋作左衛門
 モ其學術研究ノ為官許ヲ得テ、シバく談話ニ及フ、
 同人文化年間魯国ヨリ我国ニ使セシレサノフカ著書日
 本記事ヲ蔵ス、出シテ高橋ニ示ス、高橋之ヲ讀ムニ我
 邦ニ益アルヲ以テ大ニ希望シ百方請求スレトモ与ヘス
 云ク、我貴邦ノ図ヲ求ム事切ナリトイヘ共、当時國禁
 ナルヲ以テ良図ヲ得ルニ道ナシ、高橋是ヲ察シ窃ニ井
 野勘ケ由カ測量図ヲ送リテ其書ト交換ス、後此事発覺
 シテ所刑セラル、從是此図和蘭ニ入ル、彼レ其図ノ經
 緯ヲ改メ、以テ航海図ヲ造リ和蘭國都ニ鏤刻ス、英・

参考

佛モ又其都府ニ翻刻シ、我国近海之航海欠クヘカラサ
 ル海図ト成レリト云（高橋所刑宣告書参照）

天保十二年閣老水野越前守殿へ水戸前納言殿ヨリ送ラ
 レタル書ナリトテ流布シタル者、左ノ如シ、
 前略、印旛沼御普請云云、破船之義ニ付人命御救ノ

為被仰出候御仁惠難有御事ニ候得共、破船ハ鹿島ノ
 ミニ限リ候事ニモアルマシク、俄ニ風波アシク相成
 候得バ、外海ハ何レニテモ破船可相成候得バ、実ハ
 右堀割ノ入費ニテ堅牢ノ船艦御製造被遊タキ物ヲト
 存候云云、其上ニモ堅牢ノ船御製造被遊、大名ハ勿
 論船持共マデ御免被遊候得バ、上ニハ一錢ヲ費シ玉
 ハスシテ日本國中御仁慈行渡リ、且又是迄ノ姿ニテ
 ハ非常ノ節イカニモ被遊方無之所、右ノ通り御船ヲ
 始メ大・小名並船持共ニモ堅牢ノ船艦有之候得バ、
 非常ノ節右ノ船舶御集メ被遊候得バ格別御備可相成
 候所、ソレラハ御沙汰モ無之候テ、ヒタスラニ内川
 運漕ノ事ノミ御世話被為在候ハ、イカニモ外国へ対

シ神國ノ御恥辱ニモ可相成ト実ニ残念千万ニ存候、
彼和蘭杯ハ数万里ノ渡海時節ヲアマラズ崎陽ヘ致
往来候、僅カニ三百里ノ海上ニテ難船ナド申スハ何
事ゾヤ、三本帆ハサテ置、五本・十本ナリトモ勝手
次第丈夫ナル船艦サヘ御免被遊候ハ、鹿島洋ハ申
スニ不及、何方ノ運漕モ指支アルマジク候、且又當
時ノ御趣意ニテハ海防モ此方ヨリハ一切手出シ致サ
ス、陸ヨリ大銃打掛候迄ニ候処、実ハ船ノ製作サヘ
宜敷候ハ、此方ヨリモ乗出シ、四方八面ヨリ自由自
在ニ敵ノ船ヲ打スクメ不申候テハ、必勝ハ得ガタク
可有之候、常々彼ハ海ニ習候上思フ儘ニ便利ノ船ヲ
造リ候ニ、我ハ常々海ニナレズ、船ノ製造ヨロシキ
ヲ考付候ニモ御法ニテ製作相ナラズ、無拠危キ船ニ
テ打過候得バ、非常ノ節ニ至リ船御入用被仰付候ニ
モ、製造ニモナレ不申乗様モナレ不申、勝ヘキ理一
ツモ無之候得バ、何レノ道丈夫ナル船致製造人々習
居不申候テハ、此上神國ノ持張何共無覚束ト日夜致
苦心候、乍併武家諸法度ノ面ニ荷船ノ外大船停止ト

申義有之内ハ、何程愚拙ナド致建議候トモ、御用ヒ
モ有之マジク候得トモ、畢竟右法度ハ往古邪教ノ害
御遠ケ被遊シ為ニ、一切外国ヘノ通路ヲ御絶チ被遊
候御主意ト奉推察、其時ハ御良法トモ可申候得トモ、
時勢モ古今之變通有之候上ハ、何卒變通ノ廟算祈望
スル所ニ御座候、仍テハ第一品川・浦賀・長崎・新
潟其外公辺ニテ御用船御製造、随テ国々ヘモ御免被
仰出、尤津々浦々嚴禁ヲ御設ケ御行届ニ相成候ハ、
努々外国ヘ私ノ通路イタシ候者モ有之マジク、只今
ノ船ニテ難風ニ逢候ハ、一本ノ帆柱切捨申候故、其
後ハ流レ次第ニ候故、自ラ漂流モ可有之、却テ大船
ニテ数本帆ヲカケ候得バ、只今ノ船ノ如ク外国ヘ漂
流ハ有之間敷候、往古ト違ヒ近来ハ外国ノ船々モ折
々沖合ニ相見候得ハ、奸商等通好イタシ候心得ニ候
ハ、今ノ船ニテモ通路モ相成、又彼船ヘ乗移候ハ
、西洋迄モ罷越スベク候得バ、堅牢ノ船御製禁ニ相
成居候得バ、外国ノ通路ハ無之ト申スハ昔ノ事カト
存候、東照・大猷二公再ヒ此世ニ出サセラルマジク

候所、当將軍家ハ即チ二公ノ御再来、諸有司ハ当時

輔佐ノ再来ト存候間、何卒右御条目御改メ大丈夫ノ

船艦御製造並ニ諸国へ御免ノ義、近々被仰出候様不

勝至願候、追々諸侯へモ御手伝被仰付、又難波富商

(大坂豪商へ課金ヲ云フ、達文後ニ記ス)へモ御用金被

仰付候由ニ候得ハ、大船ノ義モ公辺ニテ被遊候分ハ

速ニ相弁可申、尚又大名並船持共モ人命ニ拘リ候事

故、御免ニサへ相成候ハ、不日ニ堅牢ノ船艦日本

中ニ数多出来、後々ハ紅毛ニマケ不申工夫モ考付可

申候、尤印幡沼等ノ義ハ上ノ利益ニ相成候事故、右

ヲ必スアシキト申ニハ無之候得共、夫ノミニテ大船

ノ御一挙無之テハ、申サバ本朝ノ勢只アトシサリニ

ノミ成行可申ト、遺憾ノ余リ毎度乍御面倒愚論致吐

露候也、

八月十五日夜東海寅宮閣
旅寓ニテ認ム

齊昭

越前 殿水野

大炊頭殿土井

備中守殿堀田

信濃守殿眞田

五一六 米国軍艦浦賀ニ来リ貿易ヲ乞フ

閏五月廿七日米国軍艦二艘浦賀ニ来ル、府内及ヒ隣近

騒然、這船一ハ七百人乗、一ハ五百人乗ニテ大砲各数

十門ヲ備タリト 遽ニ各藩ニ命シテ沿海ヲ警衛セシム

居ルコト数日、六月五日浦賀奉行大久保因幡守ニ命シ

テ国法ヲ論シテ其請ヲ許サス、米人服セス、重テ来港

シテ論スル旨アラムト、同七日去ル 此時守防ノ命ヲ

受ケタル藩々ハ、東西ニ奔走シテ武器ヲ蒐メ或ハ彈薬

ヲ買ヒ、漸ク其場ノ都合ヲ合セタリト、二百年來昇平

ノ化ニ浴シ、兵馬ノ事ハ夢想ニ帰シタルノ末ナルカ故

幕府ノ驚愕、諸藩ノ狼狽、人民ノ騒駭推テ知ルヘキナ

リ、

五一七 松平下總守伺書

此度異国船渡来ニ付、警衛戦士為乗組相州野比濱遠沖

江本船相固罷在候処、此度之異国船ハ行粧不通、押

テ帰帆被仰付候得ハ異変生シ可申モ難計候間、帰帆被仰渡候節、貫目以上之大筒大和守・下總守両手江一太郎様被仰渡候ヘ共、貫目以上ノ大銃数挺之手当ハ無御座、台場江居置有之候大銃ハ目方重ク容易ニ船積難相成、急速之間ニ合兼、且海岸警衛大切ニ付難取揚、仮令数挺之大銃ニテ相仕掛候共、船打十分之業ハ三百目ヲ限り候例ニ付、貫目以上之船備之大銃無之候旨申上候処、大和守様ニモ大銃数多無之趣御答被申上候処、一太郎様手厚之儀共難申旨御察討有之、恐入罷在候儀御座候得共、船備之大銃数多無之候ニ付、手厚ニ無之旨被仰聞候ハ迷惑ニ奉存候、

一帰帆被仰渡候節異変生シ候得ハ、何様之計策ニ可被成哉之旨御相談有之、大和守様御家来大船ニ大銃ヲ仕掛、異国船間近ク備置打払方可然旨被申上候上ハ、浦賀御奉行モ御同案之趣ニ候テ、御取極ニ可相成哉ニ相聞候付、一旦御席ヲ下リ申談度旨御答申上置候テ、大和守様衆江大船之計策ハ甚不宜、大船ニ大砲数挺備置打払之手段一応尤ニ相聞候得共、第一進退

不自由、其上千石積何艘ニテモ異国船ニ準シ数挺相仕掛候訳ニモ難行届、外聞計ニテモ実用無之、若敵船ヨリ相掛リ大船ノ底ヲ打碎候得バ、一発ニテ破船ニ及様仕懸ケ置候大銃海底ニ沈、打手ハ素ヨリ空敷溺死イタシ不弁ニモ可有之哉ニ申談、其旨浦賀御奉行江可申入処御趣意ニ反シ候儀ニ付、一応与力中江及内談候旨申上候方ト申談、前書之趣意与力中江内談仕候処、甚以不容易儀儀候^{マズ}テ、今更右様之儀申出此場之取計如何致シ候心得ニ候哉、此場ニ至候テハ死ヲ以公義ニ申訳致候ヨリ外無之儀ニ付、奉行始必死之覚悟ニテ罷居候旨申越候付、私共方ニテハ必勝之利ヲ極候得ハ、陸地ニ陣ヲ取、致上陸候ハ、打取候手段之外無之、要害堅固之大船ヲ日本之小船ヲ以戰爭イタシ候儀ハ、不戦シテ敗北之姿ハ眼前之儀ト兼テ申上置候旨申談候処、右様之儀ニテハ御談モ難出来旨被申候、勢難然止候付必敗軍トハ乍存、一手之軍勢討死之覚悟ニ為極、御差図之御趣意相立大船ニ大銃仕掛候テ相備、軍勢之者共此場ニテ必死之苦

戰相極メ可申旨申談、其段浦賀御奉行江御直ニ大銃六挺宛兩家江用立候間、先船主共江声掛置候間、備方ハ勝手次第ニイタシ嚴重ニ相固候様御達ニ付、大銃ヲ仕掛ケ固メ候得共、最初申上候通大船之進退自由難相成候付、押送船江モ百目以上之箇數多相仕掛、繼ケ打之心得ニテ鍛練之者相撰、耆人ツ、乗組大船之間合江相固罷在、浦賀奉行江手筈之通相心得御差凶次第打払候手筈ニ仕掛候処、何等之故障モ無御座穩ニ被仰渡相濟、其後平根山御台場江御呼出ニ付罷出候処、異国船少々故障有之、此上申渡之節如何体野心差挾出帆之節大銃ニテ打払警衛之内何ニテモ打碎候テハ誠ニ犬死ニ付、平根山ヨリ觀音崎迄大小船共一同引上、無滞致帰帆候ハバ宜候、万一江戸ノ海江乘入候形勢相見候ヘハ、富津・觀音崎之間要地ニテ死力ヲ尽シ打沈可申旨兼テノ計策ニテ、無異議御請モ可申上候得共、右等ハ最初ヨリノ手筈ニテ宜、敵船近ク相固故障出来候ニ付、警衛引上候ハ臆候様ニモ相見得却テ疑念生シ候モ難計、右ハ如何之旨申

上候得共、最早御聞込之御様子ニ付、御差凶之通夜中密々引立觀音崎海岸近ク屯シ罷在候処、七日頃出帆仕候趣ニテ、引船ニ可相成數船差出候様被仰、早々引纏ヒ洲之先沖迄引為出候儀ニ御座候、一体海近ク引取候儀ニ御座候得共、觀音崎ハ大和守様御人数固メ罷在候処ニ有之、入混ミ進退之差凶モ難行届、富津之方江引退相固メ罷在候、且又滞船中異国船折々小船ニ取乗、野比濱沖所々測量致候体ニモ相見江、不審ニ存罷在候之処、御趣意モ御座候哉風聞モ有之、如何之儀ト存候内、異国船測量致候趣ニ付、番船急度心得可申旨御沙汰御座候ニ付、昼夜心ヲ附小船ニテ用弁罷出候筋三艘附添者差出候儀ニ御座候得共、風波荒キ節ハ異国船近所ヲ固候ハ素ヨリ、仮令如何様乱妨仕候共海上之儀ハ難制、異国船之小船ハ荒波ヲモ不厭漕歩行候様子御座候間、數百艘之船ヲ以相固メ罷在候得共、平穩之日和之外何ニモ難用立無益之固ト奉存候、一城郭ニ等シキ要害堅固之大船ニ武器夥數仕掛全軍船ト申聞候由之処、三手勢數艘之小

船ヲ浮ヘ高波ノ海上ニ漂罷在、番士・徒士兵共昼夜
苦心格別之事ニ御座候間、聊モ番兵之詮無御座候、
風荒候得ハ直様海岸江引込、風穩ニ相成候得バ、近ク
漕寄相寄候之所業拙儀ニ奉存候、尤大船ハ大銃ヲ仕
掛敵重武威御示被成候趣ニハ御座候得共、日本之大
船ハ進退不弁ニテ、中々御武威敵重ノ詛ニハ無御座、
却テ敵方ニテ計策之拙ヲ見透候儀共、右等モ申上度
候得共、御奉行御差図ヲ拒ミ且ハ手薄ニ相聞候姿ニ
御座候付、御差図通大船借受相固候儀ニテ、実ハ合
戦相成候ハ、勝利共不相心得候、異国船出帆之節手
向イタシ候得ハ、大船乗組等ハ素ヨリ其外番船之者
共ハ空敷討死之心得ニテ無滯出帆仕候得共、再度渡
来候節ハ敵之玉先番船數艘差出、戦士之者多勢乗組
候ハ甚以不覺ト奉存候付、以求異国船江番船用弁見
計付置、警衛船ハ何レモ要害之場所船掛宜キ所ヲ相
固、夫ヨリ海岸ハ又々手配仕敵重相固、万一江戸内
海エ乗入候形勢相見得候ヘバ、於要害必死之力ヲ尽
シ防戦ノ仕方ト相心得度奉存候、唯今ニテモ再ヒ渡

来モ難計、此度之御固通ニテハ空敷士卒ヲ溺死為仕
候、無難ニテモ數日風波ニ漂サレ身体勞シ非常之用
難相働、防禦之御用難出来奉恐入候儀ニテ、數艘之
番船差出候儀無益之処御察被成下度、兼テ見込之通
海岸ニ相固罷在、依時宜臨機之取計仕候様致度奉存
候、兎角士卒之勞敷數奉存候、且又海岸敵重ニ相固
候ハ兼テ相心得罷在候得共、段々申上候通広場之義
中々以手配行届不申、長崎杯ハ両海岸凡六七丁、海
上ハ七八里ト申事ニ及承、相州路大和守様御持場
ハ内海五六里、外海廿八里余、三場所中々以少計之
人数ニテ敵重之固難行届、甚以手薄之儀恐入罷在候
得共、内海許ニテ七八里之海岸届キ不申心配之儀
ニ御座候、何レ追々可申上候得共、出帆中之儀内々
各様迄荒増申上候間、宜御差図有之候様仕度奉存候
右日本国之武威外国江不被見透様仕度奉存候儀付、
不願恐怖御内々申上候間宜奉願候、以上、

六月廿一日

松平下總守 忠

川越藩ハ平素武備アルノ聞ヘアリシカ、果シテ奉命ノ次

日曉天五百余人ノ兵堂々ト列伍ヲ正シテ出軍シタリト、
當時平素ノ説ニ異ラサリシヲ一般感賞セリ、

五一八 参考 当時ノ形勢

此ノ米艦ハ北亞米利加洲「ポストン」ヨリ来リ、艦將
「ヒト、ル」ト云フ、將ニ進テ江戸海ニ入ラントス、
浦賀奉行大久保忠豊急ヲ幕府ニ報ス、松平齊典・松平
忠國下総守ヲシテ相房ノ海浜ヲ守ラシム、二家兵三千ヲ
出シテ不虞ニ備フ、忠豊屬吏ヲシテ米艦ニ至リ其状ヲ
問ハシム、米人曰、本国ノ大統領貴国ト好和ヲ結ヒ通
商ヲ開カント欲シ、僕等ヲシテ貴国ノ全權ニ謁シ、以
テ欲スル所ヲ請ハシム、故ニ此ニ至ルト、米艦長四十
二間、横凡十三間、巍然トシテ海上ニ聳エ、外面貼ス
ルニ鍊鉄ヲ以テス、巨砲九十四門其兩舷ニ列シ、戰士
各八百人宛然鉄城ノ如シ、我兵之カ為ニ愕然其守ル所
ヲ失ス、忠豊之ニ報セシメテ曰、我国禁アリ、外国船
ノ兵器ヲ擁スルモノハ近海ニ入ルヲ許サス、汝幾回之
ヲ請フモ益ナシ、但其薪水ノ如キハ吾敢テ之ヲ餽ラン、

米人之ヲ領ス、乃薪水猪及菜瓜瓜カ若干ヲ給シテ以テ遣リ
還ス、是役ヤ米人倨傲、我国人ヲ視ル事嬰兒ノ如ク凌
侮至ラザルナシ、戍兵憤怒殺氣胸ニ塞ツ、忠國建議シ
テ曰、我国輕舸薄弱砲戰ニ利アラズ、巨船ノ如キハ進
退意ニ適セス、之ヲ以テ渠ノ進退神ノ如クナル者ニ当
ル當ニ勞シテ功ナキノミナラス、我兵ヲシテ空ク魚腹
ニ葬ラシメントス、臣未タ其可ヲ知ラザルナリ、且我
兵船數百虜艦ヲ困ミ攻ム、盛ハ則盛ナリ、然レトモ青
天白日ニアラザルヨリハ未タ其鋒ヲ争フベカラズ、若
シ夫風波晦冥ニ逢ヘハ退テ之ヲ海浜ニ避ケンノミ、適
以テ懦弱ヲ示スニ外ナシ、今虜艦ヲ視ルニ風波ヲ避ケ
ス晦冥ヲ厭ハス、東甌西馳坦途ヲ往カ如ク、在左カ顧右瞻
手ノ舞ヒ足ノ踏ムニ似タリ、砲戰ノ利我舟船ノ比ニア
ラス、故ニ敵ニ海岸ニ備ヒ彼ノ陸ニ就クヲ待テ後之ヲ
擊ハ名正クシテ事成ラン、其進テ凌侮ヲ受ケンヨリ居下
カラ陸戰ノ必勝ヲ保ツニ若カスト云云、

五一九 幕府松平大和守同下總守浦賀警衛ヲ勞フ

八月三日藩邸留守居江通知

松平大和守

名代

松平志摩守

先達テ浦賀表江異国船致渡来候節、御備場江相越警

衛向之儀及差図、彼是骨折候趣相聞一段之事ニ候、

此段可申聞トノ御沙汰ニ候、

松平大和守

名代

松平大藏少輔

同断之節早速御備場江相越警衛向及差図、手筈モ行

届彼是心配仕骨折候趣相聞一段ノ事ニ候、此段可申

聞トノ御沙汰ニ候、

一時服十

松平大和守

名代

松平志摩守

同断之節御備場江御暇被下候処、早速出立致候段達

御聴一段ノ事ニ被思召候、依之被下候、

一時服十

松平下總守

名代

松平大藏少輔

同断之節御備場江御暇被下候処、即日致出立候段達

御聴一段ノ事ニ被思召、依之被下候、

右ハ御両家ヨリ為御知相成候間、先例ニ準シ御祝詞被

仰進候云云、

五二〇 異国入相当時ノ概況

弘化三年丙午閏五月廿七日夕七時頃大雷雨

中橋・八丁堀・本所其外所々雷落、

此日夜ニ入浦賀港へ異国船乗入候段御届

在府浦賀奉行俄ニ御暇被 仰出候、

翌廿八日松平大和守・松平下總守兩人總房御備場へ御

暇被 仰出、下總守ハ即日人数繰出発足三千人之由、

六月三日下總守出張、

大和守へ在国故人数追々発足ス、主従旅裝束羽織・陣

笠等相用、

其外海岸附ノ領主追御暇被下、

是ハイキリス船ノヨシナリ、

弘化 3 年

〔表紙〕

齊興公史料
市來四郎編
弘化三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数四十一枚）」の記載あり〕

目録

- 国老島津石見ニ至急帰国ヲ命ス
- 公卿中へ達書
- 無名氏当時水戸ヲ評論ス
- 当時封内金価
- 長州侯賞誉
- 細川侯賞誉
- 齊興公生母寶鏡院殿卒去

二月田御茶屋焼亡

齊彬公歳末ノ賀ヲ受玉フ

齊興・齊彬二公帰国ニ就謝恩御登營

琉球へ英船渡来ノ報

長崎へ和蘭国使節船渡来ノ報

以上拾式条

目録

- 軍役高改正御小姓組頭ニ係ヲ命ス
- 朝鮮国ニ異国船来ル宗對馬守届書
- 鎌田正純日記抄
- 百目以上之砲新製届出令
- 長崎出張御役者桃灯〔挑カ〕〔標〕標章
- 禄高改正之始末
- 御一門家及門葉家所有石高
- 門闕其他御目見以上総数
- 薩隅日三州諸郷士家部及石高

五二一 国老島津石見ニ至急帰国ヲ命ス

嶋津石見殿

右ハ琉球ヘ大粧兵船来着ニ付、為

御名代被差下、手厚致指揮候様被仰付、一備之人数被召付山川ヘ被差出置候処、右船無異儀出帆惣テ帰帆之段在番ヨリ申出候間、右被召付候人数都テ引取被仰付候、此旨向々ヘ可申渡候、

午七月

壹岐島津
久武

五二二 公卿中ヘ達書

今度天下ニ統弊風改事ニ付、武家ヨリ嚴重ニ触示候旨天威不淺、従来節儉質素之処々啓国太平貴賤不限別テ是ヲ慎ザレハ下自カラ道ヲ不知、終ニハ国ヲ傷民ヲ苦シメ、上下共天誅ノカルヘカラス、

右能々其分ヲ弁、衣服・食物ニ至迄奢ニ至タルヲ第一慎可申条、殿下格別御趣意ヲ以被仰出候間、各難有相心得、少モ正意違戻無之様可被致者也、

関白殿下月番

上田越後守

公卿一統

並地等官人共ヘ

五二三 無名氏当時水戸ヲ評論ス

世ノ中ノ千変万化ハ今ニ不限儀ニ候得共、水戸様御領分ハ去春中ヨリ村々寺々江（マ）置候半鐘鐘等又ハ儒・仏等御引上ニ相成、鉄砲・大筒等御鑄立被成候由、其後同秋中ヨリ八宗・十宗共御潰被仰付、寺・在家共本尊・釈（地）加・弥陀何ニ限ラス御取上ケ相成、寺社奉行於御宅不残焼捨、是迄御城下最寄ハ去秋ヨリ改リ、此節ハ潮來領ニ付御取還リ御座候、此節私儀潮來江罷越委細承候処、寺ハ惣体御潰ニテ僧頭ハ帰俗被仰出、御朱印地或ハ除地ニ寺格有之候分ハ、郷士・藩中等江被仰付、御家中又ハ農家ヨリ女房ヲ被遣、百七拾ケ寺程還俗、郷士・御家中或ハ苗字大小御免ノ百姓ニ被成御取立、扱又自奠祭ト号死人取置候儀ハ四門江青龍・白虎・朱雀・玄龜ヲ縋リ、神道ノ法ニテ御下文有之、右ハ親類

組合之者読上ケ其後一同礼拜相濟埋ケル、勿論クタ々々ワケ有之仏ノ法ヨリ祭ル事御座候間、元ヨリ戒名ト申ハ無之、人相果候得ハ苗字御免ニ相成何ノ誰墓ト印ヲ建置申候、尤是迄寺内へ建置候石仏、是又御引上ケ相成、御普請石垣ニ被成候趣ニ御座候、併寺院ハ迷惑ニテ、帰俗ノ僧ハ十カ一ニテ跡ハ追々御領分致出立候間、還俗ノ僧ハ昨日迄ハ清僧ヲ立菩薩サマニ有之、今日ハ本尊ヲ焼捨ハ在家ニ拝領ノ女房ヲ持何ノ誰ト改メ、衣ハ上ミ下ニ替リ珠杖ハ鑓・大小ニ引替、経文ハ兵学ニ眼ヲサラシ兵子ニ相成申候、潮來領ニモ郷士ヲ願候和尚モ有之、又御領分ヲ立去候法印・上人モ多分ニテ、殊之外僧頭ノ騒敷世ノ中ニ相成申候、扱欽明天皇ノ御宇聖德太子仏法御弘メ候処、世ノ中一変之時節ニ至リ旧来ノ昔ニ立戻リ、神道盛ニ成行候儀ト奉存候、余リ珍敷事ニ付其荒増ヲ御聞ニ入申候、

右誰人カ姓名不知云云、

五二四 当時封内金価

弘化三丙午正月七日金一兩八貫文ヨリ七貫文替被仰出候、同四月十二日同一兩七貫文ヨリ七貫五百文替被仰出事、

五二五 長州侯賞替

長州萩侯ヨリ御通知書

四月廿三日御吹聴左之如シ、

松平大膳太夫慶親

家督以来政事向行届領内治方宜趣達上聞、一段ノ事

ニ候思召候、依之御鞍鍙被下候、

右於御白書院縁頼老中列座、〔列カ〕備前守申渡候、

五二六 細川侯賞替

細川家ヨリ御通知

五月十八日

細川越中守齊護

高祖父以来引統政事向行届領内治方宜趣達上聞、一

段ノ事ニ候 思召、依之時服三十年御鞍鍙被下候、

右於御白書院縁頼老中列座、山城守申渡候、

五二七 齊興公生母寶鏡院殿卒去

同日十八日美ハ十、九日、寶鏡院様御卒去福昌寺ニ葬ル、寶鏡院殿圓爾妙鑑太姉ト諡ス、姓鈴木氏、齊興公生母鈴木氏、

五二八 二月田御茶屋焼亡

同年十一月二日巳刻、二月田ノ別館御風呂屋ヨリ出火焼亡ス、〔齊彬〕公ハ湊浦ノ黒岩某カ家ニ避ケラル、出火之因由詳ナラスト雖モ全ク御浴殿ノ失火ナリト云フ〔実ハ烟火製造中誤テ失火ス〕、同五日同所御養駕御帰城ノ途ニ就カル、同日谷地頭〔山脱カ〕飯屋御一泊、同六日御帰城、同十二日伊敷村・永吉村・草牟田村・原良村等ニ御鷹狩尾畔ノ別邸ニ御出、夫ヨリ各村御放鷹、鶴・鷹数羽ノ御獲物アリ、此時各村ノ民家へ御踐入り貧富親シク御覽、或ハ村民道路ヲ修築シ或ハ仮橋ヲ架シ或ハ掃除スルヲ見玉ヒ、近習ノ人ニシテ郡吏〔論カ〕ニ論シテ曰ク、放鷹ハ一ニ村民ノ貧富ノ如何シテ視察センカ為メナリ、殊ニ農家ハ寸隙貴シ、道路ハ依然タルヘシ、敢テ予カ本

日慢遊ニ闕スルコト勿レト直ニ去ラシメタリ、郡吏・

村民敬服シテ去ル、此日草牟田村ニ於テ侍臣山口不及

カ宅ニ卒然入り玉ラセラル、家族 公ナルヲ知ラス、

近習ノ人ナラムト某接待ヲナス、後ニ聞ヒテ驚懼セリ、

或ハ村民ノ家ニ臨ミ玉ヒシニ、時シモ午食ノ時ナリシ

ニ、粗食スルヲ見玉親ラ乞ヒ手ニ受ラレ、少許ヲ味ヒ

玉ヒシトソ、村民ハ、公ナルヲ知ラス、鷹匠役等ノ体息〔休カ〕

・喫烟ノ為メニ来リシト思ヒシニ、後公ナリシ聞ヒテ

驚怖シタリト云フ下伊敷村某門ノ仁右衛門カ家ナリシト云フ 或ハ伊敷村桂庵禪

師カ古墳ヲモ覽玉ヒ、近侍ノ者ニ向テ同僧程朱学ヲ講

シ世ニ益ヲ与ヘタルヲ賞シ玉ヒシトナム、

五二九 齊彬公歳末ノ賀ヲ受玉フ

十二月廿八日歳暮ノ御式、御一門四家其他ノ役員御祝

詞ノ式ヲ受ケ玉ヘリ、

五三〇 齊興・齊彬二公帰国ニ就謝恩御登營

六月朔日

御両殿様 御登城被遊

少將様御暇之御礼被仰上御馬御拝領、

太守様ニモ右之御礼被仰上、無御滞被為濟候処、御

居残ニテ

公方様又々 御座之間御中段ニ御褥・御刀掛等モ不

為被 在其儘 出御、夫

上意御側御近ク御進ミ被遊候処左之通、

一琉球国江異国船渡来之処、彼地之儀ハ素ヨリ其方一手

之進退ニ委任之事故、此度之儀モ存寄一杯〔杯カ〕ニ取計、尤

国体ヲ不失寛猛之所置勘弁之上何レニモ後患無之様及

熟慮、取計向等機変ニ応シ取計可申ト被為蒙 上意、

御請御礼被仰上 御退去被遊、猶又阿部伊勢守様ヲ以

テ御請御礼モ被仰上候事、

但

右様御丁寧成御扱〔老カ〕ハ御考中方其外重キ御役方へ被

仰渡振ニテ、外々様等江被仰候儀ニテハ無之由、

是ハ全御由緒柄御席・御家格等モ格別之御事候付、

別段之以 柄思召、右通被仰出候御事ト、阿部伊

勢守様ヨリ調所笑左衛門御直ニ承知仕候事、

琉球国へ異国船渡来ノ処、彼地ノ儀ハ素ヨリ其方一手

ノ進退ニ委任ノ事故、此度ノ儀モ存寄一杯ニ取計、尤

国体ヲ不失寛猛ノ所置勘弁ノ上何レニモ後患無之様及熟

慮、取計向計等機変〔マカ〕ニ応シ取計可申候事、

右朱書ハ 上意ノ趣万一御聞得難被遊儀モ可有之候付

阿部伊勢守様御直筆ニテ御認被置候趣ニテ、御内々御

渡被成候事、

五三一 琉球へ英船渡来ノ報

五月廿六日琉球国ヨリ飛船二艘到来、一艘ハ何処ノ島

ノ辺ニテカ乗沈メ漸ク一艘来着之由、一艘八人乗ニテ

足輕一人乗付候処、前条乘リ沈メ候テ八人ハ漸ク上リ

候得共、足輕ハ溺死候半ト申事ニテ候、何故ノ飛船カ

ト聞ハ、佛蘭西船ト英吉利舟三艘・夫婦ニ子供二人、

六歳ノ男子ト三歳ノ女、外ニ医師一人上陸為致、三艘

共ニ五月廿三日迄ニ参タル由、五月末迄琉球飛舟式参

度参候得共、御内密ノ事ニテ不相分候云云〔道島正、亮家記〕

島津伊勢様

菱刈安房様

佛蘭西船那覇ノ川口ヘカ、リ居候処、大和船出帆ノ時節ニ付、運天港ニ可廻トテ手当致候処、其日風立浪高々中々大和船杯ハ難相凌相見得候程ノ天氣ニ打立致、殊ニ運天ノ辺コソ瀬原ニテ通舟難致程ノ場所ニテ、其日相廻リ候得ハ夜モ入決テ打破ラン、都テ仕合ナリト

五三二 長崎ヘ和蘭国使節船渡来ノ報

琉人共相歎ヒ居候処、果テソレ見タカト云内ニ、玉卷ツ打出次テハツ撃上候処、白昼ヨリモ明リニ相成、拾三間切ニテ其瀬原ヲコツツリトモ不致、運天ノ湊ヘスツト這入候由、其自由ナル事誠ニ感心致候由、大ノ玉ハ漸ク帆柱丈ケ位上上リ、風強キ時ハ柱ヘ鉤候由言語同断ニテ候上、

去歳六月那覇沖江異国船二艘漂着、言語不相通、(本之)小新等相渡為致出帆候段御届申上候処、被聞召達

公辺御届相濟候旨、被仰下趣承知仕、被入御儀奉存候、

恐々謹言、

閏四月十七日

兼城親方

島津但馬様

御老中ヨリ返答ニ、通商ハ一切不相成トノ趣被申越候由、

参考

八月弘化三年 天皇勅シテ將軍ニ命シ、全国ノ海防ヲ嚴ニシ

外侮ヲ禦キ神州ノ瑕瑾ナカラシム、

四年丁未正月川越^{松平大和守齊典}・彦根^{井伊掃部頭直弼}二侯ニ命シテ相

模海ヲ守ラシメ、若松^{松平肥後守容敬}・忍^{松平下総守忠國}二侯ニ上總・

安房ヲ守ラシム、三月信州地大ニ震フ、損害少カラス

是ニ因テ幕府金壹万兩ヲ眞田信濃守へ、金五千兩ヲ堀

長門守ニ貸与ス、四月二十五日天皇宣命ヲ以テ攘夷ヲ

石清水八幡宮ニ祈ル、

参考

天保十四年 道光二十三年

十月十日、英船老艘貳百六十人乗組八重山へ渡来上陸、

地方測量、十一月廿九日開帆帰去、

十二月朔日、英国船老艘宮古島へ渡来測量、同十六日

開帆帰去、

弘化元年 道光二十四年 是年十月太平・八重山ヨリ上
年英船来ルコトヲ琉球ニ報ス

三月十一日、佛船老隻貳百三十人乗組那覇沖へ渡来、

始テ交易ヲ申出、追ニ大総兵可来ノ間其時ノ通事被致

トテ佛人老人唐人老人残置候テ、同十九日開帆帰去、

弘化二年 道光二十五年

五月十五日、英船老隻貳百人乗組那覇川口へ渡来、去

年佛船ノ来候事相尋、且当七月頃英船可来ノ間、野菜

物等望候へ、送遣呉ト申、是ヨリ日本へ渡海ト申、同

十七日開帆帰去、

弘化三年 道光二十六年 〔頭注〕八月十四日へ琉王清ニ書ラ上ル原否底稿ヲ発スルハナリ

四月五日、英船老隻二十人乗組廣東ヨリ渡来ノ由ニテ、

那覇川口へ来上陸候テ^{伯達令}医師夫婦・男子女子各一人・唐

人一人ヲ留置、同八日開帆帰去、

四月七日、佛船一隻三百人乗組那覇湊へ御碇、大総兵

船貳艘追々可来ノ由申之、此船五月七日ニ及ヒ運天湊

へ移ル、

五月十三日、佛朗西大総兵船式艘運天湊へ碇ヲ卸ス、

四月七日渡来ノ分ト都合三艘トナル、大総兵一昨年ヨ

リ留居候佛人・唐人此兩人ヲ連レ帰り、三・四ヶ月後

又可差越ト申、別ニ佛伯多祿人一人ヲ留メ置、閏五月

廿四日三艘共開帆去、

五月十四日、佛船^{色蘭玩}十六人乗組到来、船修覆致ス、

閏五月十四日、佛船^{色蘭玩}一艘豊見城間切へ来、六月二日帰

去、

七月廿五日、佛船一艘那覇ナバへ来、是ハ閏五月廿四日帰去三艘ノ内ニテ寧波ヨリ引返シ切ルト云、又佛亞臬德一人ヲ留置八月十一日開帆帰去、留住ノ佛人ハ五月ニ留置候分ト併テ兩人ナリ、
八月廿三日、英船三艘那覇ナバへ来、同廿六日一艘開帆帰去、翌日跡ノ二艘モ開帆帰去、

五三三 軍役高改正御小姓組頭ニ係ヲ命ス

川上 式部美久
川上 龍衛久
鎌田 刑部純
喜入 壬生高久

右ハ此節諸士給地高御改正ニ付掛被仰付候条、支配中ノ面々へ申論等手厚ク被取計、限月内ニハ屹ト相形付候様引受可被致取扱候、此旨可申渡候、

十二月八日

笑左衛門調所廣郷

軍役高改正ハ當時至難ノコトナリト雖モ軍事ノ根本ナル

故、此時ニ方リテ改革セサルヲ得サルノ場ニ臨メリ、然ルニ百有余年前ノ法規ヲ以テ処分来レル故錯雜紊乱、法アリテ無キカ如クナリキ、発令スルヤ各痛痒ニ関スル事故、種々ノ手段ヲ以テ損亡ヲ避ントスルノ弊起リタル故、之ヲ匡正センニハ其人ヲ以テセンニ若カシト、右ノ輩ニ特命シテ各管下ニ説諭セシメタリ、此四名ハ数十名ノ組頭中衆望ノ帰シタルヲ撰択セラレタル者ナリ、表面ノ達書ハ右ノ如クナリシモ、實際ハ頗ル困難ナル任ナリシト云フ、

五三四 朝鮮国ニ異国船来ル宗對馬守届書長崎聞役報告

九月二十二日

朝鮮全羅道ノ内禹順ト申ス所へ異様ノ船来舶ニ付、内一艘問情イタシ候処、大西洋屬佛蘭西国ノ人ト申出、同一艘ハ何方へ乗行候哉行衛相知レス、此船甚怪敷相見候ユへ為用達及告知候旨、在役共以書面彼国へ差出シ候、私家来へ相届候ニ付猶又委細ノ様子及尋問候処右問情イタシ候、一艘ハ浅洲ニ乗掛船ヲ損シ、人数凡

六七百人程上陸イタシ、野陣ヲ張り不引払候ニ付、船ノ修覆可致助力哉ト申シ問ヒ候ヘトモ、其儀ニヲヨハス段申聞、人数等ノ儀相尋候得ヘトモ其方ニテ考量イタシ候様相答候由、尤右来船イタシ候ハ二月晦日頃ニ相聞其後引払候、注進無之候ヘトモ今以滞留イタシ居可申哉ト相考ヘ、且ツ行衛不相知一艘ハ其後ノ様子不相分趣、在役トモヘ及返答候段申越候、此段御届申上候、

午九月

宗對馬守

別紙、異様ノ船二艘到船於全羅道禹順地境、而一隻間情則大西洋為佛蘭西国ノ人也、而一艘不知向所則極為殊常、故仰達、貴国亦当許察防禦之事、丁八月十一日訓導述甫季同知印 別差君善下主薄印

別紙對州様ヨリ御奉行所へ御届相成候由ニテ御出入役筋ヨリ内々差出候間、為御見合写取差上申候、且爰元評判ニ、右異国船は琉球へモ往来致シ、彼地ニ於モ對

一州同様ノ振舞致候由ノ風説モ有之候由、此段モ風聞ノ儘御届申上候、以上、

十月

奥 四郎

五三五 参考 鎌田正純日記抄

十月二拾八日雨甲戌間々晴

今日ハ於吉野原 御流義砲術(事實後卷ニ記)、御家老 衆嶋津豐後殿・調所笑左衛門殿御見分有之、御軍役方 御名代嶋津周防殿(久光公旧名・嶋津内近殿(匠カ)(加治木領主久長)ニモ御出張有之、御軍役掛大目附二階堂主計殿 其外御役々モ出張有之、我々共ニハ夜前九ツ半過ヨリ出馬、砲術稽古場之様相揃、正七ツ時惣人数出立ニテ朝六ツ前吉野調練場へ参着、六ツ過ヨリ調練相初メ、其節ハ跡ヨリ馬上ニテ備へ相付候、夫ヨリ五十一「ボンド」(日本開基ノ事實後卷ニ記ス)其外打試、並ニ青山千九郎方備打等八ツ過比相濟 御名代其外御引取、左候テ惣勢之跡へ我々共ニモ相付、引取候テ砲術稽古場へ

一刻出席、帰家、供大迫庄之助・同氏貞太郎・同覺太郎・酒匂仲左衛門・濱田伊兵衛・板坂八之進・財津彦八・川枝吉次郎、中間脇田六郎次郎左衛門、鍵脇田六郎左衛門、小者吉原太郎、其外陣丹荷(ツマ)ツ、合羽籠一荷、夜ハ高張一ツ、袖摺一ツ為持候、且砲術方ヨリ御役名之旗相渡リ、右ハ雇物ヘ足輕ノ場ニテ為特候事、

五三六 百目以上ノ砲新製届出令

近来百目以上ノ筒新規鑄立候節御届不仕向モ有之候間以來御用番ヘ御届書可差出旨大岡主膳正殿被相達、

十一月九日

五三七 長崎出張御役者挑灯標章

一御使番御目付ハ十文字御紋相付、脇ニ使番目附ト書キ可申候、

一右外輕役ハ自分紋所ニ薩州小頭玉薬方向々ト役名書キ可申候、

諸郷物主挑灯

一馬上腰挑灯ニ自分紋所左右ニ付、前後ニ何方物主ト書キ可申候、

一弓張挑灯ハ常式通自分紋所迄ニテ、物主之字書キ申間敷候、

私領(私領トハ二門其他門闕家ヲ云フ)物主小指篋一浅黄地ニ三分一裾紺、何方物主ト書キ可申候、但寸尺等御定之通り、

五三八 禄高改正之始末

諸士(小番・新番・小姓組・与力ノ四級及諸郷士ノ惣称)知行高ノ儀ハ、往古ヨリ先祖ノ勲勞又ハ家筋、勤場之高下ニ依リ夫々被下置、高頭ニ応シ公務ハ勿論非書之備迄モ分限ヲ以テ可致置事故

大中貴様ヨリ第十

大玄院様第廿世綱貫迄

御代々様分テ被仰出置、其上享保十三年御規模帳ヲ以高上高持成等之儀屹ト被仰渡置、其後追々御規格被召居置候処、至当分持高名実行違別テ致混雜居候段被

聞召上候、全体御高之儀ハ治乱共御国役之根本ニテ、諸士知行高モ同様之事故、売買等（領地所有者ノ外悉ナ売買禄ナリ）猥ニ取計候儀屹ト御禁止之候処、大切成知行高ヲ自己之物之様差心得、先祖之勤勞等ヲ以被下置候家柄之面々猥ニ致附屬、格式相当之勤方被仰付候テモ無滞相当ニ相勤候儀モ調兼、平常質素節儉之心得無之、内証之驕ニ所帶方致衰微其身之恥辱ハ勿論、先祖之功勞モ空敷相成、其外少身迎モ右ニ準シ驕奢之振舞有之候処ヨリ、伝來之知行高売払候時宜ニモ成立、分テ不束之至ニ候、勿論高上高持成等（家格又ハ役職ノ高下ニ依テ制限アリ）之儀、家筋勤場之訳ヲ以被成御免事候処、豪富ノ者共（士分ノミナラス商賈等密ニ買取りタルモアリ）御格迎内々過当ニ知行高買取候哉ニ相聞得、分限モ不顧甚以心得違ノ儀ニ候、左ニ候テハ夫々御法通御取扱可被仰付儀ニ候得共、此節ハ別段之 思召ヲ以不被為及 御沙汰、旧來之御規定ニ被復候段被 仰出候、依之取扱向之儀左之通被 仰付候、

一 高値不相濟管之者借金返濟又ハ利弘之方等へ内々ニテ

所務相請取候儀、且高上リ御免無之管ノ者内々ニテ高相求置、別人名前ニテ召置所務米（所務米トハ納額ヲ云フ、則四公六民ノ制ニシテ假令ハ壹石ノ收獲ナレバ四斗ヲ所有主ニ納メ六斗ヲ農者ノ所得スルノ定法ナリ）請取候儀堅御禁止之事之処、当時余人之名前高令支配、所務請取候者有之哉ニ候間、右体之者ハ來申三月限速ニ有体ニ高直願書、又ハ脇方へ致附屬度者ハ其通ニテ限月内屹ト高直可願出候、万一限月相過候テモ高直等不願出者ハ屹ト可被及 御沙汰候、

一 内々ニテ買取置未名前不相直高並借金返濟之方ニ相受取致取納候高有之面々ハ、高員數並郷材・門名（村カ）ハ勿論抱地高之訳委細ニ相記、一帳ヲ以テ來申二月限高奉行所へ可申出候、右届書相記候上相違ノ筋合有之候ハ御取揚可被 仰付、疎略之儀共有之候ハ、可及迷惑（迷惑トハ輕キ刑法ノ通語、譴責之字ニ相当ス）候間、双方引合入念可申出候、

一 自分持高並買取置候高、内々ニテ脇方へ名前頼置候モ有之哉ニ相聞得御法違之事候付、前条同断届可申出候、

取込（取込トハ在職中死亡又ハ罷職ノ者役祿ノ過剩ヲ云フ）

拝借（拝借トハ藩庫ノ金穀ヲ借リタルヲ云フ）滞納有之人、

高買上候儀又ハ高相求候儀不相成御法ニ候得共、此節

限ハ取込拝借滞納有之人ニテモ高直可被成御免候、乍

然取込拝借等返上方ニ付テハ、右高ノ内ヨリ追々吟味

次第上納被仰付儀モ可有之候、

一 跡職（跡職トハ相続者ナク延斯願ヲ云フ）不相究又ハ幼少

ニテ勤方無之者ハ、高直不被仰付御法ニ候得共、是又

此節限高直可被成御免候、

一 高売渡置、高直不願出高主証拠人共ニ死去等ノ者ハ、

当分存生候者売渡証文無之候テハ、高直御免不被仰付

御規ニ候処、右之内ニハ琉球・島方渡海之者モ可有之、

往返日込ニモ可相成事候付、別段之御吟味ヲ以高売渡

置所務米高買取主方へ致取納候儀無相違候ハ、此節

限ハ槌成親類兩人之売渡証文ニ御法之証拠人相立願出

候ハ、高直御免可被仰付候、夫共当人へ掛合不致候、

テ不相成訳モ候ハ、其訳合願出候ハ、何分可申渡候、

一 江戸・京・大坂・長崎在勤之者、高直ニ付掛合不致候

テ不相叶訳モ候ハ、親類等ヨリ致掛合、左候テ其段

委細高奉行所へ可申出候、其上高奉行ヨリ御趣法掛御

側御用人へ申出候ハ、江戸在勤同役又ハ兩御留守居

等へ掛合速ニ返答有之候様取計、是非限日中ニ相片付

候様可取計候、

一 鹿兒嶋高諸郷へ（本藩祿高ノ制ハ領地所有者ヲ除クノ外、悉

賣買祿高ナリ）売渡候儀、且諸郷高鹿兒嶋へ買入候儀御

制禁之事候処、間ニハ抱地高等諸郷へ内々ニテ売渡置

諸郷抱地高内々鹿兒嶋へ買入又ハ現高諸郷へ致取納候

モ有之哉ニ付、本々通差返候欵又ハ高可相求人へ致附

属候欵兩様之間取計、来申三月限屹ト高直等同様可願

出候、郷士其外身分違之者（格式制限ヲ犯シタルヲ云フ）

へ借銀返済之方等ニ持高・抱地高等売渡候儀ハ有間敷

候儀得共、若右様之儀於有之ハ糺方ノ上無用捨取揚可

申付候、

右ハ別段御寛宥之、御沙汰ヲ以右之通被仰付候条、人

々難有御趣意之程厚奉汲受、来申三月限高直（名義書替）

等可願出候、乍此上若等閑之者ハ屹ト可及迷惑候、此

旨向々江不洩様致通達、諸郷・私領等へモ可申渡候、

十月十五日

豊後島津久宝

壹岐島津久武

石見島津久浮

將曹島津久徳

久馬末川久平

笑左衛門調所廣郷

此節格別之

思召ヲ以御軍役方取シラヘニ付、給地高御改正被仰渡候付テハ、高持成高上リ等之儀御法通向々へ相付申出候儀ハ其通可有之候得共、万一心得違内意等申出候儀有之候テハ、御軍役方取調ニ付妨相成候間一切内意等申出間敷候、勿論取シラへ相掛候面々、内意承候者モ有之候ハ可及迷惑候、此旨向々へ可申渡候、

十二月二日

豊後上全

笑左衛門上全

寺社方並御厩(マ)宗門方トハ耶宗及真宗禁絶ノ為設タル局名、拜借金銀有之面々給地高差上、所務代銀ヲ以差引返上被仰付来候得共、此節御改正ニ付テハ諸人同様ノ訳ニ候間、右拜借金返上候テ差上置候高相下候様可致、若返上不相調面々ハ其向々へ成行当月十五日限可申出候、此旨向々へ不洩様可申渡候、

十二月二日

豊後上全

笑左衛門上全

給地高御改正付テハ、追々被仰渡置候通夫々御格式モ有之儀ニ候処、凡下(工商又ハ目見以上ノ従者ノ総唱)之者共持高並抱地高等内々買取居候哉ニモ相聞得、右体之者ハ此内被 仰渡置候通、夫々糺方之上高御取揚可被仰付候、尤凡下之者共ヨリ高買取候者ハ勿論、例令直対ニ不買入手ヲ越シ買入候共御取揚可被仰付候条、

高主旁之儀共入念、若買入居候者有之候ハ本主へ相返、其届高奉行へ可申出候、此旨向々へ不洩様早々可致通

達候、

十二月七日

豊後上全

笑左衛門上全

一新番

右弐百石限

一御小姓与

右百五十石限

一郷土

右五十拾石限

右通今般給地高又ハ御軍賦御改正中分限被相定候条、不洩様可申渡候、

十二月七日

笑左衛門上全

豊後上全

一一所持

一一所持格

右三千石限

一寄合

右弐千石限

一寄合並

右千石限

一小番

右三百石限

但當時御側役以上ノ御役又ハ地頭職相勤候人ハ、

勤役中五百石限

給地高御改正之儀ハ先達テ被仰渡通ニ候処、御高之儀ハ治乱共御国役之根本ニテ、屹ト御規定被居置候処、

近来富家之面々過分ニ買円致取納御作法ニ相背、夫故諸士追年相旁、御国役第一ノ御軍賦モ不相調程ニ相乱

居候処ヨリ、厚以

思召御改正被仰付候儀ニテ、不輕御取扱ニ候、右ハ当

秋取納先、夫々百姓方相糺申出候様請持郡奉行へ申渡
置候処、近来被召出候者（被召出候者云云、諸郷土或ハ門
葉家ノ家来或ハ農工商等ヨリ城下士ニ登用シタル輩ヲ云フ）ニ
モ候哉、庄屋又ハ百姓方へ取納先取繕申出呉候様頼入
候モ有之哉ニ相聞得、右体御軍令ニ相掛候大切成御国
役、厚

思召ヲ以被仰渡候儀ヲ心得違之儀共有之候ハ、別テ不
届之至ニ候、若其通之儀有之、跡達テ於相頭ハ右高御
取揚之上其身ハ被及御取扱、所役並受持郡奉行迄モ可
及迷惑候、最早差出相成候モ有之候得共、申下ケ今一
往間違無之処ニ再調イタシ、鹿兒嶋高・諸郷高取分二
冊ニイタシ、所役連印ヲ以当十二月中無間違可差出候
此旨向々へ申渡、受持郡奉行へモ可申渡候、

〔十二月脱カ〕

〔豊後 笑左衛門 脱カ〕

御当国ノ儀ハ諸士株（株ハ家部ノ誤、則戸数ナリ）不相庇
給地高相少、其上近来高上リ等ノ御格式相馳〔地ミカ〕ミ富家ノ

面々過当ニ買円、当時之形勢ニテハ諸士追年疲勞ニ及
御軍役等相勤候丈無之候付、厚 思召ヲ以此節御改正
被仰付候儀、畢竟右高諸士中へ行渡往々延立候様ニト
之 御趣意ニ候間、大身之面々ハ兼テ高知行ヲモ被下
置、右様厚 御趣意之程自ラ汲受モ有之替候得共、此涯
万一散高等被買円候儀共有之候テハ 御趣意ニ相戻、
殊ニ大身之面々ハ諸士之目当ニモ被相成儀ニ候故、此
節給地高下直ニ相成候ヲ幸ニ買入方有之候テハ風俗ニ
モ相掛、達 御聴候節不都合相成候テハ不可然事候間、
限月内ハ假令高上リ等被成御免候向モ買入方勤弁可有
之候、此旨向々へ不洩様早々可致通達候、

十二月

豊後^全

笑左衛門^全

諸士給地高之儀ハ御軍賦之根本ニ候間、当分通富豪之
面々兼併イタシ候テハ諸士追年致疲勞御軍役モ勤兼候
所ヨリ、此節厚 思召ヲ以御改正被仰渡、誠ニ不容易

大切之御取扱ニ候処、御趣意汲受薄面々、間々は迄之通内々ニテ名前脇方へ相頼置候所存之者モ有之哉ニ相聞得、別テ不束之至ニ候、乍此上右体之者ハ夫々聞合(聞合トハ探偵之通語)之上、右高御取扱急度可被及御取扱(御取扱トハ譴責之通語)候、且又御法通買取候ハ、高並永代壳渡置候高、色々致疑惑片付方(片付方トハ処分或ハ取計ヒノ通語)、埒明兼候哉ニ相聞得、旁不屈之至候間、支配頭ヨリ引受、高奉行方へモ引合支配中之面々へ篤ト申諭、先達テ被仰渡置候通、来三月限成行届出申候様可被取計候、万一支配下(支配方トハ管下ノ通語)之内不正之手筋有之候欵、又ハ来三月相過候迄不片付者モ有之候ハ、高取揚、其身御取扱ハ勿論支配頭可為越度候、此旨向々へ不洩様早々可致通達候、

十二月

豊後全

笑左衛門上全

此節給地高御改正被仰渡人々奉承知候通ニ候、右ニ付

当分余人ヨリ名寄帳(所有証ノ如キモノニテ禄高地ノ田畑・山野等ノ反別・收穫等ヲ明記シ所有主ニ下附シタル者)相請取所務米不相受取者、又ハ余人名寄帳無故致格護置候者有之候ハ、其訳相記名寄帳相添来正月限御勘定所へ差出候様、屹ト不洩様早々可致通達候、

十二月

豊後全

笑左衛門上全

是迄屹ト立(職務ノ重ヲ云ヘル通語)候御役相勤又ハ地頭職被下置候者ハ、持高千石ヨリ内之高上リ被成御免候得共、此節別段御吟味之訳有之、給地高御改正中ハ五百石ヲ限り高上リ可被成御免候、

一祖父・曾祖父代屹ト立候御役相勤候者、又ハ地頭職被下置候者之子孫、小番相勤来候者ハ四百九拾九石余迄之高上被成御免候得共、前条同断御改正中ハ三百石ヲ限高上リ可被成御免候、

一新番相勤候者ハ三百石 被成御免候得共、前条同断御

改正中ハ貳百石ヲ限高上可被成御免候、

一御小姓組之儀貳百石 被成御免候得共、前条同断御改

正中ハ百五拾石ヲ限高直御免可被成候、

右ハ今般厚以 思召給地高御改正被 仰出候付、致治

定迄ハ右之通被仰付候、左候テ持来候者ハ有来之通ニ

候、尤家筋俗姓(家筋俗姓トハ前ニ記シタルカ如ク被召出者

ニ対シタル則新古登用ノ差別ヲ云フ)等ニ応シ差別可被仰

付儀ハ是迄之通ニ候条、此旨向々へ不洩様早々可致通

達候、

十二月十六日

豊後上全

笑左衛門上全

川上五後右衛門

外九人略ス

右ハ此節格別之 思召ヲ以御軍役方被召建、諸人給地

高御改正之儀段々被仰渡趣有之候処 御趣意汲受薄者

モ有之、高直等ニ付種々不筋之儀共取企候者有之哉ニ

相聞得、別テ不束之至ニ候、依之此涯聞合(探偵)等之

儀掛申付候条、御軍役方掛御役々何篇申談相勤候様可

申渡候、

十二月

豊後上全

笑左衛門上全

以上十名ハ横目役ニテ(小監察)此輩ヲシテ正不正ノ所為有
無ヲ探偵シ、違犯ノモノ多ク所刑セラレタリ、

此節給地高御改正付段々被仰渡趣有之候処、御法通買

円候面々、本高主又ハ高上リ等可相済向へ高代年府(

年府ハ年割之通語)入付之取組ニテ讓渡之致内約候者共

有之由相聞得、其通ニテハ限月被定置候趣ニモ相背候、

全体此節ハ現実ニ相片付、給地高行渡リ一統御軍役無

滞相勤候様ト之御事ニテ、格別成 御趣意汲受薄筋ニ

相当リ、別テ如何之次第ニ候、是迄高之本意ヲ不弁御

法通之致買円候儀モ 御寛宥之以 思召不被為及 御

沙汰候、付テハ難有奉承知屹ト心得違之取扱等致間敷候処、今以種々之手筋取企甚不埒之至ニ候、若乍此上内密之申談ヲ以表通り背御法候廉無之候ハ、一往ハ高直可相濟儀モ可有之候得共、追テ内々取与之次第又ハ取納先等微細取調相成筈候付、紛敷致引結等候ハ、其高無用捨御取揚被仰付双方共可及迷惑候、且不能存慮儀有之節ハ其訳高奉行へ申出可得差図、此旨向々へ可通達候、

十二月廿日

豊後上全

〔笑左衛門脱カ〕

給地高御改正治定之者持高之分限ニ応シ御軍賦被相定筈候付、不容易手数ニテ年数ニモ相拘賦ニ候、然ハ御改正中被定置候御作法通高上等不被仰付面々、御改正之儀ハ漸時之儀ト相心得、高名前相頼置追テ自己之名前ニ可相直ト之舍ニテ、其間高名前預リ置候儀ヲ申談候者モ有之哉ニ相聞得、其通ニテハ矢張付高（付高云云

所有王ノ名義ヲ借リタルヲ云フ）同前之儀ハ勿論御軍賦役ニ差支、別テ不都合之至候、右体之者ハ夫々糺方之上附高同様御取揚之上屹ト可及迷惑候、此旨向々へ不洩様可致通達候、

十二月廿一日

豊後上全

笑左衛門上全

寺社方並御既宗門方（同前）へ高差上拝借金被仰付置候面々、此節拝借返上不相調向ハ、余人之高相求候儀ハ自由ケ間敷筋合ニ候得共、小身者ニテ拝借返上不相叶候逆モ纒計之高相求度者モ可有之、右体之者御改正中現地五十石以下之者ニ候ハ、高相求候儀可被成御免候右以上之者ハ不被成御免候、且又是迄取納仕来候高之儀ハ別段之事ニ候、此旨向々へ不洩様可致通達候、

十二月晦日

豊後上全

笑左衛門上全

五三九 御一門家及門葉家所有石高

嶋津 周防忠教久
光公旧名

高卷万四千六百九拾四石式斗四升八合七勺三才 重富

嶋津 岩松忠長

高卷万九千三百三拾八石式斗三升五合七勺五才加治木

嶋津 讚岐敦貴

高卷万五千四百式拾卷石四斗九升六勺九才 垂水

嶋津 安藝剛忠

高卷万三千八百三石三斗五升七合三勺八才 今和泉

以上四家ヲ御一門四家ト唱フ、

嶋津左衛門久
徹

高六千五百六拾四石七升五合四勺六才 日置

嶋津 若狭久
□

高五千九拾九石

川上 筑後久
封

高百七拾五石余

嶋津 大藏久
徹

高式百六拾三石余

嶋津 圖書治久

高卷万五千七百五拾五石五斗七升五合九勺三才 宮城

嶋津 隼人久
宝

高式千六百九拾卷石式斗卷升五勺式才

嶋津 主殿久
滿

高三千五百六石九斗八升九勺五才

嶋津 伯耆久
福

高六千九百三拾四石三斗式升三合九勺

嶋津 壬生久
□

高式千八百式拾九石四斗八升七合三勺卷才 佐志

嶋津 左膳久
□

高千百五拾六石余

新納 波門

高五百拾卷石余

樺山 相馬

高千五百八拾九石五斗卷升六勺三才

嶋津 出雲

蘭牟田

高三万五千三百八拾四石余

都之城

高千六百五拾四石壹斗九升八合六勺貳才

新城

高八百七石余

桂 小吉郎武久

高百拾三石

島津 矢柄

高百五拾八石余

島津 頼母武久

高貳百五石

大野 多宮

高百七拾五石余

島津 求馬

高四石

吉利 仲

高四千貳百三石三斗七升四合九勺

喜入 攝津高久

鹿籠

高三百四石余

島津 内膳

高九百九拾八石九斗貳升五合七勺貳才

町田助太郎成久

高貳百四拾石余

伊集院伊膳

高貳百貳拾貳石余

島津 帶刀直久

高壹万千百六拾石八升余

種子嶋鶴袈裟

高六百拾四石余

島津 内記

高三千四拾四石貳斗五升壹合貳勺八才

島津仁十郎

高八千百三拾七石五斗六合六勺

北郷佐左衛門

平佐

高三百三石余

顯娃 織部

市成

島津 主計

小松 帶刀清廉

高三千拾五石三斗五升六合四勺

入來院 恰

吉利

高六千貳拾石余

市田 隼人

高四千八百拾五石四斗八升八合貳勺九才

入來

高四千貳拾四石七斗八升七合八勺四才

比志島靜馬

高四百六拾九石余

肝附 兵部

高千貳百八拾石余

義岡 主殿

高五千三百七拾四石五斗壹合六勺壹才

麥刈李之介

高

高九百石余

山岡 齊宮

高三百八拾石余

諏訪 數馬武兼

高七拾壹石余

末川 久馬

高八拾壹石余

川田 將監

高九拾石余

川上 龍衛

高八百七拾貳石余

畠山 主計

高九拾石余

川上 但馬

高貳百四拾九石余

鎌田仙千代正夫

高貳百六拾五石余

島津 登

高千六百五石三斗七升

伊勢 雅樂

高拾七石

郷原 轉

高貳百參拾七石余

川上 式部

高百四拾貳石余

新納 駿河

高三百拾三石余

榊山權十郎

高六百貳拾四石余	北郷	數馬	高百六石	小林	一學
高千五百五拾石余	北郷	波江	高七拾七石	北條	織江
高百貳拾五石余	桂	内記		本田信二郎	
高百八拾石余	島津	仲	高四拾石余	相良	治部
高百石余	伊集院	靜馬	高九拾三石余	平田	正十郎
高三百九拾九石余	新納	内匠	高百八拾九石余	堀四郎	左衛門
高三百三拾七石余	町田	内膳	高七拾三石余	小笠原	兵部
高九拾貳石余	伊集院	一亘	高百三拾三石余	鎌田	愛大夫
高六拾壹石余	新納	主稅	高八拾六石余	鎌田	一藤太
高	伊集院	集衛	高七拾六石余	市來	次十郎
高七拾六石	山田	轉	高貳拾九石余	河野	八郎左衛門
高千貳百貳石余	鎌田	要人	高四百九拾七石余	赤松	主水
高七拾七石余	平田	靱負	高四百三拾二石余	澁谷	喜三左衛門
高貳百貳拾三石余	高橋	縫殿	高五百八拾壹石余	宮之原	小膳
高貳百五拾九石余	仁禮	小吉	高三百三石余	關山	糺
高六百貳拾石余	二階堂	菟		山田	新之丞
高百七拾八石余	二階堂	源太夫		岩下	佐次衛門
高百三拾八石余	名越	左源太		上野	藤馬

以上寄合ト唱フ、

猪飼御太郎

稻富 數馬

三崎平太左衛門

村橋 昇

倉山作太夫

北郷宗一郎

伊勢平四郎

高百三拾四石

西 金之助

谷川次郎兵衛

本田加賀守

井上駿河守

面高中性院

以上寄合並ト唱フ、

五四〇 門闕其他御目見以上總數

一門家並大身分一所持

一所持並一所持格

貳拾壹家

四拾壹家

寄合

寄合並

無格

小番

新番

御小姓与

合計七千〇六拾八家

御城下六組御小姓与

一番組

二番組

三番組

四番組

五番組

六番組

合計三千〇九拾四家

小番 新番

惣合計四千百三拾家

五拾二家

拾家

貳家(山田・龜山二家)

七百六拾家

貳拾四家

六千百四拾六家

五百三拾七家部

五百 拾九家部

六百四拾六家部

四百貳拾四家部

四百九拾貳家部

四百七拾六家部

千〇三拾家部

五四一 薩隅日三州諸郷土家部及ヒ石高

薩摩国

鹿兒島郡

鹿兒島

吉田郷

日置郡

伊集院郷

永吉郷

吉利郷

日置郷

郡山郷

市來郷

串木野郷

谿山郡

谷山郷

阿多郡

伊作郷

田布施郷

阿多郷

川邊郡同郡内
七島除

川邊郷

加世田郷

鹿籠郷

坊泊郷

山田郷

久志秋目郷

甌島郡

甌島郷

穎娃郡

穎娃郷

指宿郡

指宿郷

今和泉郷

給黎郡

喜入郷

知覧郷

弘化3年

山川郷
薩摩郡
百次郷
山田郷
平佐郷
隈之城郷
高江郷
樋脇郷
入來郷
中郷郷
東郷郷
高城郡
高城郷
水引郷
高城郷
伊佐郡
蘭牟田郷
大村郷
山崎郷

宮之城郷
黒木郷
鶴田郷
佐志郷
羽月郷
山野郷
大口郷
出水郡
阿久根郷
長島郷
野田郷
高尾野郷
出水郷
大隅国
大隅郡
櫻島郷
牛根郷
垂水郷

大根占郷
新城郷
小根占郷
田代郷
佐多郷
肝付郡
百引郷
高隈郷
鹿野屋郷
大始良郷
花園郷(岡カ)
始良郷
串良郷
高山郷
内之浦郷
噲啖郡
福山郷
市成郷

恒吉郷
末吉郷
財部郷
敷根郷
國分郷
清水郷
噲啖郡郷
桑原郡
日当山郷
踊郷
横川郷
栗野郷
吉松郷
始良郡
蒲生郷
加治木郷
溝邊郷
山田郷

弘化3年

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|------|------|-------------------------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|-----|-----|----|
| 帖佐郷 | 重富郷 | 菱刈郡 | 湯之尾郷 | 本城郷 | 馬城郷 <small>〔越九〕</small> | 曾木郷 | 熊毛郡 | 種子島 | 馭謨郡 | 屋久島 | 日向国 | 諸縣郡 | 吉田郷 | 馬關田郷 | 加久藤郷 | 飯野郷 | 小林郷 | |
| 須木郷 | 高原郷 | 高崎郷 | 大崎郷 | 志布志郷 | 松山郷 | 都ノ城郷 | 勝岡郷 | 山之口郷 | 高城郷 | 野尻郷 | 倉岡郷 | 綾郷 | 穆佐郷 | 高岡郷 | 合計 | 合計 | 家部 | 石高 |

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

弘化四年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十四枚）」の記載あり〕

弘化四年丁未

清曆道光二十七年
西曆千八百四十七年

神武天皇御即位紀元二千五百七年

孝明天皇統七第百二十代御即位本年九月十七日元年御宝算

將軍家慶公第二世襲職天保八年八月十一日年五

藩主齊興公第二十七世、当时大隅守、当称ス知政文化六年三月二十九日年五

世子齊彬公当时修理大夫、年三十九

藩祖忠久公隔日三州及琉球国受封（人皇八十二代）
後鳥羽天皇永五年即子文治二年、六百六十一年

関白太政大臣鷹司政通公

左大臣九條尚忠公

右大臣近衛忠熙公

内大臣花山院家厚公十二月 寵職

同 醍醐輝弘公

老中

阿部伊勢守正弘

牧野備前守忠雅

戸田山城守忠温

青山下野守忠良

若年寄

大岡主膳正忠固

本多越中守忠徳

遠藤但馬守胤統

本庄安藝守道貴

所司代

酒井若狭守忠義

京都町奉行

伊奈遠江守忠吾

水野下總守重明

伏見奉行
内藤豊後守正繩

国老

○ 穎娃信濃久喬

○ 新納内藏久命

○ 島津將監久泰

○ 岩下典膳道貫

○ 島津安房久備

○ 島津 登久兼

川上久馬久芳

町田監物久視

市田美作義宜

北郷内記久珉

島津和泉久風

島津丹波久長

川田信濃佐撰

猪飼 央尚敏

二階堂主計行典

調所笑左衛門廣郷

諏訪勘解由武敬

菱刈安房隆觀

島津石見久浮

島津 登久備

島津豊後久寶

島津壹岐久武

末川近江久平

島津將曹久徳旧称碓山

川上筑後久封

以上二十五名、文化六年己巳ヨリ嘉永四年辛酉二月迄凡四十三年間国老職ニ在リ、前代ヨリ在職連緒ノモノハ〇印ヲ付ス、
〔亥カ〕

五四二 総覽

齊興公御在府

齊彬公御在国

正月元日、先規ノ如ク御一門四家及ヒ御家老・若年寄

・大目付及御側御用人・御側役・御納戸奉行等御側向

ノ役人年首ノ祝賀ヲ受ケラレ、尋テ五社御参拜、畢テ

御一門四家ノ祝賀ヲ受ケラレタリ、

同月二日

神明社及ヒ護摩所構内鶴ヶ岡八幡宮等ノ諸社、靈符堂

・御看經所御参拝、

同月三日曇天後雨

御書院又ハ御対面所ニ於テ、^{〔大〕}太身分其他寄合・寄合・^{〔並〕}

小番・新・御小姓組及与力等ノ祝賀ヲ受ケ玉フ、先規

ノ如シ、同四日ヨリ七日ニ至ル迄年首ノ賀式先規ノ如

シ、略ス、

同月十一日晴

例ノ如ク諸役人進級及ヒ転遷、或ハ地頭職転換命セラ

ル、鎌田刑部（正純）其外人名略ス、

同月十九日、歳暮ノ慶賀能楽延日セラレシヲ、本日興

行、

同月二十日

齊興公江戸邸御発駕御下国ノ途ニ就セ玉フ、御家老調

所笑左衛門扈從ス、

同月二十一日、齊彬公御本丸ヨリ磯邸ニ御引越シアリ、

齊興公不日御帰国ニ依テナリ、

同月十三日晴

先規ノ如ク、御兵具所ニ於テ与力・足輕捕手初メノ式

ヲ行ハル、御家老島津石見及ヒ大番頭・御小姓組番頭

・当番頭出席、先規ノ如シ、

同月二十三日、齊彬公御召使女中磯邸ヲ発シ江戸ニ赴

ク、老女岡村等数名ナリ、

同年二月三日

齊彬公謙ヲ開カレ、御一門四家及御家老・若年寄・大

目附ノ諸役人モ陪讌ス、

同年二月五日

齊彬公御既ニ臨ミ玉ヒ、五家馬術師範及ヒ門人ノ乗御

ヲ覽玉フ、御家老・若年寄・寄合・大目付・大番頭・

御小姓組番頭陪覽ス、

同月八日

齊彬公大雄山及ヒ南泉院御参拝、

同月二十日

齊彬公福昌寺及淨光明寺へ御参詣、

同月二十八日

齊彬公御參府御首途式ヲ行ハル、御家老島津將曹（久德）御名代、諏訪・祇園社例ノ如ク、同社前ヨリ新橋下渡戸ヨリ上陸復命ス、

同三月八日雨後晴

齊興公御着城、齊彬公今朝磯邸ヨリ御入城、御奉迎（御対面所縁類御駕台下ニ御奉迎）、奥御座ノ間ニ於テ御対顔、畢テ御一門家其他御家老・若年寄・大目付等拜謁先規ノ如シ、

○大身分・寄合以下諸士ハ御対面所ニ於テ御家老ニ謁シ、御兩殿ニ御祝詞上申ス、

此日齊彬公ハ大奥ニ於テ御父子御對話、刻ヲ遷サレタ刻磯邸へ御帰館（専ラ琉球異国船御処分或ハ海岸防禦等ノコトナリシト）、

同月九日

御家老調所笑左衛門下着ス、大坂迄從駕、同地ニ所用アリ七日間滞留、途次急行本日着廳セリト云フ、

同月十日

齊彬公御入城齊興公ニ謁セラレ數刻御談話、晚景磯邸

ニ御帰館、此日専ラ琉球国外国人取扱及ヒ将来御措置ノ御話ナリシト、

同月十三日

齊彬公御入城御父子御酒宴刻ヲ遷サル、来ル十五日江戸へ御発駕ニ就テ御餞宴ナリト、

同月十五日

齊彬公江戸へ御発駕（未ノ上刻）、磯邸ヲ発セラレ御入城、齊興公ニ謁セラレ而シテ御一門家及太身分其他見畢テ御発城、從駕国老島津將曹・御側役種子島六郎（時昉）外人名略ス（午ノ刻矢来御門ヨリ御出城）、水上駅ニ於テ御休憩、夫ヨリ横井村其他各所御野立御休憩、今夜伊集院苗代川村御一泊（先規ノ如ク朝鮮踊等御覽アリシト）、

同月二十八日

末川久馬（久平）ヲ御家老職ニ進メ役祿千石ヲ賜フ（大目付ヨリ）、此日齊興公御下国初テ御出座、太身分其他ノ月次御礼ヲ受ケ玉フ、

同年四月九日

齊彬公御途次筑前福岡ニ於テ美濃守様ニ御面会、御談
〔マ〕談話刻ヲ遷サレタリ、専ラ外国御処分上ニ就テノコト
ナリシト云フ、

○御会合ノ始末ハ黒田家々記抄ニ詳ナリ、

四月十三日雨

此日齊興公御親書ヲ以テ海防及文武勸奨ヲ令シ玉フ、
後葉ニ記ス、

同年五月朔日曇天

伏見御滞在中近衛家へ御参殿、近衛家日記見ル、
齊興公御出座、御一門家其他諸士拝謁、端午ノ佳儀ヲ
受ケ玉フ、先規ノ如シ、

同月十日

齊彬公御道中江戸御着邸、

同月十一日

齊彬公御出府ノ御届先規ノ如ク、御先衆及ヒ閣老へ御
届、

同月十二日

先規ノ如ク、閣老上使ヲ以テ御参府ヲ祝セラル、

同月十三日

齊彬公閣老衆へ御見舞先規ノ如シ、

同月十四日

齊彬公閣老阿部伊勢守殿役邸へ御越シ、琉球国外国人
御処分或ハ将来ノ措置御意見等御申述刻ヲ遷サレタリ
当日筒井紀伊守ニモ臨席セリト云フ、

同月十五日

齊彬公御登營將軍家御謁見、御参府ノ御礼及琉球外国
人御処分御復命、尋テ御西丸へモ御登城御礼、御帰路
閣老御廻訪、

同月十八日

筒井紀伊守来邸御談話刻ヲ遷サレタリト云フ、蓋シ琉
球国外国人御処分上ノコトナリシト云（中山次左衛門日
記）、

同年七月朔日晴後微雨

谷山中ノ鹽屋大砲場ニ於テ成田正右衛門（新式洋法）・
青山千九郎（天山流）御家老見分ス、島津豊後・島津石
見（久浮）・調所笑左衛門・若年寄柘山伊織（久）・大

目付島津主殿(久)及ヒ大番頭・御小姓組頭・物頭・大目付等臨場ス、演習ノ形況後巻ニ記ス、

同月八日晴

本日御小姓組番頭川上龍衛・鎌田刑部ノ二人ニ海岸防禦掛命シ玉フ、

此日又御小姓組番頭川上式部(久美)・島津權五郎(久包)・川上龍衛(久鈴)・鎌田刑部(正純)・喜入壬生

(久高)・島津藤十郎(久芳)ノ六名ニ御流儀砲術掛ヲ命セラレタリ、

同日、御小姓組番頭兼異国船掛宮ノ原主計(マ)江戸詰番頭一扁ニ命セラル、

同八月二十日晴

本日砲術館開場式及軍神勸請祭ヲ執行シ玉フ、齊興公御名代島津周防(久教、久光旧名)及ヒ御一門家臨場、

御家老調所笑左衛門及御小姓組番頭其他掛ノ輩海老原宗之丞・三原藤五郎等數十名臨場、之ヲ洋式砲術擴張

ノ嚆矢トス、

同九月十二日晴

今夜流儀銃砲隊行軍演習ヲ為サシム、大小砲銃運轉ヲ試ル(之ヲ行軍演習ノ權与トス)、

同年十月朔日晴_{丁未}立冬

本日御軍制革正ヲ発布シ玉フ、御家流ヲ基本トシ和漢洋古今ノ良法大成一定云云、布令ノ如シ(此日古文録征韓ノ役泗川ニ於テ大捷ヲ得ラレタル祥忌辰ナルヲ以テ発セラ

レタル者ナリ)、御家老調所笑左衛門御軍役総奉行職親命シ玉フ(這職今回創置)、

御城代兼御家老島津豊後、御軍役副御名代ヲモ親命シ玉フ(此職モ創置)、此外御軍役諸役員數十名ヲ命セラ

ル、後葉ノ如シ、

同月八日雨

同月十七日

齊興公指宿郷二月田ノ温泉御入浴ノ為メ御発行、御小姓組番頭川上式部・同川上龍衛・同鎌田刑部・同喜入壬生各御軍役方掛命セラル、

同月二十四日

来ル二十八日吉野原ニ於テ大訓練発布セラル、

同月二十八日雨

吉野原ニ於テ御城下六組士及ヒ与力・足輕等ノ諸隊（大小砲術隊）大操練奉行、專洋式銃砲隊或ハ天山流ノ砲銃隊モ混成ス（人員總計凡一万三千余人）、日本開基ノ五十封度（口徑二十九拇）白礮ノ射擲ヲ試ム、該礮ノ製造モ本藩之ヲ開基トス、事實後卷ニ記ス、此日御名代公子島津周防及ヒ御一門家島津兵庫（忠長）・島津安藝（忠剛）・島津讚岐（貴敦）、御軍役島津豊後・末川近江（久平）・調所笑左衛門・大目付二階堂主計（行典）其他数十名臨場ス、是ヲ近代大操練ノ初メトス、事實後卷ニ記ス、

同月晦日

封内一般銃砲・弓・槍及ヒ鎧具其他兵器調査ヲ令セラル

同年十一月十二日

賴朝公六百五十年祭ヲ郡山郷花尾神社ニ於テ執行シ玉フ、御代拝島津讚岐、御小姓組番頭御用人鎌田刑部其他寺社奉行等祭場ニ臨ム、

同月二日

賴朝公六百五十年祭法会法楽城中ニ於テ催サレ、先規ノ如シ、

同十二月七日

調所笑左衛門ニ命シテ、大隅国肝屬郡諸郷ノ海岸防禦要衝ノ地ヲ巡視セシム、

同月 日

御軍役改正ニ就キ諸士祿高改正ヲ令セラル、

同月八日

御小姓組番頭川上式部・川上龍衛・鎌田刑部・喜入壬生諸士給地高改正取調掛命セラル、

同月十三日

例規ノ如ク煤掃式執行、御一門四家ヲ初メ御役人登城、賀礼ヲ受ケ玉フ、

同月二十八日

例規ノ如ク歳末ノ佳式ヲ受ケ玉フ、

五四三 参考 弘化四年丁未四月九日（黒田家書類抄）

今暁八時御供揃ニテ片上御発駕、一日市御小休、藤井

御昼休ニテ松平修理大夫様へ御出会被遊、右相済同所御発駕、七半時過岡山御着御止宿被遊、

松平修理大夫様大隅守為御参府、今日藤井御小休、此

方様へモ御相休ニ付、此方様御昼所へ修理大夫様御出緩々御対顔被遊、

但當春御同人様御参府ニ付、此方様御下国ノ節於御道中御行逢之節御休泊間ニテ御出会之儀、於江戸御双方共御伺相済居候ニ付、本文之通、

今晚八時御供揃ニテ片上御発駕被遊、五時比藤井御昼所へ御着被遊、兼テ被仰合之通松平修理大夫様へモ同御相休被遊、

殿様当所へ御着、早速從彼方様御側向以御使者左之通被進之、

御使者

伊集院卯十郎

取次 御本院番

出会 吉永源八郎

御目錄前

(糖カ)
雲餅糍 一箱

經節 一箱

右御使者へ金子二百疋、御進物宰領へ銀子三両、持人へ青銅三百文宛被下之、奥頭取ヨリ相達之、

松平修理大夫様ヨリ以御使者御旅中御見舞被仰進之、且殿様彼御方へ御出御口上被仰置管之旨御通達ニ相成居候処、御旅中御繁雜、殊ニ天气合彼是ニ付御出之儀御断被仰進、兼テ被仰合之通彼方様追付、此方様御休へ御出可被成旨御案内旁被仰進之、

御使者

樺山直八

取次 御本陣番

出会 御次廻

御返言 御用人

右之通殿様御出之儀ハ御断被仰進候付、被任御断御出無之、

彼御方様へ以御使者御旅中御見舞被仰出且御出之御案内旁以御使者被仰進之、

御使者代御小姓
丹 安之進

御口上

公方様 右大將様益御機嫌能被成御座奉恐悦候、將又其御元様弥御安全追々御旅行、今日当所御休息珍重思召候、美濃守様へモ為御帰国只今当所被成御着候、兼テ被仰合之通無程御緩々御対顔可被候、御大慶思召候、為御案内旁々以御使者被 仰進之候由、

演説

只今御出被成候間宜旨可被及演説候事、修理大夫様朝五半時頃ヨリ御出七時過御披被成、右御出ニ付、左之通遠見被差出之、

遠見

御駕籠廻

御入

御出之節左之通罷出、

式台ニ罷出居申御案内相勤

御用人一人

式台ニ罷出居申御跡ニ御付添申上御次廻一人

式台ニ罷出居申御刀執之

陸士頭格

奥頭取一人

御玄官詰

御本陣番

御組外二人

右何レモ旅粧之儘

御披之節御路次通りニ付御次廻出方、御玄官詰等無之、

右御出ニ付殿様御居間次之間迄御出迎被遊、御召服御

旅粧之儘

御居間へ御通之上、左之通被差出之、

御熨斗鮑

御茶

御煙草盆

野服之儘

御給仕

御納戸

右畢テ左之通被仰出之、御相伴被遊、

御料理

右御献立ハ御用所留書ニ譲ル、略之、

御給仕

御納戸

御愛相物左之通被進之、

御菓子 一折

柏漬鯛 一桶

右畢テ御立被成

殿様御出迎被遊候所迄御付送被遊、

御披後早速以御使者左之通被仰進之、

御使番代御小姓

高屋小一郎

御口上

今日ハ御緩々 御対顔被成御大慶思召候、御披後已^{マコ}

之御様子御承知被成度、御挨拶旁御使者ヲ以被仰進候

由、

修理大夫様御供之御家老御用人へ 御目見被 仰付之

御家老

島津 將曹

御用人

種子島六郎

名越彦太夫

右之面々イツレモ御旅中御繁雜ニテ御機嫌御同等ニモ

不罷出候ニ付、勿論本文 御目見等不被 仰付候事、

左之面々御供ニテ直ニ居殘候ニ付、御湯漬・御酒等被

下之、

御側役

伊集院卯十郎

鷺津才之丞

右之面々奥取扱ニテ左之通被下之、

博多織帯

老筋宛

兵庫駅ヨリ去五日修理大夫様御旅中迄差越候奉札左之

通、

一筆致啓達候、修理大夫様弥御安全追々被成御旅行

珍重思召候、然ラハ美濃守様為御帰国段々御旅行、

今晚兵庫駅御止宿被成候、此後御支無御座候へハ、

来ル九日藤井駅御休被成管ニ候、兼テ被 仰合之通、

同日ハ同所ニテ御緩々 御対顔可被成ト御大慶思召

候、猶其節以御使者御案内可被 仰進候へ共、先此

段各様迄從拙者共宜得其意旨被 仰付候、如此御座

候、恐惶謹言、

四月五日

杉山文左衛門

隅田市左衛門

修理大夫様

御用人中様

封箱之上御名内ト肩書

右返事矢懸御泊所ヨリ出候由ニテ、片上御泊所へ差出之、

斯書ハ黒田家々記抜抄ス、斯ク御途中御面会ノ事実ヲ記シタルハ甚タ寡シ、仍テ考証ノ料ニ抄写ス、

五四四 島津忠教国務参与

四月十二日

島津周防殿忠教 久光公 旧名

右ハ別段思召之訊被為在、三日又ハ五日越等ニ御家老座へ出席有之、其節御家老中ヨリ御用向御相談申上候ハ御聞届、且又見聞之成行モ品ニ寄候テハ可被達貴聞旨、今日御直ニ被仰付候、

右之通表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候、

四月十二日

笑左衛門調所 広郷

又別紙

島津周防殿

右ハ今度御家老座へ出席被仰付候付テハ、座席御城代之上罷在候様被仰付候、

年頭八朔其外節旬日、朔望・廿八日或ハ屹立候御祝儀事等之節ハ、可為家格之通候、

但其節々御礼済ニハ居殘御家老座並御軍役方へモ出席可有之候、

御領國中へ連判ニテ申渡事並近国等之書通ニハ不及加判候、

御家老申渡事等之節不及出席候、

平日出勤之節ハ中之口ヨリ被罷上、退出モ其通ニテ御目付不及出迎、表坊主先立ニテ御附御小納戸格等中之口ヨリ御家老座入口迄附添、退出モ同断、御名代勤並火消被成御免候、

御用無之節ハ八ツ前ニテモ退出、又出仕モ四ツ過ニテ
モ不苦候、

右之通被 仰付候条表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ
可相達候、

四月十二日

笑左衛門^全
上

之レ久光カ国事ニ参与ノ初トス、

五四五 〔成規調査宗旨改及ヒ鉄砲証文ニ関スル

記事〕

齊彬公史館ニ命シ成規調査・宗旨改及ヒ鉄砲証文前方
下出仕御奉行月番之用人へ見セ差図ヲ請ケ其通ニ相認
主人居へ判印形兩奉行衆へ兩通出之、使者口上ニテ差
出、御留守居ヨリ御返書、老通ハ役人ヨリ証文ノ受取
手形遣シ候、在所ヨリ同前、兩奉行衆ニ達書相濟モ有
之、切支丹類モ同断、鉄砲有之候ハ、帳面ニ認申候様
伺候テ相極、初ヨリ此方ヨリ極テハ不宜也云云、

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

弘化四年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数五七枚）」の記載あり〕

目録

種子島時昉日記抄

安田助左衛門日記抄

五四六 参考 種子島時昉日記抄

一 酉二月四日、五ツ半時無御滞被仰置之通

宰相様被遊

御発駕奉恐悦候、右ニ付拙者事御供ニテ首尾罷出立イ〔能カ〕

タシ、直八殿事モ同断御供ニテ出立有之候事、
右之通出立ニ付

御方々様ヨリ拝領物等被仰付候儀外ニ留置候得ドモ、
以後為見合此帳内へモ留置可申事、

一 御宿刻通無御滞御通行被遊候处、

勅使御届方同日京地ヨリ御出立、夫故右御都合ニテ一
日御日重相成内、

酉二月十九日

川御上リニテ八ツ過大坂御屋敷へ 御着坂

尚御機嫌能被遊、御滞留被遊候事、

酉二月十八日

伏見御光着（近衛家日記参看）

三月十五日朝之内少雨

一 今朝六ツ半時磯御茶屋ヨリ

御発駕（齊彬公）、御本丸へ御立寄被為在

太守齊興 様御対顔、諸御式事等被為濟、四ツ時御立
諸所御休等ニテ七ツ時苗代川
御光着被遊、尚御機嫌克被遊 御止宿候事、

但

御馬印ヨリ磯御行列ニテ御先へ御行列等ハ御本丸
ヨリノ御供ニテ、右ニ付拙者・權助種子島 殿・
直八樺山 殿三人共朝七ツ時出立ニテ磯へ罷出御
供相勤候事、

一三月十六日、苗代川曉七ツ半時

御立、左候テ向田へ御着之上久見崎御船手へ被為入筈
候処、当日朝後ヨリ風雨カ面ニテ、右御出御延引相成候事、
但七ツ時向田へ御光着、

一御立御定刻六ツ時被仰出候事、

一四月朔日ヨリ同九日迄御宿刻之通無御滞被遊

御通行候事、九日ニハ備前岡山領藤井駅ニ於テ、御本
亭松平美濃守様へ御緩々被為在御対顔候事、

但

彼御方様ニハ江戸ヨリ御通行ニテ、前以ヨリ度々
御掛合モ有之、藤井駅御双方様御休ニテ諸事御都
合宜被遊

御対顔、尤右之段ハ江戸表並御国許へモ申上越候、
左候テ彼御方御本陣へ御家老初御機嫌伺ニ罷出筈
候へドモ、知カ布テ御混雑中故、伊集院卯十郎御使相
勤候ニ付、卯十郎ヨリ其席ニ取束銘々ヨリノ御機
嫌伺申上候事、夫ヨリ 御通行ニテ夜入過竹上へ
被遊御着候事、

一四月十六日、今日朝五ツ時御供掛ニテ

住吉社へ被遊 御参詣、日入時分
御帰館被為在候事、

一四月廿四日、今朝五ツ時伏見

御立、七ツ前草津駅へ 御着

御機嫌能被遊

御止宿候事、

上使

一 四月廿日同廿一日今日朝五ツ時、御供掛ニテ京都櫻木

町御別荘へ被為入 忠憲

郁君様御対面御緩々ニテ、拙者ニモ御供被仰付候所

郁君様御目見、其上段々拝領物等被仰付難有奉存候、

夜入八ツ時過伏見御屋敷へ被遊

御帰館候事、右ニ付唐紙一束・大鼓多葉粉入七ツ・御

肴料二百疋進上仕候事、拝領品晒一疋・御肴料五百疋

弘化四年未五月右之通ニテ

御機嫌克江戸芝御屋敷へ被遊

御参府候事、

拙者・權助殿・直八殿父子三人共首尾能御勤到着ス

五月十五日

御登城 御参勤之御礼被仰上候事、

五月十三日

五月十一日

御老中様へ 御廻勤 御出、

御前 齊彬公 御夫人 様御祝詞之

御筆御歌被遊、拜見被仰付候テ記置候、

若子ノ氣フヲ祝シ侍リテ

しけりあふまつの梢をすたちして

ちとせを庭にあそぶひな鶴

五四七 参考 安田助左衛門日記抄

弘化四年丁未正月十九日桑名へ着、同廿七日迄ニ滞在、

甲州流兵学奥儀無残所皆伝、軍役人数積ノ儀是又致皆

伝候、右伝校且質問ノ次第並ニ書籍借用且写取候、委

細ノ形行ハ略之、

貴様御事武田流軍学從右松家奥秘迄御相伝候処、当右

松家御幼代ニ付御後見被成候旨、右ニ付從拙者大鼓短

時大星人数積御伝〔授カ〕校申候様御懇望ニ付、今度悉皆御伝校申候、拙藩高弟ノ向ヘモ如斯相伝致候儀ハ無之候ヘ共、別段存念有之候テ御伝校申候、向後 御公用ノ外ハ曾テ御漏洩被成間敷候、以上、

軍家六世
杉山左膳
憲履判
弘化四丁未年正月廿七日

安田助左衛門殿

私事故右松十郎大門人ニテ甲州流兵学幼年ヨリ執行仕十郎太ヨリ皆伝ヲ請罷居申候処、同人儀、去ル丑年天保十 二辛丑 致病死、嫡子有壽幼稚ノ事故流儀後見被申付、有壽成人ノ上私ヨリ伝校仕筈御座候、兵学ノ儀多端ノ御伝法候ヘ共、大鼓短時 大星ノ儀ハ奥秘ノ事御座候間、伝来ノ口訳入尊覽候上御再伝ノ儀奉願、且又人数賦ノ儀ハ先師一空、老年ニヲヨヒ 英憲公ヨリ御相伝ヲ請、別テ秘藏ニ仕、一子相伝ニ相立置候付、御再伝不仕候テハ門弟中氣請ニモ相拘リ申事ニテ、其上、近

年度々異国船相見得、當時第一ノ急務御座候間、心得相成儀迄モ精微ニ御伝校仕、公用無滞相動申座、公私ニ付無抛申上趣御座候処、御聞取被下無残所御伝授被成下、其上軍艦要ノ内是迄右松家ハ相洩居候モ有之候処、此節御書物私ヘ可被相渡候間、御国許ヘ持越写方ノ上返上任候様被仰付、旁以御懇篤ノ程生々世々難有奉存候、主用ノ外ハ雖親子兄弟、不応其器者ヘハ曾テ以口外仕間敷候、仍テ為後年証書如此御座候、以上、

安田助左衛門
義宜判
弘化四年丁未正月廿七日

杉山左膳殿

弘化四年丁未七月八日、拙者桑名致伝校候、陣營全書・桑名御軍役定、其外都合三十三冊、是又右膳ヨリ志津馬ヘ差出候、

弘化四年丁未正月晦日、京都表笑左衛門殿ヘ委細形行

御届申上候、左候テ笑左衛門殿へ相付、三月八日御届元へ帰府、

安田助左衛門

右ハ調所笑左衛門殿御内用ノ儀有之、山川諸所へ廻勤ノ筈候付被召附候条可申渡候、

但

送人馬ノ儀ハ御内容計申付候、

五月

久馬末川

右之通未五月廿二日被仰付、廿四日笑左衛門殿御出立、山川・指宿へ台場御築造ニ付場所御見分、尤前以成田正右衛門・田原直助場所見合方ニ被遣置候、

安田助左衛門

法克六左衛門

地方検者

中島藤兵衛

右ハ指宿大山崎並山川權現ヶ尾へ御内用計ヲ以、大砲

台場築立方海岸砲台築造ノ初トスニ付掛被仰付候条可申渡候、

六月

笑左衛門

右ノ通六月朔日被仰付、同九日迄成就、

弘化四年丁未

安田助左衛門

右ハ調所笑左衛門殿御内用之儀有之、急ニテ京・大坂御国許へ被差越候付被召付候、左候テ被召付候内ニテ前廉来ル十二日急ニテ被差立候条可申渡候、

但

中途遅速ノ不及差引候、

正月

豊後

右之通正月九日承知、尤前廉ヨリ勢州桑名御藩中杉山左膳方へ罷越、甲州流兵学致再伝度御内意申上置候処、其通被仰付候、

弘化四年丁未六月廿七日、御側役二階堂志津馬ヨリ名越右膳御用ニテ、右松家兵学伝書

御前へ御用被為 在候間、差出候テモ苦間敷哉ノ旨致

承知候付、少シモ差支無御座候旨御請申上候処、今日

中差出候儀可相調哉ト被申事候へハ、多端ノ書籍今日

差上候儀ハ出来兼候間明日差上候様可仕、就テハ安田

助左衛門儀同様後見被仰付置候付、俱々取シラへ差上

可申旨被申出候処、極隱密ニ被仰付事候間、其外同門

中へハ不相響様可取計致承知、翌廿八日

宥邦院 廿二世 継豊公 様御預ノ御書物ヲ始、一空書物奥秘大

星ヨリ杉山家返答迄不残城取絵図迄モ相添、書物箱五

ツニ入付横折ノ目錄相付差上候、

弘化四年丁未七月十一日、笑左衛門殿草牟田御別荘へ

右膳 杉山 右膳 殿ト兩人罷出候様、志津馬ヨリ御用申来罷

出候処、笑左衛門殿・志津馬・海老原宗之原 (丞カ)ニテ志津

馬ヨリ被相達候へ、先達テ差上候伝書

上様被遊 御覽、右ニ付口伝モ可有之候間三人細々承

届申上候様被仰付、尤モ玉里御茶屋ニテ被聞届答ニ候

へトモ、御間席手狭ニテ其儀調兼候間、玉里ノ場ニテ

笑左衛門殿別荘ニテ可承届候間、其通り相心得候様致
承知候、

一 甲州流景憲以来伝統ノ次第申上候、左候テ奥儀ノ事共

被承届度トノ事故、大星三ヶノ伝大意且人数賦ノ次第、

押太鼓席破急々三ツ申上候、

一陣鐘ノ事且切結ヒ候上引上ル次第ヲ笑左衛門殿尋ニ付

キ申上候、其外御咄ニ段々御尋御座候得共、肝要ノ分

ハ右之通ニ候、

弘化四年丁未七月十九日、志津馬 二階 堂 ヨリ御用申来、

笑左衛門殿・宗之丞ニモ列席、於鹿之間御尋ノ次第、

一 志津馬ヨリ致承知候へ、先日笑左衛門殿於御別荘申上

候次第、且跡達テ差上候書籍モ都テ被遊 御覽、其上

當時ノ御手帳モ被遊 御覽候処、十騎十五騎ノ御備ハ

御兵具方ニ御手当ニ相成居、只今ニテモ張出シ相成候

様ニ相備居、御旗本三十騎ノ御備ノ御賦ニテ、右当分

ノ御手当通りニテ可然哉存慮申上候様致承知候ニ付キ

御手当ノ儀ハ平日屹ト批判不仕事候へトモ、分テ其通

リ 御沙汰ニ付テハ、心中ノ儀不申上候テハ不本意ト奉存候間申上候、乍恐三ヶ国ノ

太守様御出馬ニ數万ノ諸士御扶助被遊候ヲ、三十騎位ノ御供ニテハ誠ニ御手落奉存候段申上候処、左様ナラハ何程ノ御備ニテ可宜哉ト承候付、イツレニ三百騎ハ御旗組ニ御備有御座度申上候、

一異国船事ニ依長崎表へ可來風聞モ有之、就テハ御奉行ヨリ御奉書御到來ニテ、御大国ノ事故人數ノ式・三方モ差出候様被仰渡候ハ、三五日ノ間ニ出張可相調哉、上様別テ御懸念ニ被 思召上候段承知仕候付、当分ノ人數ヲ式・三万人五月中他国へ張出候儀中々御請仕難夫故兼テ御軍役ヲ被定兵制相立不申候テハ相調不申事ニテ、就中式・三百年ノ昇平軍陣ノ事ハ聊モ存不申、勿論兵糧・玉葉・陣屋等ノ次第、夫々作法ヲ究置候テサへ六ヶ數候ニ、前後不案内ニテ右様ノ大軍急速張出候儀御請難仕申上候処、三人ノ衆替ル々々色々承候へ共、右ノ趣意ニテ申上置候、左候テ此上ハ急度兵制被相定度段申上候、尤御旗本組ヲ初御家老・組頭・諸地

頭々々軍役被相究、相付候人數兼テ被究置急事ノ間ニ逢候様御手ヲ被付度、是ノミ祈居ル儀ニ御座候段申上候、

一兵糧ハ如何致シ候哉ト承候付、遠方ニテ候へハ付越申賦御座候、可成丈行先ニテ買入申度奉存候、戦國ノ時分敵地ニテ候へハ仕様モ御座候へ共、當時ニテハ訳相替候間此御手筈第一ノ事ト奉存候段申上候処、タトへハ長崎ニテ候へハ、佐賀・筑前・肥後等ノ大諸侯近國ニテ候間、買入方ハ此方ヨリ先ニ相働可申、其通ニテハ猶更困リタルモノ候段笑左衛門殿御咄ニテ候、右ニ付キ兵糧ノ賦申上候、左候テ汁ノ儀ハ手当不仕、飯ト菜ニ味噌相添一統へ相渡候段申上候、

一陣小屋ハ如何致候哉ト承候付、長陣ニテハ候へハ切込ミニニイタシ候方保チ宜御座候へ共、常ノ陣屋ハ都テ竹ノ柱ニテ、ハリ・ケタモ竹ニテ相調、上ニ波紙類ヲ引廻シ申候、一夜陣ノ節ハ家庫ヨロシク候へ共、事ニ依野陣ノ節ハ雨紙ヲカブリ夜ヲ明シ候心得ニテ御座候段申上候、

一日ニ何里程押行候哉ト御尋ニ付、五里位ツ、参候段

申上候処、夫ハ別テ道法近ク何様ノ訳ニテ候哉ト御尋

ニ付、陣屋ハ未明ニ張出候ヘ共、一ノ手・二ノ手・脇

・旗本・後ト追々押行候ヘハ、一ノ手ハ未明ニ打立候

テモ跡ハ一時歇其上モ相後レ可申、其上急ニ押行不申

候故ハカ取不申、勿論七ツ前ニハ是非惣体ヲシ付、陣

屋ノ手当、陣具取、兵糧ノ支度仕事候付、長途ハ行レ

不申段申上候、

一兵糧相渡事ハ如何致候哉ト御尋ニ付、一備々々焚取ヲ

立置焚調候テ相渡候段申上候、

一白米ニテ候哉ト承候付、白米ノ手当ニ候段申上候処、

只今ニテモ白米過分ニ春調候儀ハ如何致考候哉ト承候

付、三町ヘ米被相渡早々致春方差出候様被仰付候ハ、

百石位ハ直ニ相調可申段申上候、

一人數三万人カ五万人カ長崎ヘ被差出候様可申来趣ニ御

咄御座候得共、御高二応候

公義御軍役千弍百騎余ノ御賦御座候間、大數一万弍参

千人ノ惣勢御座候間、決テ右様過分ノ人數ハ仰渡有御

座間數奉存候段申上候、

一桑名ニテハ樂翁様御流儀杉山方ヘ御預相成、師匠ハ一

人ニテ候由先達テ承候、其通カト笑左衛門殿ヨリ致承

知候付、成程其通ニテ候段申上候処、当分御国ニテハ

園田・右松・田中ナドノ段々師範家有之、右ノ面々夫

々流儀々々ニテ致下知候ハ、中々致一致間數被相考候

如何可有之哉ト御尋ニ付、夫々頭々ヨリ御下知有之上

ハ何流儀ト申候テ不致承知候ハ有之間數、夫ヲ不相守

者ノ軍法ヲ犯候者ニ御座候間、罪科ニ可被処申上候処、

合戦ハイツレ一致ガ本ニ候ヘハ、タトヘ表通り下知ニ

随候テモ心中ニハ不致合点筈候間、一致ニハ至リカタ

カルヘク、樂翁様ノ被成方至極ノ儀ト御考被成候段致

承知候、

一兵糧旁ノ手当ハ御代官・御春屋役請持ノ由候得共、右

兩御役場ヘ任置候テ不致混雜様相調可申哉、当分通召

置候テ請持ノ御役場ナレハトテ中々出来ルニハ有之間

數御考ノ段、笑左衛門殿被仰候付、御尤モ奉存候段申

上候、

七月廿一日志津馬ヨリ御用ニテ鹿ノ間へ罷出候処、笑
左衛門殿・宗之丞列席ニテ、志津馬ヨリ致承知候ハ、
此間ヨリ申上候条々不残

上様へ申上候、右ニ付猶又相尋候様 御沙汰有之、其
訳ハ追々書籍等ハ差出候へ共、右外ニ御当国御手当ノ
儀取シラへ置候儀ハ無之哉ト致承知候付、右御人数賦
ノ儀ハ夫々御高ニ応シ組立候伝法ハ御座候得共、別段
取仕立置候書物ハ無御座候、乍然此節田中諸右衛門・
上原十郎左衛門へ被仰付一空助言ヲ以出来、差上候御
旗本三百騎ノ御備賦有之段申上候処、右三百騎ノ御備
賦ハ最早差出相成居候、左候へハ右外ニハ無之哉ト承
候付無之旨申上候処、右三百騎ノ御備通被仰付候ハ、
三・五日中出張可相調哉ト致承知候付、右之御手当迄
モ御備ヲ組立候迄ニテ、夫々頭々ヲ初一統ノ人数兼テ
差心得居不申、諸手当等モ無之事御座候間急速ノ出張
ハ相調申間敷申上候処、右通人数組立候ハ、夫々ノ頭
々内々ニテ取シラへ等ハ無之哉ト承候付、此処ハ 御
上ヨリ御吟味ヲ以被仰付事ニテ、師範家ニテモ出来申

事ニテハ無御座、師範家ノ者其職ニ罷居候ハ格別皆共
上様ノ思召ヲ以可被仰付儀ト奉存候段申上候処、然ハ
師範家ヨリ差上候ハ法則ニテ、現事ノ処ヲ

上様ヨリ御取り扱ヒ無之候テハ不相成筋カト致承知候
ニ付、丁度其通りニテ、備々人数ノ組合迄テハ伝法ヲ
以テ致賦方差上候へトモ、其上何某々々へ頭被仰付候
ト申処ハ

上様ヨリ被仰付訳ト奉存候段申上候処、申通りノ事候
ハ猶又

御前へ可申上トノ段致承知候、

安田助左衛門

御小姓与

成田正右衛門

右根占表へ

御小姓与

竹下清右衛門

右山川ヨリ根占表へ

右ハ御内用ノ儀有之右之通り被差越候条可申渡候、

七月

笑左衛門

右之通弘化四年丁未七月廿二日被仰付、翌廿三日地方
検者伊地知三之助同道差越、佐多・小根占へ台場御取
立八月十一日帰府、

弘化四年丁未八月十四日ヨリ諸所台場画図取仕立被仰
付、御記録奉行得能彦左衛門・平川宗之進同様掛ニテ
於下会所取仕立同廿三日成就、

弘化四年丁未九月十五日、霧島温泉へ高鍋ノ者共参候
段相聞得、怪敷者ニ付引戻一条ニ付御内用ノ儀被仰付、
書役並下町十人役召列被越候、廿四日帰府、

弘化四年丁未十月四日高奉行御役料銀六枚三拾目、勤
方は迄ノ通り被仰付候旨、笑左衛門殿ヨリ川上龍衛ヲ
以被仰付候、

安田助左衛門

右ハ御内用ノ儀被仰付置候付、一往高奉行方へ相勤候

様被仰付候条可申渡候、

十月

笑左衛門

右之通末十月六日被仰付候、右ニ付テハ給地高御改正
ノ儀一昨年ヨリ申上置候処、此節御軍役ノ儀被仰出候
付、給地高享保ノ御規格ニ基取調候様被仰付候付、有
川藤左衛門へ引合被仰付度申上、其通り被仰付段々取
調申上候事、此節御内用向被仰付趣有之取シラへ仕候
形行左ニ申上候、

一大身分ノ格ニテ一万石以下ノ人ハ、九千弐三百石迄高
上リ御免可被成候間、九千石ニ不及内ハ百石・千石ニ
及候節々前以高上リノ願申出ニ不及高直可申渡候、九
千石ニ及候節ハ願申出達

貴聞御免ノ上高可相直候、

一 所持ハ七千石、一所持格ハ五千石、寄合ハ三千石、
寄合並ハ弐千石迄高上リ可被成御免候間、右定ノ高ニ
不及内ハ百石・千石ニ及候節々前以高上ノ願申出ニ不
及高直可申渡候、右定ノ高ニ及節ハ願申出達

貴聞御免ノ上高可相直候、

但

何千石ヲ限リ御免ノ事ニ候ヘトモ、高直ノ節少々

余計有之差支儀モ候ハ、御定ノ高ヲ越候共、百

石ノ内ハ御免ノ内ニ相加ヘ高可相直候、

一右定ノ上高上リ候儀為差立故障有之候ハ、各別候間願

可申出候、左候ハ、其節之勤方人ニ依御加増ノ 思召

ヲ以高上御免被成儀モ可有之候、何ソ故モ無之願迄ニ

テハ被成御免間敷候、

一寄合並ニテ無之者ハ、千石以上ニハ高直御免無之候得

共、寺社奉行・御勘定奉行・組頭・御番頭ナド被仰付

候者、御役中ハ勤方人ニ依御加増ノ

思召ヲ以高上リ可被成御免儀ハ品ニ依可有之候間、無

抛訳有之候ハ願可申出候、達

貴聞何分ニモ可被仰付候、尤千石ヨリ内ハ百石ノ節々

前以高上リノ願不及申出ニ高直可申渡候、

但

千石迄テ高上リ被成御免候人有之、高直シノ節少

々余計有之差支儀モ候ハ、千石ヲ越ヘ候テモ百石
ノ内ハ御免ノ内ニ相加高可相直候、

一右定ヨリ上ノ高當時持来候ハ格別ニ候、持来候者モ其

上ノ高上ハ願迄ニテハ被成御免間敷候、勤方人ニ依御

免可被成儀モ可有之候間、無抛訳有之候ハ願可申出候、

達

貴聞何分ニモ可被仰付候、私領並持切名仕明高ハ格別

ニ候間、定ノ上高上リ候共以前願申出ニ不及右ノ增高

ハ可相加候、

右之通り此節被相定候間、規模帳紙ヲ以テ記置候様高

奉行ヘ申渡、其外首尾相濟候座ヘ如例可申渡候、以上、

〔朱書〕〔正徳二壬辰乎〕
辰四月

本島津
久家

一御家老・直触ノ外當時屹立候御役被仰付置又ハ地頭職

被仰付置候者、持高千石ヨリ内ノ高上リ可被成御免候、

右体ノ者当分持高ヨリ上九拾石余百石内ノ高上リハ、

御法ノ通高奉行シラベ申出候ハ、高直可申付候、百石

ノ節ヲ越候節ハ願ノ上奉伺御免可有之事、

但

右体ノ者御役御免ニテモ首尾能御免ノ者ハ、持高六百石以上千石ヨリ内ノ高ニテ候ハ、持高ヨリ上九拾石・百石ヨリ内高上リ其身代ニハ御免可被成候、且又隠居以後悴代罷成又ハ首尾悪敷御役御免ノ者、右六百石以上ノ持高ヨリ上少ニテモ高上リ被成御免間敷候、

一祖父曾祖父代ヨリ屹立候御役相勤候ハ、且又地頭職ヲモ被仰付置候者子孫、小番勤来候者ハ五百石成御免可被成、小番迄ヲ勤来候者ハ〔石脱カ〕五百成御免不被成、四百九拾九石余迄ノ高上リ可被成御免事、

但

百石ノ節ヲ越候涯々ニテ願出候節奉伺御免可有之候、

一新番家筋ノ者高上リ御規不相見得差支候趣有之候、代々新番ノ儀ハ三百石成可被成御免候、尤家筋俗生等ノ依訳ハ、小番・御小姓与高上リニ準シ時々吟味次第増減可被仰付候、

右之通り被仰付候条帳面記置候様申渡、可承向々ヘモ可申渡候、

正月

久馬

右之通り寛政八年辰正月廿一日被仰渡候、

一三百石成ハ代々士筋ニテモ、近代御步行格之勤迄テ仕、其身モ右通候ハ被成御免間敷候、乍然江戸詰ナドニ道中鍵為持候程ノ勤仕候者ハ様子ニヨリ被成御免儀モ可有之候、道中鍵為持候者ニテモ、御步行格之者ニテ鍵為持候ハ右体ノ者ハ被成御免間敷候、代々士筋目ニテ大番相勤候ハハ貳百石成可被成御免候事、

但

百石ヲ越候涯々ニテ願出候節奉伺御免可有之候、右之通御規模帳ヲ以被仰渡置、当時其通ノ御取扱御座候ニ付、古来ヨリノ御規模通可被仰付旨、此節猶又可被仰渡置候哉ト奉存候、

一高直不相濟答ノ者借銀返弁又ハ利払ノ方坏ニ内々ニテ所務相請取候儀、且高上リ御免無之答ノ者内々ニテ高相求置所務請取候儀、又ハ内々ニテ〔高カ〕内相求別人名前ニ

テ召置所務請取候儀、皆共御禁止被仰渡置候処、当分御格迦シ過当ニ所務相請取候モノトモ数多有之哉ニ相聞得候付、右者共儀ハ来申三・四月迄限月被相立高直願出、又ハ脇方へ附属イタシ其屆時々申出候様敷數被仰渡度奉存候、且其上限月相過候テモ高直等不願出候ハ、御取揚被仰付候テモ不相当ハ有御座間敷候へ共、夫ニテハ旧来ノ習俗諸人迷惑ニモ可存候間、別段御吟味ノ上、高代銀ハ先年来ヨリ最安所ヲ以被相立御買入被仰付筋ニテモ可有御座哉、御吟味次第奉存候、右之通り於被仰付ハ取調ノ上、諸出米丈ケハ模合方へ入附被仰付度、左候テ後年高主ハ勿論、余人ニテモ高代銀上納ニテ申請度申出候ハ申請可被仰付哉、

一 当时身分違下賤ノ者共ヨリ名前被相頼、内実ハ借銀ノ方ニ持高並抱地高等請取置候モ有之哉ニ相聞得、別テ不相当ノ儀ト奉存候間、御取揚ノ上諸人へ代銀申受ニテモ可被仰付哉ト奉存候得共、猶又御吟味次第急度被仰渡度奉存候、

一 右之通御取扱ニ付テハ銘々持高ハ勿論、脇方ヨリ内々

ニテ買取置又々致取調貸居候次第現事ノ処、双方ヨリ高員數村々門名ハ勿論、抱地迄テモ其訳委細ニ相記、高奉行所へ書出候様被仰渡度、尤モ及間違候ハ其時宜ヲ以屹ト可被及御沙汰段モ被仰渡度奉存候、

但

郷々現取調ノ処、又ハ拘地高ノ儀モ郡奉行ヨリ相糺候様被仰渡度奉存候、

一 取込拝借滞納有之人高売払候儀ハ、拝借ノ多少ヲ以被成御免事候付、当人へ相糺候上残り高ノ多少可被成御免哉、且又取込拝借有之人高相求候儀不相成御法候へ共、取込拝借ノ員數ニ応其高ノ所務皆同差上候カ、依願ノ訳半分、又ハ無抛訳ニ依テハ其内ニテモ返上ノ外ニ相重差上候儀ハ格別ノ故、時々吟味ノ上御免可被成旨被仰渡置候へ共、此節ノ儀ハ取込拝借有之人ニテモ高直被成御免度、左候ハ返上方ノ儀ハ追テ吟味仕可申上候、常式高直願出候御規定通向々拝借糺等仕候ハ日込ニモ相成涯々埒明兼可申候付、前文之通被仰渡度奉存候、

一 幼少ニテ勤方無之者ハ高直不被仰付候ヘハ、是又同斷高直被仰付度奉存候、

一 高直ノ儀ハ屯置一統ニ申上候様被仰渡置候ヘ共、此節ノ儀ハ速々相濟候様被仰付度奉存候、

一 鹿兒島高ノ諸郷ヘ遣候儀、且諸郷高鹿兒島ヘ買入候儀モ御制禁ノ儀候処、拘地高等諸郷ハ内々ニテ売渡、諸郷拘地高モ内々御当地ヘ買入、又ハ現高諸郷ヘ致取納候モ有之ヤニ相聞得候付、急度不相成筋可被仰付哉、

一 年久敷売渡置候テモ高直其儘召置高主・証拠人共最早過去、左様ノ何ハ当分存生ノ者ノ売渡証文等無御座候テハ高直御免不被仰付御規ニ候処、琉球島方旅行ノ人モ決テ可有御座、左候ヘハ往返ニモ相掛日込可相成候間、応成行可申上候付、日延被仰付度奉存候、

一 江戸・京・大坂・長崎詰ノ者モ、高直ニ付テハイツレ不致往返候テハ相成間數奉存候間、其段委細高奉行所ヘ申出候ハ、高奉行ヨリ江戸詰御趣法掛御側御用人、京・大坂御留守居、長崎御付人ヘ致問合可申候間、速々返答有之候様被仰渡置度、右ニ付テハ定式飛脚ニ往

度丈ケ、日數百貳拾日ヨリ内ニハ是非相片付候様被仰渡、左候ハ御当地御限月中ニハ相片付可申奉存候、

一 御格相当ノ高ハ高直不願出候テモ高奉行ヘ届申出置候ヘハ、高直申迄テノ間所務相請取候儀不差支御法候得共、其通ニテハ相片付申問數候間、現々高直申出候様被仰渡度奉存候、

一 高直ニ付テハ内々入組候儀多、仮令名寄帳高直証文等差出候テモ、相手ヨリ高不相直様向々ヘ内意等申込、是迄片付兼候儀ノミ有之候間、此節ノ儀ハ名寄帳高直証文相添差出、其上所務米高買主方ヘ致取納候儀無相違候ハ、内意等無御取揚高直被仰付度奉存候、

一 諸郷高上リ等ノ儀、其外高持成・高上リ等取扱ヒ振リノ儀トモ被究置候通ニテ、勿論臨時ノ儀ハ時々奉伺候様可仕候、

右ハ高持成・高上リ等付テハ、享保十三年申十二月屹ト御規定被相居御規模帳被渡置候処、当分ニ至リ内々ニテ持高取遣候儀一統習俗相成御格式相破レ居、勿論諸士中ヘ知行被宛行置候儀ハ、夫々身分ニ応家来・下

人等迄テ致扶助、非常ノ備ハ勿論、平日ノ御奉公方無
滞相勤候様トノ御事ニテ可有御座、夫故知行ノ多少ヲ
以勤場ノ向ニ依リ別段御役料米等モ被下置事ニテ、其
上知行高ノ儀ハ

公義御軍令ニモ掛候兵賦ノ根元ニテ

御代々様急度被

仰付置候趣モ、乍恐

御国家ノ御安危ニ関候程ノ至テ重立候御事御座候処、
別テ致混雜居候向相聞得、

御当国ノ儀ハ御高前不相応諸士株多御座候付全体不足
給地高、今通リ片落相成候テハ困窮者共追年増長仕可
申、且又内実ハ過分ニ致所務候者、表向ハ小高ニテ罷
居御役料米等申受居候向モ可有御座、旁ニ付テハイッ
レ難被捨置訳合御座候付、享保年鑑被渡置候御規模帳
ノ通リ此涯被復御旧規候様、御取扱有御座度儀ト奉存
候、左候テ前条申上候鎖細ノ御格式ハ別段ニ被成置候
テ、高直等最安ク相濟、少ニテモ早目ニ相片付候様被
仰付度奉存候、乍然別テ重立候儀ニテ人氣ニモ相拘リ

不容易次第ニ奉存候ニ付、私式差究難申上御座候間、
此上ハ猶又御評議ノ上急度仰渡相成候様有御座度奉存
候、御規模帳書抜相添此段御内用ヲ以申上候、

未十月廿四日

有川藤左衛門

安田助左衛門

一御家老・直触ノ外当時屹ト立候御役被仰付置又ハ地頭
職被下置候者ヘハ、千石ヨリ内ノ高上リ可被成御免候、

右之通リ御規模帳ニ相見得候ニ付吟味仕候処、御家

老・直触ノ外屹立候御役ノ儀、当時ニテハ御側役以

上ノ場相当可申哉、左候ヘハ千石ヨリ内ノ高上リ可

被成御免儀候ヘ共、家筋俗生等ノ依訳御取扱相替可

申候間、其時々吟味仕可申上候、

一一代小番御役人並賦重

右ハ御納戸奉行以下教授迄ノ御役人、御小姓与家筋ニ
テ地頭職不被下置者並十人賦以上ノ御役人ヘハ、三百
石成被成御免事故、御役ノ内ハ其通可被仰付哉、右ニ
付類例見合申候処、東郷傳兵衛事、代々御小姓与ニテ

道奉行御役相勤一代小番被入置候処、三百石高上リ御免被仰付、土師孫太夫事、御目附御役被仰付一代小番被入置、是又同断高上リ御免被仰付候付、右体ノ者ハ三百石成迄ハ可被成御免奉存候、乍然家筋俗生等ノ依訳ハ御取扱相替可申奉存候付、前条同断可申出候、

一代新番並賦重

五人賦以下御役人

右御小姓与家筋ノ者、一代新番以下ノ御役人被仰付候テモ御取訳有之トハ相見得不申候間、矢張御小姓与家筋ノ処ヲ以テ式百石迄テノ高上リ可被成御免哉

ト奉存候、

一新規被召出候者高上リ、

一右之者御役被仰付又ハ小番・新番被仰付候者

右ハ御規模帳ノ内外城衆中芸能ヲ以テ被召出候者、月次御目見仕候程ノ者ハ百石成可被成御免相見得、且又新規被召出候者ノ儀高持成ハ可被成御免、高上リハ御免被成間數相見得候ニ付キ、其通り可被仰付儀候ヘ共、新規被召出者ノ儀ハ頭ヲ御免高上リ等被仰付置候モ有

之、御取扱向不同御座候間、是又其時々吟味仕可奉伺候、

但

文武ノ芸道ヲ以テ被召出候モノハ格別ノ段被仰渡置候、

右六行差究候御規模相見得不申、其上家筋俗生等ノ依訳相替申儀ニテ、一概ニ難申上置御座候間、右之通り吟味仕候、此段御内用ヲ以申上候、以上、

未十月廿四日

有川藤左衛門

安田助左衛門

張紙

本文御家老・直触ノ儀ハ、当時御家老組被入置候当番頭以上ノ場ニ相当、御家老・直触ノ外屹立候御役トハ、右当番以下御側役以上ノ場ニ相当可申哉ト奉存候、此段為御見合張紙ヲ以申上候、

未十月廿四日

一諸人持高ノ内、内々ニテ致売買高主方ヘ不致取納者數

右之通未十月十七日承知、

多有之哉ニ相聞得申候間、取納先相糺致取納候高ハ勿論、高主外ヘ致取納候高モ不殘取シラヘ、細々一張ヲ

〔頭注〕吉野原大練

弘化四年丁未十月廿八日於吉野原御流儀大炮御見分ニ

以申出候様請持郡奉行ヘ被仰渡度、就中近郷拘地高ノ儀ハ現取納不致モ有之候付、持高名前外ノ者致支配居候高過分ニ有之哉ニ御座候間、現々支配ノ者相糺委細申出候様被仰渡度奉存候、此段御内意ヲ以テ申上候、以上、

付、前日ヨリ郡奉行、同掛リノ面々同道差越候、左候テ翌廿九日晝ヨリ笑左衛門殿指宿ヘ御内用ノ儀有之御越ニ付、被召付被差越候、十一月二日帰府、

未十一月廿四日

安田助左衛門

有川藤左衛門

右之通り取シラベ申上置候処、未十一月十五日給地高

安田助左衛門

御改正被

右此節給地高取シラベニ付掛リ被仰付候条可申渡候、

仰出候、右ニ付翌申三月迄テノ間ハ昼夜ノ取込ニテ諸

十一月

豊後

事吟味等申上候ヘ共、多端ノ儀故略之、

笑左衛門

安田助左衛門

安田助左衛門

外ニ

郡奉行五人

右御内用ノ儀有之、調所笑左衛門殿廻勤先ヘ被差越候条可申渡候、

右御軍役掛被仰付候条可申渡候、

十一月

豊後

十月

笑左衛門

右之通り十一月廿三日承知、廿六日出立、大始良ニテ

笑左衛門殿へ面謁、給地御改正ニ付キ一統ノ模様申上、就テハ段々不宜手数モ有之、追テ数通仰渡相成候、十二月六日笑左衛門殿へ相付帰府、

御軍備ノ儀御手ヲ被付候ハ、如何様ニ御仕懸有之可宜哉存慮申上候様、海老原宗之丞ヨリ承知イタシ申上候書付左之通、

此節ノ儀第一

上様御ハマリニ被為依候御事ニテ、タトヘテ申上候へハ近年ノ諸向御改革・田地御改正等ニ

上様ハ申上ニ不及、御家老方御始諸御役場一向ニハメ付候処ヨリ、十二八・九ハ御功業御成就相成候、夫ヨリ又格別ニ御配慮被遊トノ御趣意諸士一統奉感佩処至極ノ儀ニテ実以基本ト奉存候、

一 懶惰ノ風ヲ直シ士氣ヲ奮発セシムルハ、文武ノ芸ヲ学ハシメ風俗ヲ一新セントハ、十人カ十人目ヲ付ル処ニテ、其通リノ事ニハ候ヘトモ、文武ノ芸ヲ学ヘト被仰渡トテモ、有志ノ士又ハ若輩者共ハ承知モ可致候得共、

壮年以上兩道共取捨居候者共へハ詮立兼可申、勿論教育ノ道文武兩道ヲ以御仕立有之外ハ無之候へ共、初発御手ヲ被下処肝要ノ御事奉存候間、士氣勃興イタス処ハ諸士一統ハ響渡リ候様ノ儀無之候テハ相成申間敷、

御閑狩トカ士躍トカ申様成惚体ノ人数鼓舞踊躍スル処ノ御取扱有之、其外勲功ノ家筋相絶居或ハ零落ヲ御取建被成下、抜群ノ逸士ハ御挙用有之英雄ノ心ヲ御攬被成度奉存候、

一 風俗御改正士ノ氣勃興イタス処ノ 仰出屹ト有御座度尤其中ニハ文武ノ兩道ヲ被為重候テ被仰渡、懶惰利欲ノ風俗相止ミ候様

御実意ヲ以被仰渡、銘々肺肝ニコタヘシミ入候様ノ仰渡振モ可有之、其節

御代々様御袖判ヲ以テ被 仰出置候知行高致混雜居、当分ニテハ御軍役モ出来兼、其上内々ニテ過分買入居候者共、表向ハ小高ノ筋ニテ御役料等申受不埒ノ処御叱有之、急度被復御旧規知行高ク大切成事諸士一統相心得候様分テ被仰渡奉存候、

一御掛リ御家老笑左衛門様ハ不及申ニ、外ニ御一人篤実
重厚ニシテ御家柄ノ御方、是ハ第一人望ノ入処、大目
附衆是モ人望ノ処肝要奉存候、

一右之通り御取扱有之候テ、夫々文武ノ心得有之者ハ御
褒美等有之候モ〔ラノツカラカ〕ノヲツカテ威愛並行ハルノ場ニ相成可
申候、

右愚案ノ次第乍恐申上候、以上、

未正月十日

安田助左衛門

右前条旁ノ次第追々申上置候処、給地高御改正ハ勿論、
五ヶ条ノ御手当向、土踊・御関狩・勲功ノ家筋御取立
等ノ儀迄不残、夫々御取扱被仰付候事、

安田助左衛門

右御内用ノ儀有之近国諸所へ被差越候、左候テ御賄料
等ノ儀ハ御内用計申付候条申渡、可承向へモ可申渡候、

十二月

笑左衛門

右之通り十二月八日承知、同十日橋口彦助・折田與右
衛門同道出立、浦賀へサン越、平根ノ台場並鶴崎・觀

音崎・十石・旗山・大和様台場・腰越台場委細ニ見届
同十五日帰府御届申上候、左候テ此節ハ奥羽迄テモ被
遣、国々形行モ致見聞候様被仰付置候処、来春早目ニ
御発駕可被為在候間、此節ハ先ツ不被差越段致承知候

〔表紙〕

齊興公史料

弘化四年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数三十七枚）」の記載あり〕

目録

軍制改革ノ諸令

〔御軍賦改正標章図〕

軍役高改正御小姓組頭ニ係ヲ命ス

朝鮮国へ異国船来ル宗對馬守届書

参考 鎌田正純日記抄

百目以上ノ砲新製届出ノ令

友野市助ニ御軍役掛ヲ命ス

以上六条

五四八 軍制改革ノ諸令

○御軍役方御手当向之儀ニ付別紙之通被

仰出候付、謹テ奉承知候様御役人限詰衆へ申渡、写取候様可申渡候、

十月朔
日

笑左衛門

○異国方御手当之儀以前ヨリ被定置候得共、段々不連続

之儀モ有之急速之出張等調兼、勿論天保之度

公儀御触渡之通蛮夷之諸国ハ専大砲等相用候付、和漢

戦闘之向トハ相変、殊更当时之御手当ハ古来ヨリノ御

国風ニ相背候廉モ有之、旁以

思召ニ不被為叶候付、多年被遊御工夫

大中様第十五世 貴久公

貫明様第十六世 義久公

松齡様第十七世 義弘公

御時代之御軍法ヲ基本ニ致シ、一家之流

儀ニ不相泥、何レモ宜ニ随取調外国防禦之御手当致全
備候様可致取扱候、左候ハ猶又御直可被遊

御差図旨被 仰出候、

十月朔
日

豊後

壹岐

石見

將曹

久馬

笑左衛門

島津家ノ軍法ハ古来一家ノ制アリシニ、二十一世綱貴公
御代寶永ノ中頃ヨリ享保ノ初迄ニ、国老肝付久兼・嶋津
久貫等甲州流ヲ主張シ、御家法ヲ廢シテ甲州新古折衷ノ
制ニ革メ、五十騎・三十騎・弓・槍・銃騎・刀五段備ノ
組織ニ革メタリ、是ヨリ先、幕府全国一般甲州流ノ制ヲ
用フヘキ訓令アリシモ、本藩ハ依然家法ヲ用ヒ来レリ、
然ルニ肝付・島津等ハ己カ主張スル処ノ甲州流ニ改革シ、
銃・砲・槍ハ足輕ノ器トシ槍・騎ノ二ヲ騎馬組ト定メ、

兵器其他モ改製シタリ、茲ニ於テ固有ノ御家流ハ廢棄セ
リ、適々志アル者御家流ヲ学フ者アリシモ一己ノ私学ト
シ、中ニモ徳田邑興（通唱小藤次、孫欲軒ト称ス）文化ノ初
メ御家法ニ恢復セムト門人等ト謀ル処アリシニ、忌諱ニ
触レ流罪ニ処セラレタリ、是ヨリシテ御家法ヲ学フハ密
ニシテ有志者慨歎ニ沈ミタリ、如斯ノ情況ナリシカ、近
代外国船屢々渡来海防論勃興シテ、遂ニ布令ノ如ク御家
法ニ回復セラレ、洋式ノ大小砲ヲ參用セラル、ニ至レリ、
齊彬公ハ御家法御回復ノ尊慮積年ノ御志望ナリシト雖時
機至ラサリシニ、今回父公ニ親述セラレシニ公御同感、
改革ノ諸事御委任、調所廣郷ニ命セラル、ニ、少將公ノ
御指揮受クヘキ旨命セラレシトナム、齊彬公御家流ヲ御
学ヒアリシハ、池田仲太郎・川崎四郎左衛門・法亢六左
衛門等カ所有ノ書籍御閲読、且同人等カ意見聞召サレ、
中ニ就テ法亢・川崎ハ洋式ノ砲術家ナリシ故今回御軍賦
ノ列ニ命セラレ、御家法ニ洋式砲銃隊ノ編伍斟酌改正セ
シメ玉ヘリ、之ヲ御軍賦改革ノ瓶トス、而シテ嘉永四五
年ニ至リテ尚ホ洋式則リ修成セラレ、安政ノ初ニハ洋式

大小隊ニ一変セラレタリ、

御軍役方

右ハ別段

思召之訳被為

在

右之通被召建候条向々へ可致通達候、

十月朔
日

笑左衛門調所
広郷

御軍役方
御名代

島津山城殿忠教、久光
公旧名

島津内匠殿忠長

右ハ近年御領内並長崎其外へ毎度異国船来着ニ付、從
公邊援兵等可被

仰出儀モ可有之段被仰渡候付テハ、不時出張被

仰付儀モ可有之候付

右之通被 仰付候、左候テ、此節 思召之訳有之、御

軍役方被召建御役々被掛置、御手当向取調被
仰付候間、御用之節々出席御用被承届候様被
仰出候、

右之通内匠殿ニハ名代島津又八郎殿へ御名代島津讚岐
殿(實敦、垂水ノ領主)ニテ被仰付候条、表方へ致通達、
奥掛御勝手方へモ可相達候、

十月朔
日

笑左衛門

御軍役方

副御名代

島津豊後殿

右ハ近年御領内並長崎其外へ毎度異国船来着ニ付、從
公邊不時出張被仰渡儀モ可有之候付、右之通被 仰付
候、左候テ

御名代出張之節差副可被差出候、乍併兼テ御城代被仰
付置候付

御留守之節ハ別段之事ニ候、且此節

思召之訳有之御軍役方被召建候付、御手当等之儀調所
笑左衛門申談致吟味候様被 仰付候、

十月朔
日朝

笑左衛門

御取次

二階堂志津馬行建

御軍役方

惣奉行

調所笑左衛門殿

右ハ此節

思召之訳有之右之通被 仰付候、左候テ御軍役方被召

建候付テハ

御趣意之旨細々被仰付置候通、御先代様御家流ニ基取

調、勿論御手当向之儀専致主宰万端不行届之儀無之、

屹卜御規定相立候様可致取扱候、且

御出馬御供又ハ

御名代等出張之節ハ可被差出候、

右之通

御名代島津讚岐殿ニテ被仰付候条、表方へ致通達奥掛

・御勝手方へモ可相達候、

十月朔
日朝

壹 岐

御軍役方

右ハ此節

思召之訳被為 在御軍役方被召建

御直被遊

御差図候付右之通被 仰付、左候テ御軍役方へモ時々

致出席御用取扱何篇達

御聴候様被 仰付候旨名代へ申渡候、此旨向々へ可申

渡候、

十月朔
日朝

笑左衛門

御軍役方

惣頭取

海老原宗之丞清瀧

右之通被 仰付、左候テ此節御軍役方被召建候付取調

ハ勿論御手当向之儀都テ致差引、右へ相拘候御用ハ向

々ヨリ申出候儀モ何篇致吟味時々可奉伺候、且

御出馬御供又ハ

御名代等被差出候節ハ可被召付旨以

思召被仰付候、此旨向々へ可申渡候、

十月朔
日

笑左衛門

御軍役方取調付諸士其外人數又ハ武具類取調被 仰付
候間、御軍役方ヨリ時々案文等相渡支配頭等へ可及問
合、勿論及遲滞候テハ別テ不都合ニ候間、日限之儀ハ
問合通速ニ御用弁致候様支配下へ厚可申渡旨、向々へ
不洩様可申渡候、

十月二
日

豊後

笑左衛門

大番頭

町田 監物久視

御勘定奉行

名越 右膳盛胤

御小性(姓之)与番頭

川上 式部久美

川上 龍衛久齡

鎌田 刑部正純

喜入 壬生久高

御側御用人

島津 兎毛久章

豎山 武兵衛利武

御趣法掛

友野 市助

御側御用人

森川 利右衛門

御用人

島津 隼人久芳

伊勢 雅樂貞章

町奉行

東郷 左太夫

御側役

吉利 仲久包

御納戸奉行

三原 藤五郎

岸 喜右衛門

物頭

赤山 鞆負

名越 左源太盛貞

郷田 仲兵衛

有川勇四郎

御使番

寺尾庄兵衛

向井新助

御船奉行

蒲生郷右衛門

今井一兵衛

御小納戸頭取

調所左門廣胖

伊集院平

御右筆頭

龜山甚之丞

吉井源七郎

御作事奉行

四本次郎左衛門

早田直次郎

高奉行

有川藤左衛門

喜入九郎

物奉行

福島半次郎

川上助七郎

御馬預

川北鐵之進

相良量右衛門

御供目付

江田半藏

山田權兵衛

御目付

東郷彌十郎

山口與三左衛門

山奉行

樺山惣兵衛

牧仁兵衛

郡奉行

安田助左衛門

追田仲之助

山本孫兵衛

中島喜左衛門

野村庄右衛門

永田新八郎

御細工奉行

中村 始

東郷 半助

寺社方御内用掛

愛甲源五郎

寺社方取次

田原仲之丞

御代官

河野仲次郎

武井四郎右衛門

種子田源助

大迫 市助

御台所頭

田中休左衛門

御着屋役〔卷〕

森 喜右衛門

高橋金五郎

御数寄屋頭

松山隆阿彌

御用部屋書役

伊東正兵衛

御側御用人座書役

右之通御軍役方掛被 仰付候、

新納八郎太

十月六日

豊後

笑左衛門

有馬 衛守

右ハ御軍役方兵道方御役者被仰付候、

十月六日

豊後

笑左衛門

得能彦左衛門

税所七郎右衛門

田中清右衛門

法元六左衛門

野元源五左衛門

川崎四郎左衛門

右ハ御軍役方取調掛被仰付候、

右之通被仰付候条可申渡候、

十月六日 笑左衛門

御家老座書役
伊集院七之丞

染川喜三左衛門

迫田甚助

右ハ御軍役方掛被仰付候条可申渡候、

十月六日 笑左衛門

御金方

美代藤助

御趣法書役

植村仲藏

右御軍役方掛申付候条可申渡候、

十月六日 笑左衛門

太守様齊興 来申年

御參勤御時節御定例之通可被遊筈候得共琉球へ異国人

致滞留居不容易御時節、且御領内海岸防禦御手当等モ

御願見之上御手厚被遊

御指揮度候付、来秋迄

御參府御延引被遊度御願被

仰上候処、御願之通被仰渡候、

十月七日 笑左衛門

御軍役方御座之儀、鷲之間次之間へ明後十七日ヨリ被

召建候条、掛之面々へ申渡可承向へ可申渡候、

十月十五日 笑左衛門

大目附

二階堂主計

川上 東馬

右御軍役方掛被 仰付候条向々へ可申渡候、

十月十七日 笑左衛門

五四九 御軍賦改正標章図

○五三七号文書と一部同文なれども再掲す。

長崎出張御役者挑灯

一 御使番・御目付八十文字御紋相付、脇ニ使番・目附ト

書キ可申候、

一右外軽役ハ自分紋所ニ薩州小頭玉薬方何々ト役名書キ可申候、

諸郷物主挑灯

一馬上腰挑灯ニ自分紋所左右ニ付ケ、前後ニ何方物主ト書キ可申候、

一弓張挑灯ハ常式通自分紋所迄ニテ、物主之字書キ申間敷候、

私領物主小指旗

一浅黄地ニ三分一裾紺何方物主ト書キ可申候、但寸尺等御定之通、

御城下六組之備但地合晒布上布之間

長八尺三寸

紺二尺六寸



乳数見合

竿長二間二尺計

前立物差物并笠印袖印

一甲前立物ハ御領國一統之印通角落シ一之字
一御城下土笠印袖印之通、

但笠印地晒好次第袖印ハ晒四半

笠 印



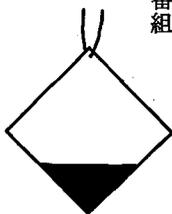
一横三寸五分

一長サ一尺

一裾紺三分一程

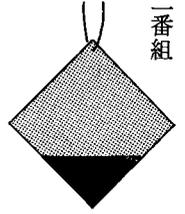
一白地紺染出シ裾紺六組同様

一番組



白ニ裾紺

二番組



黄地ニ同紺

三番組



浅黄地ニ同

四番組



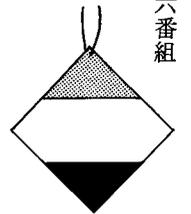
赤地ニ同

五番組



赤白ニ同

六番組



朽葉浅黄同

但小番新番ニテモ戦兵ニ出テ候面々ハ其方限之組色可相用候、

總一尺一寸程



長サ一尺八寸ヨリ二尺計

竿長サ四尺一二寸程



寸尺等右同断



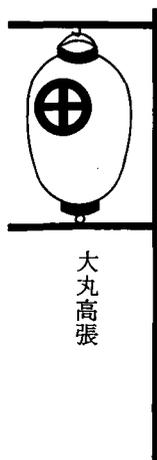
十尺等右同断

一 御側役ヨリ御納戸奉行御小納戸頭取迄指物好ミ次第
 其外御小納戸御小姓ハ前条組分之通、

一 御使番指物ハ令ノ字御目付ハ監ノ字地白ニ黒ク書ク
 裾紺

但役者指物ハ其節可被相渡物主同断、

一 大将分ノ人旗馬印古来其家ニ吉例之品柄ハ其段被申
 出可被相用候、



大丸高張



袖摺

一 大身分以上其外大丸高張等被相用候面々ハ前後脇下
 ニ小ク自分紋所

一 小荷駄印当分ノ印ニ下紺吹流図之通御当地六組一番
 二番ト組々記分諸郷私領惣テ郷名相記、私領無之大
 身ハ自分紋所

小荷駄印



- 一横二寸五分
- 一長サ八寸程
- 一竿見合



一御城下小頭ハ白地ニ小頭ト相記、裾紺
 一戦兵ノ人数ハ布木綿類ニテ陣羽織相印ニイタシ、就
 中長崎表出陣ノ人数用意可有之、

御兵具方



御兵具所

御納戸御広敷之儀モ準之、



- 一横一尺
- 一長一尺八寸

御兵具方与力



袖印

- 一横三寸五分
- 一長一尺
- 一白地紺三分一

右同

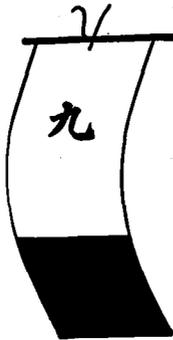


笠印

- 一横二寸五分
- 一長八寸
- 一紺三分一
- 一朽葉裾紺



〔朱書〕
諸郷



袖印

地白ニ九ノ字
寸尺笠印同断

足輕

一御兵具方足輕色合与力同断、地朽葉、九ノ字、裾紺



笠印

一横三寸
一長六寸

右同足輕



使役

袖印

寸尺右同



袖印

寸尺右同

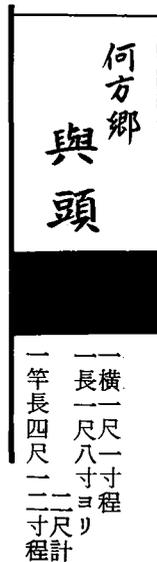


笠印

一横三寸五分
一長一尺
一紺三分一
一地浅黄裾紺紋
白ク

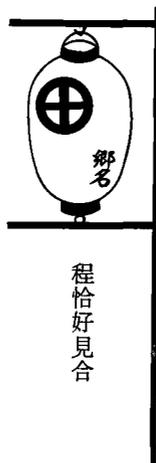
一外城笠印ハ上紋所、裾紺、袖印ハ地白ニ郷名、裾紺
但使役ノ袖印ハ郷名ノ上ニ使ノ字ヲ書ク、

一諸郷与頭ハ何方郷与頭ト相記



一横一尺一寸程
 一長一尺八寸ヨリ
 一竿長四尺一二寸計

一諸郷大丸高張挑灯前後ニ御紋所、脇下ニ郷名

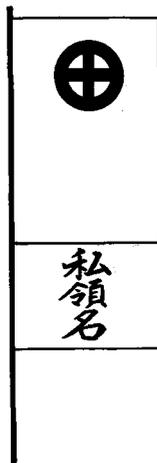


程恰好見合



人馬寄所目印在合有之候ハ
 新規造調ニ不及、寸尺見合

私領



家柄又ハ御役柄之面々馬廻リ

一私領並諸家中笠印・袖印浅黄地ニ主人紋所相付、
 裾紺

一笠印・袖印寸尺惣テ同様

但十文字御紋被相用候面々ハ替紋

笠印並袖印

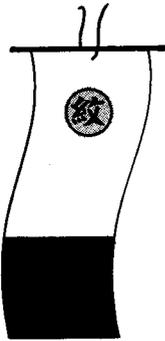


一横三寸
一長九寸
一地浅黄纹紺染
出シ

一 所持ヨリ御小姓組番頭其外備頭ニテモ被相動候向

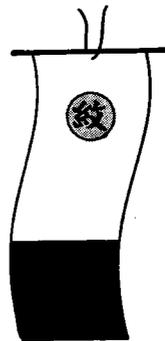
ハ指物好次第

一 右同笠印朱纹裾紺



一横三寸五分
一長一尺
一白地裾紺三分

一 右同袖印朱纹、裾紺



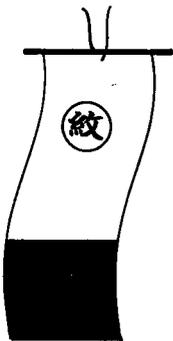
一寸尺其外
右同

一 寄合以上ニテモ格式ニ構ナク軍場ノ指物被相用、戦
兵ニ被出候ハ、其方限色合笠印可被相用候、

〔朱書〕
与力

一 与力笠印紋所裾紺、豎横寸尺外城同断、袖印ハ御役
所上ノ字相記、裾紺ノ場山道

笠印



一横二寸五分
一長八寸
一紺三分一
一朽葉裾紺

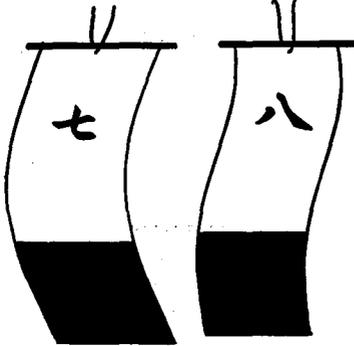
袖印



〔朱書〕
御納戸御広敷

一御納戸附御小人ハ八ノ字、御広敷足輕ハ七ノ字

但笠印・袖印共横三寸竖六寸五分



御小人

御広敷附

足輕

一横三寸

一長六寸五分

長崎出張 御目附



一 御目附十文字左右ニ目附ト記ス、都テ朱
一 御使番同断ニテ黒

右之通今般御改定相成候条不洩様可申渡候、

十二月

御軍役方御家老座印

五五〇 軍役高改正御〔姓カ〕小性組頭ニ係ヲ命ス

○本文書は、第五三三号文書と同文により略す。

五五一 朝鮮国へ異国船来ル宗對馬守届書長崎関
役報告

○本文書は、第五三四号本書と同文により略す。

五五二 参考 鎌田正純日記抄

○本文書は、第五三五号文書と同文により略す。

五五三 百目以上ノ砲新製届出令

○本文書は、第五三六号文書と同文により略す。

五五四 友野市助ニ御軍役掛ヲ命ス

友野 市助

右ハ御軍役方御手当向取シラへ掛被仰付候条、御趣法
方御用透ニ罷出御用取扱候様被仰付候条可申渡候、

十一月廿五
日

笑左衛門

〔表紙〕

齊興公史料

弘化四年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数五十四枚）」の記載あり〕

五五五 禄高改正布告

○本文書は、第五三八号文書と同文により略す。

五五六 参考 鎌田正純日記抄

弘化四年丁未二月五日晴乙卯

一四ツ時早目出勤、九ツ過ヨリ御厩へ少將様（齊彬公）御

下リニ付右江相勤、大鐘過御馬乗等相済直ニ帰家、^{〔供脱〕}角

野藤兵衛ニテ候事、

但昨日馬寄江出（競馬ニ等シ）候内百疋位今日乗方有之候事、

一七ツ後山本蘇仙御カ、様療治ニ参候事、

一御厩江相詰候内ヨリ不気分ニテ御帰殿迄漸ク相勤帰家直ニ相休候事、

一春峰様御忌日、且ヒガンニ付興国寺墓所へ財津彦太郎代参申付候事、

三月八日雨丁亥四ツ後ヨリ止、後晴

一今日ハ 太守様（齊興公）御着城ニ付五ツ過ヨリ出勤、御城下江罷出、八ツ前 御光着有之、左候テ八ツ後退

出ヨリ帰家、供角野藤兵衛、鏑脇田六郎次、小者吉原太郎ニテ候事、

一夕方山本蘇仙参リ御カ、様被成御針候事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

一今晚桂岩五郎殿宅論語会読式夜ニテ候へトモ断申遣候事、

九日晴戊子

一四ツ時早目出勤掛、調所笑左衛門殿昨日江戸ヨリ着ニ付、祝儀トシテ内玄喚迄参リ、夫ヨリ出勤、八ツ後帰家、供池田十八、鐘脇田六郎右衛門、小者吉原太郎ニテ候事、

一八ツ過森川孫八郎殿入来、七ツ過迄相咄被帰候事、

一七ツ時分山本蘇仙参リ御カ、様被成針候事、

一七ツ時分ヨリ役所へ相良清兵衛殿入来、且上村半兵衛殿・鎌田喜平太殿ニモ同断入来ニテ、夜入内江被通、尤暮前ヨリ堀四郎左衛門殿・和田仲太夫殿ニモ入来、酒肴一通振廻九ツ前比被帰候事、

十五日曇甲午四ツ前ヨリ少雨、後止

一今日ハ、少將様(全上)御発駕ニ付、五ツ過ヨリ出勤、四ツ時御発駕被遊、矢来御門外江罷出、御通濟出 殿、御礼後頼合御暇ニテ帰家、供池田十八、(鐘之)鐘脇田六郎右衛門、小者吉原矢太郎ニテ候事、

一八ツ後ヨリ桂岩次郎殿・相良清兵衛殿入来、同道イタ

シ伊敷別業江参リ、先日植付候桑江手入等イタシ、且御カ、様ニモ亭被召列茶摘トシテ被成御出候、左候テ暮過帰家、供池田十八、小者吉原太郎ニテ候事、

一留守ニ鎌田權右衛門殿入来ニ候由ニ候事、

廿三日曇壬寅四ツ過ヨリ晴

一四ツ時早目出勤、四ツ後頼合御暇イタシ、島津權五郎(登、久包旧名)殿同道ニテ築地大砲鑄製場江参リ、左候テ八ツ前帰家、供池田十八、鐘脇田六郎右衛門、小者吉原太郎ニテ候事、

一今朝永田新八郎殿入来ニテ候事、

一夕方阿田出之馬之田(由カ)ニテ西田町之者引来候ニ付、此方前ニテ右引来候者江為乘見候事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿・鎌田喜平太殿入来ニテ候事
一家内ニチト不快有之、前田圓心殿江申遣、二男圓節七ツ後見廻、拙者ニモチト風邪氣ニ付薬用イタシ候事、

四月十三日壬戌雨、四ツ後ヨリ上、間降

一西田橋掛替ニ取掛リ候、石橋ニ(從來木橋ナリシヲ四眼橋ニ架替ス、調所廣郷履歷ニ詳ナリ)相成候事、

一四ツ後早目出勤、八ツ後御家老衆退出、帰家供池田十八、鑓脇田六郎右衛門、小者吉原太郎ニテ候事、

一今日 太守様御筆之仰出有之、御一門方並ニ独礼之面々拝見、大番頭以下諸御役人・無役・大身分・寄合並迄拝聞有之候事、

一垂水屋敷(嶋津讀岐)ヨリ預置候馬ハ爪不宜、其上馬料等不相当ニテ候間、今日角野藤兵衛相付為率差返候事

一七ツ後ヨリ桂六郎次郎殿入来、且役所江相良清兵衛殿参居内エモ被通、酒肴一通振廻四ツ時分兩人共被帰候事、

一七ツ後小野郷右衛門殿入来、暫相咄候テ被帰候事、

四月廿八日雨甲戌間々晴

一今日ハ於吉野原 御流義砲術、御家老衆島津豊後(久寶)殿・調所笑左衛門殿御見分有之、御軍役方御名代島津周防殿(忠教、久光公旧名)・島津内近(匠カ)殿(忠長)殿ニ

モ御出張有之、御軍役掛目付二階堂主計殿其外御役々々出張有、我々共ニハ夜前九ツ半過ヨリ出馬、砲術稽古場之様相揃、正七ツ時惣人数出立ニテ朝六ツ前吉

野調練場エ参着(砲隊・銃隊行軍、大砲数門ハ前日運搬ス)、

六ツ過ヨリ調練相始、其節ハ跡ヨリ馬上ニテ備エ相付候、夫ヨリ十五ポンド其外打試、並ニ青山千九郎方備打等八ツ過比相濟 御名代其外御引取、左候テ惣勢之

跡へ我々共ニモ相付引取候テ、砲術稽古場へ一刻出席 帰家、供大迫庄之助・同氏貞太郎・同覺太郎・酒匂仲

左衛門・濱田伊兵衛・板坂八之進・財津彦八・川枝吉次郎、中間脇田六郎次・同四郎左衛門、鑓脇田六郎左衛門、小者吉原太郎、其外陳丹荷一ツ、合羽籠(荷カ)一筒、

夜ハ高張一ツ・袖摺一ツ為持候、且砲術方ヨリ御役名ノ旗相濟、右ハ雇物エ足輕之場ニテ為持候事、

一夕方役所迄鎌田嘉平太郎(トヤ)入来ニテ候事、

一今日吉野都合能相濟候ニ付、家中心祝ニ吸物一ツ相居、喜平太殿並ニ役人休左衛門エハ役所エ差遣候、其外供之人數且川畑源之助・山次左衛門ニハ砲術調練之方

エ出候付、何レモ酒・肴・飯為食候事、

五月二日晴庚辰夕方雨

一今朝於書院上下着用ニテ南村役人岩元助太夫江仰出御書付並ニ御家老衆御添書相渡、於南村飯屋一統江拝聞致サセ候様、且去ル辰年（天保十五甲辰）被仰渡候御儉約御ケ糸通身分ヲ慎不敬之義無之、衣服・祝事等御定之通屹ト相守候様申付候、尤右ニ付相良清兵衛殿入来ニテ諸都合為致候事、

一四ツ時早目出勤、四ツ後頼合御暇ニテ帰家、供川口良之進、鑓・小者昨日同断ニテ候事、

一四ツ過岩元助太夫緩々召出、南村仕置之儀尚又巨細申付置候事、

一今日ハ鎌倉流稽古遠馬之吹聴承候ヘトモ不得參候事、

一大鐘前桂内記殿入来、左候テ同道イタシ桂岩次郎殿宅

エ劔術稽古式ニ付參暮過帰家、供山次左衛門、小者

ニテ候事、

一留守ニ桂權四郎殿入来由候事、

一桂權四郎殿ヨリ肴並ニ野菜一折被送候事、

一鎌田佳藤大殿当分着中ニ付着問トシテ野菜一折相送候

事、

五日癸未曇朝雨天ヨリ止、間々小雨、夕方強雨

一端午ニ付 太守様被遊御出座候付五ツ半比ヨリ出勤、

御礼席エ罷出、左候テ九ツヨリ帰家、供山次左衛門

・川口良之進、鑓・小者昨日同断、合羽籠一荷為持候、

右ハ雇人足ニテ候事、

一今日祝儀トシテ内迄被通候人鎌田政十郎殿・同氏藤之

丞殿・同諸右衛門殿・上村半兵衛殿・鎌田吉左衛門殿

・同氏四郎右衛門殿・島津清太夫殿・鎌田眞助殿・東

郷孫八殿・桂岩次郎殿・四本三十郎殿・上村源七殿・

鎌田遠窓殿・相良清兵衛殿、緩々被相咄、節句祝トシ

テ吸物・酒・肴一通振廻五ツ前被帰候事、

六月三日晴庚戌八ツ時分暫雨

一四ツ時早目出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ帰家、供山

次左衛門、其外昨日同断ニテ候事、

一八ツヨリ内山本蘇仙御カ、様御針ニ參候事、

一八ツ後ヨリ役所エ相良清兵衛殿入来ニテ候事、

一大鐘時分法元宇左衛門殿・岩城三左衛門殿一刻入来ニ

テ候、尤青山十九郎殿砲術近日御家老衆不時御見分有
之旨御内達承知之由ニテ、右ニ付毎日桂岩次郎殿宅ニ

ヲヒテ銃^{〔彈カ〕}陳稽古イタシ候付、出席イタシ呉トノ事ニテ
候事、

一大鐘前ヨリ桂内記殿同五百鶴トノ入来、且和田中太夫

殿ニモ申遣入来ニテ、酒肴一通振廻四ツ過比被帰、五

百鶴殿ニハ大鐘過被帰候事、

七月朔日晴戌寅間々小雨、夜中雨

一今日ハ於谷山中之塩屋、成田正右衛門（成田ハ和業新式）

青山千九郎（青山天山流）砲術、御家老衆島津豊後殿・

島津石見殿・調所笑左衛門殿御見分（此日和洋二流何レ

カ实用適否ノ試験ナリ）若年寄樺山伊織殿・大目付島津主

殿殿御出席ニテ晝大鐘比ヨリ出馬、中之塩屋立宿ニ參

リ、夫ヨリ御家老衆立宿エ見廻、左候テ御棧敷之様相

詰九ツ前暫中入有之、又々相始リ八ツ過比相濟帰家、

供角野藤兵衛・川口良之進、中間六郎次、鑓・小者昨

日同断ニテ候事、

但谷山郷士年寄・組頭ヨリ肴一籠差出候事、

一御カ、様暑邪氣御塩梅ニ付朝稻三益殿エ申遣置、門人

土橋恕心拙者留守ニ見廻之由候事、

一拙者相帰無程鎌田遠窓殿入来ニテ暫相咄ニテ被帰候事

一今日青山氏砲術御見分ニ付、家来川畑源之助・山次丞

左衛門打方人数ニ出候事、

一今晚役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

一番所詰川口良之進代リ永山彦七出府之由、申出候事、

一今晚和田中太夫殿入来ニテ候ヘトモ、チト草卧相休ミ

居候ニ付断候事、

七月八日晴乙酉

一四ツ時早目出勤、八ツ前左之通被 仰付、取次島津權

五郎ニテ候、

海岸防禦掛

川上 龍衛 齡久

鎌田 刑部 純正

右之通掛被仰付候条、可申渡候、

七月 笑左衛門

七月 笑左衛門

異国方掛宮之原主計江戸詰ニ付、罷下迄之間掛寄被仰付置候処、今日石見殿ヨリ平田善太夫取次ニテ被成御免候、

一平田善太夫取次ニテ左之通被仰付候、

御流義大砲掛

川上 式部 美久

島津權五郎 包久

川上 龍衛 齡久

鎌田 刑部 純正

喜入 壬生 高久

島津藤十郎 芳久

右ハ 御流儀大砲指南方成田正右衛門江被仰付置候処

御門人共皆々致出精候段被 聞召通 御満足被 思召

上候、猶又引進メ致出精候様令教諭且年若ノ者共多人

数ノ事候間、士風不乱折角行義正數律義相守候様、厚

申談致指揮候様被仰付候条申渡、可承向江モ可申渡候、

左候テハツ後御家老衆退出後暫居残り、夫ヨリ島津豊後殿海岸防禦掛ノ事ニ付参候処、病氣之由候間藤十郎殿江対面、今日掛被仰付候礼旁申述置、夫ヨリ調所笑左衛門殿江参り候処、留守ニテ取次エ前件同断之礼旁申述置、左候テ帰家、供永山彦七、鑓・小者同断ニテ候事、但豊後殿・笑左衛門殿所エハ島津權五郎殿・川上龍衛殿同道イタシ候事、

一当分島津權五郎殿宅ニテ御流義成田正右衛門エ御預之砲術修練有之候付、大鐘時分ヨリ右覗トシテ参り、額娃織部殿・川上龍衛殿ニモ被参暮過退出ニテ帰家、供山次左衛門、小者ニテ候、参リニハ馬上ニテ参候事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

前比被帰候事、

七月十日晴丁亥

十一日晴戊子夕方小雨

一 今日ハ御流義成田正右衛門エ御預ノ大砲エ入門トシテ朝五ツ前ヨリ島津權九郎殿宅エ参リ、同道イタシ成田氏ノ様参リ御入門イタシ候、尤此節掛被 仰付候人数ハ都テ今朝御入門ニテ候、右相濟夫ヨリ出勤、八ツ前頼合御暇ニテ帰家、供角野藤兵衛、其外昨日同断ニテ候事、

一 今朝青山千九郎殿エ昨夜頼娃家ヨリ承候義ニ付申遣、五ツ時分入来ニテ四ツ前被帰候事、
一 四ツ時分出勤、九ツ前ヨリ退出、鑄製方エ川上龍衛殿同道ニテ出席、八ツ前引取、夫海老原宗之丞殿エ旁ノ儀有之参リ、折節出宅ニテ対面イタシ暫ニシテ退座、八ツ後帰家、供山次左衛門、其外昨日同断ニテ候事、

但御入門ニ付テハ正右衛門殿エ肴料青銅二百疋差遣候且家来川畑源之助・山次左右衛門モ今朝入朝(門カ)為致、尤青山氏砲術モ是迄ノ通稽古ノ筈候事、

一 八ツ過青山千九郎殿一刻入来ニテ候、尤今朝申入置候義首尾相調候由ニテ被参候事、
一 七ツ時分桂岩次郎殿入来、暫相咄被帰候事、

一 御カ、様チト御不快ニ付、朝稻三益殿江申遣、門人土橋怒心四ツ後見廻之由候事、

一 暮前田原直助殿・竹下清右衛門殿一刻入来ニテ候、尤鑄製方掛人数ニテ拙者共掛被仰付候ニ付テ被参候事、

一 暮過頼娃織部殿入来、青山氏砲術一件ニ付被申談義有之、左候テ五ツ時分被帰候事、

一 暮時分ヨリ和田中太夫殿・上村半兵衛殿・相良清兵衛殿入来、酒肴一通振廻九ツ前比被帰候事、
一 今晚御カ、様ノ御針ニ山本蘇仙参候事、

一 今晚役所エ相良清兵衛殿被参居、五ツ過内へモ被通四ツ

廿五日晴壬寅

一四ツ時早目出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ御暇 御流
義大砲稽古場ニ出席、掛之人数六人並ニ海老原宗之丞
殿・三原藤五郎殿出會、大鐘過引取暮時帰家、供永山
彦七、其外昨日同断ニテ候事、

晦日曇丁未

一四ツ時出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ上
御流義大砲習練場ニ式日ニ付出席、掛之人数六人並ニ
海老原宗之丞殿出會、左候テ日入前引取、暮時分帰家、
供川畑源之助、其外昨日同断ニテ候事、
一相帰候処堀四郎左衛門殿被參居、五ツ過迄相咄被帰候
事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

一南村役人格与頭勤神田榮右衛門、庄屋竹内平之進、家
中相中ニ無役ノ者一人、明日祝義ニ付今日出府之届申
出候事、

一玄朗寺住僧福昌寺ヨリ御用ニ付出府之由、今朝役所迄

入来ニテ土産物差出候事、

一御カ、様御不快ニ付^{〔殿カ〕}被成御頼、濱田和覺院招呼拙者
留守ニ參候由ニ候事、

八月五日曇壬子間々雨

一今朝成田正右衛門殿・同彦十郎（正右衛門義子、実ハ正右
衛門カ実兄平八カ長男）殿一刻入来ニテ候事、

一四ツ時出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ大砲鑄製方エ出
役、七ツ時分夫ヨリ大砲稽古場エ出席、尤式日ニ付掛
六人並ニ海老原宗之丞殿出會、拙者ニハ大鐘比頼合退
席、興國寺墓所エ春峯様御正忌日ニ付參詣、左候テ暮
前帰宅、供角野藤兵衛、其外昨日同断ニテ候事、
一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

七日晴甲寅

一今朝青山千九郎殿砲術一件ニ付入来ニテ候事、

一今朝和田源太兵衛殿劍術一件ニ付入来ニテ候事、

一今日ハ終日別勤相頼置出勤不致候事、

一七ツ前迄出宅、穎娃織部殿宅エ参リ青山千九郎殿砲術
当月下旬於吉野原 御流義砲術打込(洋和二流合弁ヲ云)

ニテ、調所笑左衛門殿御見分有之筈ニ付、右之人數賦
旁規定談合トシテ千九郎殿高弟之衆ハ、九輩集会大概
申談等相濟、夜入五ツ前帰家、供永山彦七、小者ニテ
候事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

十五日晴壬戌秋分夜四ツ過月食

一四ツ時出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ 御流義大砲稽
古場エ出席、掛六人之衆出会大鐘前退席帰家、供川畑
源之助其外昨日同断ニテ候事、

但今晚ハ十五夜ニ付、稽古早目取止可然旨相達候事、

一今朝朝税所源左衛門殿用向ニ付入来、五ツ前被帰候事

一今朝四ツ前上村源七殿入来ニテ候事、

一留守ニ鎌田甚助殿入来ニテ候事、

一夕方御カ、様御針ニ山本蘇仙参候事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

十八日晴乙丑

一四ツ時早目出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ帰家、供角
野藤兵衛、其外昨日同断ニテ候事、

一御流義砲術一件ニ付、御門人中ニ教育之趣御家老衆調
所笑左衛門殿ヨリ掛御小姓与番頭ニ御書付被(前記砲術
奨励ノ書) 相下候事、

一大鐘時分ヨリ穎娃織部殿宅青山氏砲術稽古場エ出席、

夜入六ツ半比帰家、供川畑源之助、小者ニテ候事、

一今晚山本蘇仙御カ、様御針ニ参候事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

一南村郡役森勘左衛門牛島勘定ニ付、出府之届申出々産
物差出候事、

十九日晴丙寅ヒガン今日迄

一四時早目出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ

御流義砲術稽古場明日開之筈ニ付、右都合旁トシテ掛
六人之衆出席、大鐘比頼合退席、夫ヨリ穎娃織部殿宅

稽古場エ出席、尤明日ヨリ青山門人中モ 御流義稽古場エ出席之筈ニ付、右諸下知差引等イタシ置、左候テ五ツ時分帰家、供川畑源兵衛、其外昨日同断ニテ候事、

一 夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、
一家中川畑源兵衛・山次李左衛門義ハ青山氏拾匁備打ノ組ヘ罷出候事、

廿日晴丁卯

廿五日晴壬申七ツ後ヨリ雨

一 四ツ時早目出勤、四ツ後ヨリ退出 御流義大砲稽古場

一 七ツ後早目出勤、八ツ後御家老衆退出ヨリ 御流義大

昨日迄ニテ成就(城北大竜寺馬島津内記及ヒ島津十太右衛門)

砲稽古場エ出席、掛六人之衆並ニ海老原宗之丞殿出會、

・田尻源兵衛・伊勢勘兵衛等カ邸地買上ケ創立ス、六月中旬起

七ツ後ヨリ雨降ニ成候ニ付大鐘過退席帰家、供永山彦

工)、今日開稽古(場脱カ)、御家老調所笑左衛門殿被相下御見

七、其外昨日同断ニテ候事、

分有之出席、掛六人之衆並ニ海老原宗之丞殿・三原藤

一 島津清太夫殿今日栗野地頭職被蒙 仰候付、右祝義ト

五郎殿出會、御家老ニハ七ツ前被相下、其内稽古場開

シテ兩種相送候事、

之諸式等(開場式盛況)有之候、且御一門方初独礼之面

一 南林寺墓所へ泰心院様御忌日ニ付、角野藤兵衛代參申

々モ覗有之候、左候テ大鐘過諸首尾相済退席帰家、供

付候事、

永山彦七、其外昨日同断ニテ候事、

一 南村神主永山近江本田家用向ニ付出府之由、出産物差

但稽古所頭之間ニ軍神勸請(軍神勸請式旧邦秘録ニ詳記ス)

出伺機嫌申出候事、

有之、右御神酒料トシテ青銅二百疋成田正左衛門殿方

へ相送候事、

九月五日晴己卯

一 今晚山本蘇仙御カ、様御針ニ參候事、

一 四ツ時早目出勤掛、中山才之丞殿エ用向有之一刻立寄

左候テ出勤、八ツ後退出ヨリ鑄製方へ出席、七ツ前ヨリ大砲稽古場エ出席、掛六人ノ内喜入壬生殿欠席、三原藤五郎殿出會、日入前比退席帰家、供角野藤兵衛、其外昨日同断ニテ候事、

一留守ニ飯牟禮八郎殿入来ノ由ニテ候事、

一夕方役所迄相良清兵衛殿入来ニテ候事、

一南村庄屋竹之内平之進所役同道ニテ出府之由、今朝伺機嫌申出候事、

十二日晴戊子

一四時早目出勤、八ツ後退出ヨリ同席平田善太郎夫殿エ席中招ニ付参リ、左候テ晚ハ御流義砲術大龍寺バ、刃行軍調練大砲運転及ヒ銃隊行軍ノ試験之ヲ大操練ノ柳トス有之候付大鐘時分退座、砲術稽古場之様出席諸差引並ニ見分等イタシ五ツ半比相濟四ツ時分帰家、供角野藤兵衛、其外昨日同断ニテ候事、

但掛六人並ニ海老原宗之丞殿出會ニテ候事、

一高章院様・高隱院様御忌日ニ付、南林寺暮所〔墓カ〕エ代参山

次左衛門エ申付候事、

一今晚砲術調練エハ川畑源之助・山次左衛門ニモ差出候、尤青山氏門人エ相加リ出候事、

一留守ニ鎌田藤次殿入来之由ニ候事、

十五日晴辛卯

一今朝五ツ前ヨリ出勤、被遊御出座候ヘトモ御礼席へ八月番故不罷出、左候テ八ツ少前頼合、退出ヨリ菱刈八郎太殿昨日同席被仰付候祝義トシテ玄喚迄見廻、夫ヨリ御流義大砲御家老衆島津豊後殿・笑左衛門殿御見分ニ付稽古場エ出席、掛六人並ニ海老原宗之丞殿出會大鐘時分相濟退席帰家、供永山彦七、其外昨日同断ニテ候事、

一夕方役所へ相良清兵衛殿入来、夜入内エモ被通、尤今日ヨリ鼎手習指南方相頼候付汲物酒肴〔吸カ〕一通振廻、其上御カ、様御誕生日ニテ家内中心祝イタシ五ツ半比被帰候事、

一鼎風氣ニテ前田圓節、拙者留守ニ申遣見廻之由ニ候事、

十月朔日晴丁未立冬

一四ツ時早目出勤、八ツ後退出ヨリ調所笑左衛門殿御軍

役方惣奉行（惣奉行創置）被蒙 仰候祝義トシテ内玄喚

迄參帰家、供角野藤兵衛、其外昨日同断ニテ候事、

一今朝相良清兵衛殿入来ニテ候、尤旅行ヨリ御用ニ付中

戻之由候事、

一今朝永山清兵衛殿一刻入来ニテ候事、

一今日ハ 御家流ノ御軍法ニ被復候仰出有之、右ニ付段

々御役替等有之候、委細ハ書付写置候事、

一島津豊後殿今日御軍役方副 御名代被蒙 仰候吹聴申

来候、

一平田鞆負殿居屋敷弘ニ出候由ニテ賈度致相談置候処、

先取止之段今日返答承候事、

二日晴戊申

一四ツ時早目島津豊後殿エ昨日副 御名代（副將創置）被

蒙 仰候祝義トシテ參、一刻対面イタシ左候テ出勤、

八ツ前頼合退出ヨリ近藤隆左衛門殿先日見廻ニ預リ候

付、右礼旁トシテ玄喚迄見廻、得能彦左衛門殿昨日御

納戸奉行勤方は迄之通御役替ニ付祝義トシテ同断見廻

鎌田登太夫殿エ一刻參リ左候テ帰家、供永山彦七、其

外昨日同断ニテ候事、

一島津豊後殿エ昨日被蒙 仰候祝義トシテ看一折相送候

使山次左衛門ニテ候事、

一八ツ後御カ、様御針ニ山本蘇仙參候事、

一夕方役所迄鎌田喜平太殿・相良清兵衛殿入来、喜平太

殿一刻内エ被通候事、

一暮時分ヨリ堀直四郎殿・森川孫八郎殿入来、尤今晚ヨ

リ七書会読二々之夜ニ相企候、左候テ酒肴一通振廻四

ツ半比被帰候事、

十七日晴癸亥

一昨日海老原宗之丞ヨリ御用触左之通申来候、

御用之儀候間明十七日四ツ時可被罷出候、以上、右ニ

付四ツ時出勤届申上候処、於シ、ノ間宗之丞ヨリ左之

通致承知候、

川上式部上全

川上龍衛上全

鎌田刑部上全

喜入壬生上全

右ハ御軍役方掛被仰付候条可申渡候、

十月

笑左衛門

一左候テ七ツ後退出ヨリ調所笑左衛門殿エ右被仰付候礼
トシテ内玄闕迄參帰家、供財津彦八、其外昨日同断ニ
テ候事、

一今朝於書院濱田休左衛門エ左之通申付候、

一役人

一役料米二十八俵

濱田休左衛門

右之通申付役料米為取候、

十月

右拙者直ニ申付、左候テ於使者之間誓詞血判為致、直
見届之筋ニテ喜平太殿被見届候、右相濟礼トシテ兩種

料一貫文差出候事、

一今朝五ツ時分ヨリ鎌田喜平太殿入来ニテ諸差引被致候
事、

一留守ニ桂岩次郎殿入来之由ニ候事、

一夕方役所迄鎌田喜平太殿入来ニテ候事、

廿四日庚午雨五ツ過ヨリ晴

一四ツ時出勤四ツ後退出、来廿八日於吉野原 御流義砲
術調練御家老衆御見分有之筈ニテ、右場所見分旁トシ
テ掛六人之衆同道ニテ出張、掛御納戸奉行三原藤五郎
殿・物頭有川勇四郎殿・上野司殿出會、大砲之分ハ今
日為登方有之、尤拙者共ニモ原中等諸々致徘徊大鐘時
分打立夜入五ツ前帰家、供山次左衛門、其外昨日同
断ニテ候、吉之野支度ハ野羽織袴ニテ候事、

但藤井綴喜殿別荘ニテ独弁当仕候、且与頭書役染川伊
兵衛、御用人座ヨリ上村源七・二木清十郎召列之事、

一今朝上井甚七殿一刻入来ニテ候、且兒玉助太郎殿入来
ニテ候、尤助太郎殿ニハ西田方郷中示現流内稽古星帳

持参ニテ候付、一統無油断出精有之候様其外風俗沙汰等旁巨細申諭置候事、

一 夕方役所迄鎌田喜平太殿入来ニテ候事、

一 首経日ニ付鎌田和覺院参候事、

廿五日晴壬申

一 四ツ時出勤、八ツ後退出ヨリ 御流義大砲稽古所エ出

席、掛之人数六人出会、左候テ明後廿八日吉野原調練

之支度揃等致見分日入過退出、暮時分帰家、供財津彦

八、其外昨日同断ニテ候事、

一 留守ニ鎌田仁左衛門殿一刻入来之由、尤初テ鳥渡入来

ニ付肴一折持参ニテ候事、

一 御カ、様御針ニ夕方山元蘇仙参候事、

一 夕方役所迄上村半兵衛殿・鎌田喜平太殿入来ニテ候事

一 今日ハ於敷舞台三番組ヨリ四番組迄支配下容貌見分、

大目付衆見聞有之候事、

一 今朝上村源七殿一刻入来ニテ候事、

一 今日ヨリ花尾山差越ニ付今朝ヨリ鎌田喜平太殿入来、

諸世話被致候事、

一 九ツ前ヨリ出宅、明日ヨリ於 花尾山御社頭 頼朝公

六百五十年御法会ニ付差越、七ツ過^{〔七ツ過〕}比旅宿之様着イ

タシ候、供川畑源之助・大迫覺次郎・財津彦八、鏝脇

田六郎右衛門、小者吉原太郎、挾箱座合羽籠一荷・夫

両掛一荷、夫持ニテ候、尤駕籠ニテ差越候、拙者支度

羽織野袴、左候テ御家老衆島津壹岐殿旅宿エ一刻致見

舞候事、

一 拙者御法会掛ニ付差越候付、掛書役助和田龍左衛門並

ニ触番一人召列候事、

一 所郷士年寄・与頭旅宿エ参リ土産物差出候ニ付、一刻

致対面候事、

一 今日差越ニ付夫六人・馬二疋参候事、

一 寺社方頭取書役等御用ニ付旅宿エ被参、且当番頭書役

平山源ニモ参候事、

十一月十日雨丙戌

十二月二日丁未曇

- 一 今日ハ 頼朝公六百五十年御法会先日被為濟候ニ付テ御法楽・御能於敷舞台有之、六ツ半比ヨリ出勤諸首尾相勤、左候テ大鐘比相濟退出ヨリ帰家、供山次左衛門・川畑源之助、其外昨日同断ニテ候事、
- 一 御カ、様未御平快無之候付、朝稻三益殿門人土橋忍心へ申遣拙者留主〔守カ〕ニ見廻候由候事、
- 一 夕方役所迄鎌田喜平殿〔太脱カ〕入来ニテ候事、
- 一 夕方御カ、様御針ニ山本蘇仙参候事、
- 一 暮時分桂岩次郎殿一刻入来ニテ候事、
- 一 夕方上村半兵衛殿ニモ役所エ入来、夜入喜平太殿兩人共内エ被通酒肴一通振廻四ツ時分被帰候事、
- 一 四ツ後ヨリ鎌田政十郎殿鑑作加勢トシテ被参候事、
- 一 今朝 太守様指宿二月田ヨリ御帰殿有之候事、

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

弘化四年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数七七枚）」の記載あり〕

目録

清国貿易品請願

琉球ニ於テ外国人処分嫌疑弁解ノ概略

江戸往来ニ就テ贈答品訓令

乗輿製造制限

洋式砲術奨励達書

琉球国ニ於テ外国人処分示達ニ対スル照会

唐物商法内願ノ事情

在琉外国人退去処分上申

新製大砲試験（和蘭新式）

米国人被害風説

種痘ノ初

松平大隅守届書

同上

軍制改革諸令

御参府延期願書

御軍賦改正章函

五五七 清国貿易品請願

一唐物五種ノ御再願ハ不容易品柄故御免許難被成事候得

共、琉球及困窮若哉変心イタシ候（琉球人カ清国ニ対シ日

本ニ変心ヲ懐ムヲ云、茲ニ記スハ当時藩吏カ幕府ニ対シ口実ト

スルノ一事ナリ）様ニ成立候テハ、第一御国体ニモ相拘

事御座候ニ付、右等ノ所深ク御取調無御抛御免許ニモ

相成候付御威光ヲ不失、折角御趣意立行候様御指揮肝

要トノ御事共、細々伊勢守様御沙汰ノ由、依テ從

少將様（齊彬公）委細御内話ノ趣被遊

御承知候、猶又御国許へ可被仰越トノ段、御相応ニ被仰答候由奉承知候事、

右三ヶ条ノ通青山様・阿部様へ

御出御内話ノ上被遊

御承知候趣共、御直ニ承知仕候、

將曹島津久徳

五五八 琉球ニ於テ外国人処分嫌疑弁解ノ概略

去月廿五日、同氏修理太夫齊彬公被召呼御書取ヲ以御

内達、種々御内論ノ趣委細申越、殊

一位様広大院殿ヲ云フ御由縁モ有之、格別御親キ所ニテ何

事モ無御遠慮所ヨリ、御内達ノ段分テ致承知、別テ忝

次第奉存候、如御内論去夏中修理太夫御暇被下候節、

父子一同厚

上意ノ趣承知仕、其後度々御達ノ趣モ有之、追々差渡

候者共へ寛猛ノ取計厚中含越、滞留異国人共横行ノ振

舞無之様取縮向等追々御属ニモ相及、

御安心ノ御事候処、彼国へ差渡候人数御届表トハ致艱

齟居候趣、誠ニ恐入儀ニ御座候得共、已ニ昨年渡海為

仕候番頭村橋左膳以下一組村橋カ海没ハ事実ナリ、一組ノ人数云云ハ全ク文飾

人数順季差急為致出帆候処、其碕順風不宜由御座候間、

如何様洋中逆風ニモ逢候哉、今以不致疏着段此節相達、

遠海殊ニ荒波ノ事ニテ右体ノ風災モ有之、繰違ニモ罷

成候訳御座候間、御聞通ノ趣ハ恐入候得共、何分手当

前後ノ次第ハ宜御勘弁被下度、就テハヲノツカラ当秋

渡海ノ時候相成候得ハ、右代ノ者差渡候賦ニテ一手ノ

人数手当仕置、左候テ追々御届申上置候人数ヨリモ相

増差渡筈御座候得共、毎度申上置候通、琉球ノ儀ハ誠

ニ海中一孤島ニテ十分用武ノ地ニ無御座、殊更日本へ

致服従居候儀、清国ハ勿論、外国へモ秘居候国柄御

座候得ハ、異国人共目掛へハ難差出、右等ノ処ハ深勘

考ノ上後患無之様所作有之儀ニ御座候、且中山王ヨリ

清国へ使者差渡、異国人共長滞琉罷在候テハ難立行趣

ヲ以及歎訴候様可申付趣旨相達、去秋池城親方委細申

含為致渡唐置候処、去月廿三日右乗船致琉着、同日琉

球出帆ノ上同船上着ニテ帰帆ノ届申出、委細ハ池城親方無程上国仕届可申出段申来候得共未致上着、追テ清

国取計振旁ノ儀何レ書面迄ニテハ申解兼候、仍テ去ル

(弘化元年)

辰年佛朗西船渡来ノ節差渡候家来近々差出、是迄寛猛

ノ勘弁ヲ加ヘ処置仕置候訳巨細御届申上候様可仕、此

末御存寄ノ儀モ有之候ハ、無御隔意御内諭被下候様

奉願候事、

此書面ハ齊興公名儀ヲ以テ呈出セラレタリ、

二階堂志津馬

右ハ去ル辰年佛朗西国船琉球江渡来ノ節、番頭ニテ一

組ノ人数召列為被差渡置者御座候処、右付不致上国候

テ不叶用向有之、致帰郷候上勤功旁ノ訳ヲ以役儀御引

揚、当時御側向江相勤候者ニ御座候間、昨年清国江中山

王ヨリ申越趣有之、使者池城親方差向置候処此度致帰

帆無程上国ノ筈候付、清国ノ成行又琉球江滞留佛・啖

ノ者振合等委數承届ノ上、右志津馬極々急ニテ致出府、

初発ヨリ人数等被差渡候一件其外成行申上候様被仰付

置候付、前広公用人前迄御留守居ヨリ致演説置候様被仰付候事、

右式通ノ御書附折田八郎兵衛使被仰遣候事、

五五八ノ二

先達テ修理大夫江御書取ヲ以御内達、殊品々御内諭ノ

趣等早速側廻リノ者江委曲申含越具ニ承知仕、別テ御

懇篤ノ御沙汰厚忝次第奉存候、且唐物再願ノ一条モ厚

御評議被成下、願御免被仰付重疊忝次第、第一琉球表

氣請ニ相拘リ申事ニテ憂慮罷在候処、事情旁御汲取被

下、出格ノ御沙汰厚差含猶又指揮可仕、深ク御礼申上

候、且琉球表(ハカ)差渡置候人数、御届ノ書面トハ齟齬仕

居候段委細御聞通相成、万一向後異賊共渡来理不尽ニ

鬭争ノ儀モ有之節、如何様取計心得ニ罷在候哉ノ旨承

知仕、誠以恐入次第奉存候、右ノ成行ハ先度内御届申

上越候通、去春番頭村橋左膳江交代人数等召付差越候

処、海上不須別テ荒立為申由候付、如何様及破船候哉、

当春迄不致琉着段申来候付、右為代島津登(ハカ)江又々交

代人数相付、未順季モ不宜候得共、早々出帆申付、去

ル十三日山川津致出帆候段届申越候、乍此上又候申上候儀申披ノ場ニ相当恐入候得ハ、防禦筋ノ儀疎ニ心得候儀ニハ曾テ無御座候得共、右通風災難施前後繰違ノミ甚心痛仕候事ニ御座候、尤兼テ差渡候守衛人数ノ外、地方物産類ノ用向ニテ彼地江相詰候者共モ数多有之候付、万一ノ節ハ右ノ者共一同力ヲ尽シ候儀勿論ノ事ニ付、更ニ人少ト申ニハ無之候得共、御届向齟齬仕候趣御聞通ノ段御尤ノ御儀、恐入候事ニ御座候、既ニ去夏修理大夫江不時御暇被下候節、私俱々

御前江被召出、厚蒙

上意、其外品々御達ノ趣モ承知仕、万端御委任ノ儀殊ニ不及顧念存意一杯取計候様承知仕候付テハ、猶又寛猛ノ処置仕

御威光ヲ不失後患無之様速取計、奉安

尊慮度、精々指揮仕申事ニ御座候処、今以逗留罷在何共奉恐入儀ニハ御座候得共、後患ノ怖レヲ專一ニ思慮仕候間、何分潔キ取計モ出来兼旁心配仕申候、尤去ル辰三月佛朗西船初テ琉国江渡来三ヶ条ノ難題申掛、佛

国人唐人・通事唐人唐人押々残置、三四ヶ月ノ後可致渡来申置、本船ハ致出帆候旨、兼テ為警固差渡置候在番ノ者ヨリ委細申越、中山王ヨリハ態々飛船差登使者ヲ以届申出、其節ノ勢ニテハ再渡来イタシ候ハ直ニ闘争ニモ及候半、何分琉球国興廢ノ境危急存亡ノ旨申越、其段ハ御届申上置候通ニ御座候、尤自往古為在番、番頭格ノ者江一組ノ人数差添隔年為致交代、其刻ハ交代順年ニテ同春渡来候処未交代不致、出帆以前ニテ折能二組相守居候付諸手当向嚴重取計、爰元ヨリ別段手当人数等不差渡内彼国ノ船渡来、万一及戰爭候時宜モ候ハ、以謀計何レ共取鎮置可申段届申越候付、篤ト及評議候処、何共不容易境ニ御座候間早々守衛人数差渡、若不致着船内佛船渡来及戰爭居候ハ、其可課時宜事候得共、成丈以謀計取押後無之様取計、未来越モ無之殘置式人ノ者計ニ候ハ、格別ニ丁寧ヲ尽シ置、本船渡来ノ節、義ニ折レ無異儀連掃候様取計仕候ハ、後患モ有之間敷、忽卒ノ会釈向共有之為致立服候ハ、再渡来ノ節品々苦情筋等申立、終ニハ鬪争ノ時宜ニモ

可成立、然時ハ琉球ヨリ事起御国体ニモ相拘候基相成、
奉騷

尊慮ノミナラス、当家ノ瑕瑾此時ト深及配慮、種々評
議申付候処、後患ヲ避寛有ノ処置左ト申出モ有之、又
残置候者共恣ノ儀申出候坎、或ハ横行等ノ次第ニ依刑
罰ヲ加ヘ置、佛船渡来有之、何分評議兩端ニ相成一決
難致、雖然後患ヲ慎寛有ノ所置有之、彼方義ニ折レ手
ヲ引候得ハ十分ノ儀、其儀難整場ニ至候ハ、戰爭猛
威ヲ示シ候儀勿論ノ筋ト評決仕、二階堂志津馬江委曲
申合一組ノ人数三百五十人程召附差渡候間、琉球ノ事
情異国人行状等追々承届委細申越候様申付、順季モ不
宜候得共辰八月初旬為致出帆、遠海ノ儀ニモ有之疏地
都合モ相分兼、且国船於洋中如何様妨等イタシ候モ難
計甚掛念ニモ存、^(異説)尤琉着ノ上專入用ノ品ニ御座候間、
大砲拾挺・百目筒以下小筒ニ至候テハ人別其致用意、
其外ノ兵器楯板類モ余計ニ差渡、勿論大砲拾挺ハ兼テ
琉球江差渡置、小筒ノ儀ハ右外ニモ過分ニ差渡備不意
置候儀ニ御座候、左候テ海上不順ニテ漸九月下旬琉着

仕直ニ様子細々相糺候処、佛船未致来着残置候者共平
穩罷在候段承届、経日式人ノ者共行状或申出ノ趣折節
三ヶ条ノ難題申掛、又自儘ノ儀共申募或失礼ノ筋申掛
琉人共怒立候ハ、夫ヲ手蔓ニイタシ事ヲ起スノ巧現
然ノ儀多々有之候付、其邪智ニ乗シ逆ヒ申候得ハ奸計
ニ陥申外無御座候間、何様ノ儀申掛候テモ一向ニ相断
專丁寧ヲ為尺置、料ヲ見合國禁ノ儀共不差障様相断候
処、許容仕候儀モ有之、又申募候儀モ有之、何分琉球
ヨリ事ヲ起サセ申候謀計ニハ相違無御座候得共、是迄
ハ取合不申始終丁寧ヲ尽シ召置候付、追々本国船渡来
仕候テモ格別差咎候廉迎モ無御座、一礼厚申述無異儀
致出帆候次第御座候旨申越、尤前段ノ通自儘ノ振舞等
仕候節ハ、差渡置候人数ノ内、中ニハ別テ残念ノ事ニ
存ハヤリ切候者モ可有之候得共、決テ忽卒ノ振舞不仕
様堅相制為置、志津馬儀ハ前段ノ次第直ニ為承届、去
ル巳ノ秋上國為仕、其後追々異国船致渡来候得共、先
平穩相治居申事御座候、其上去午四月啖咭喇国医師ノ
由ニテ、夫婦・男女子共式人・唐人老人召列渡来、是

以押々上陸本船出帆仕、其段ハ御届申上候通ニ御座候、何分重疊国難相重兎角今形逗留罷在候テハ、終ニ陥奸計

御国体相拘リ候儀共到来ハ必定ニ御座候間、中山王江相達清国江使者為差渡、琉球国困難ノ趣逐一申述、異国人無異儀連帰候様及歎願候ハ、戎情モ詳ニ相分可申事候間、去秋池城親方清国江差渡為及歎訴候処、別テ汲受宜、廣東逗留佛・嘆官人方江達相成候処、佛朗西官人ニハ追テ迎船差渡可連帰旨返答有之、嘆国官人ヨリハ未何分為決返答無之候得共、佛人無異儀連帰候ハ、嘆人モ定テ同様引払可申候付、池城ニハ順季不取後内早々致帰帆其段届申出候ハ、中山王可致安心トノ事ニテ清国ヨリノ返章等相渡候付、当五月福州表致出帆同月下旬琉着仕、直ニ七月初旬琉球表致出帆候得共、順風不宜諸所江汐掛相応ノ難船等ニテ、乍漸八月八日上着仕清国ヨリノ返章差出、彼地取扱ノ成行且琉球地江相残居候者共ノ次第等申出候間、其儀ハ先日御届申上候通ニ御座候、右返章等写八通則入御内覽申候、

就テハ追々迎船モ渡来可仕哉、究テハ難申上候得共決テ違言有之間敷奉存候付、猶又残居候者共江尽丁寧、迎船渡来候ハ、一涯礼讓厚会釈義ニ折レ再渡来無之様堅致約定置候様ニモ可取計旨、池城親方其外帰帆ノ琉人共江委細申付、猶差渡置候役々ノ者共江申付越候心得ニ御座候、委細ハ先達テ調所笑左衛門ヲ以御届申上置候通相違ノ儀無御座候得共、前書ノ如ク一向嚴猛ノ取計可然ト申出候者ハ、当節ノ所置寛ニ適候趣ニモ存シ可罷在候得共、事ヲ破候上ハ最早如何様ノ良策モ施シ難ク候間、彼是勘弁ヲ加ヘ取計候筋多々有之、夫等ノ意味合ニ依テハ異説区々ノ儀モ有之由付、自然疎ノ取計振杯申唱候事共御聞ニ入候間、御疑惑ノ廉ニモ可有之哉、右等ノ事柄且清国懸合ノ成行並異国人自儘ノ振舞難題等ノ内情事実モ、悉ク二階堂志津馬相心得罷在候付、今般同人ヲ以申上候間、宜御聞通被為在候様仕度委細申含置候儀ニ御座候事、

弘化四未八月

本行弘化四未八月、二階堂志津馬阿部様江致持參候

事、

五五九 江戸往来ニ就テ贈答品訓令

一着出立等ニ付土産〔饒カ〕・殘別等之儀、追々被仰渡置候通ニテ
親子等之儀ハ格別、其外ハ礼義サヘ不失候得ハ宜候間、
扇子箱類取替可致候、

一着出立ニ付近来出迎トシテ多人數中途迄差越候趣相聞
得、御門限モ有之事情処不可然事ニ候、無抛身寄之者
一兩人ハ格別、其余道迎ニ出候事不相成候、

右之通去ル辰年〔弘化元年甲辰〕並ニ午年ニモ被仰渡
人々承知之通ニテ、聊取違ハ有之間敷儀ニ候所、程
過候ハ土産・殘別〔饒カ〕又ハ道迎等多人數差越候哉ニ相
聞得、別テ不埒之至ニ候、且又質素節儉之儀ニ付テ

ハ追々被仰出、殊更小身小祿之モノハ程々之心得ヲ
以致省略候得ハ、格別困窮候儀ハ無之筈候処、段々
無故難渋成立、心付向等之訴訟毎度申出、右ハ畢竟
平日酒食之費及過分、又ハ親類懇意同役等饒別其外
祝事等ニ名付集會及沈醉、士之礼義取失候義、全酒

席之勝負事等ヨリ看々酒量ヲ取忘候処ヨリ右次第ニ
候、無益之集會屹度差留、勿論勝負事等堅令禁止候
条、質素節儉ヲ専心掛、御軍役等無滯相動候様之趣
ハ近比ニモ被 仰出置、人々奉承知候通ニテ、聊取
違ハ有之間敷儀ニ候処、今以無益之集會相催、勿論
於外方ハ勝負事等取企酒量ヲ取忘候族モ有之哉ニ相
聞得、別テ不堪至極之事ニ候、就テハ夫々糺方之上
屹度被仰付様モ有之候得共、此節迄ハ別段之訳ヲ以
不及沙汰候間、向後土産・饒別・送り迎又ハ無益之
集會・勝負事等屹度差留候条、前文被仰渡之趣堅相
守聊取違有之間敷候、乍此上不守之者ハ見聞ヲモ掛
置候付無用捨可及取扱候、此〔旨脱カ〕向々江不洩様可致通
達候、

十二月

豐 後同

笑左衛門同

五六〇 乘輿製造制限

台輪駕籠等へ毛類・天鷲絨緑等〔緑カ〕可致無用旨段

公義被仰渡、去ル寅年申渡置、尚又台輪駕籠等以前ニ相変立派過候付、以來出来候節ハ二重腰連引・天鷲紋(緑カ)縁等可為無用、且屋根木綿類日覆不相成、吳座日覆相用候様(被附カ)仰出、其段モ申渡置候処、其後修覆等イタシ候テモ二重腰連引等其儘召置候モ有之、

御趣意ニモ相戻リ不可然事ニ候、依之向後木綿類日覆並ニ二重腰連引屹度不相成候条、当分二重腰連引等其儘ニテ召置候向ハ、来正月迄之内調替届可申出候、乍此上不守之モノハ可及沙汰候、此旨向々へ可申渡候、

十二月

豐 後同

笑左衛門上

五六一 洋式砲術奨励達書

御流儀砲術(和蘭新式)之儀ハ、海岸御手当向肝要之事

柄ニ付、深以

思召被召建

御城下諸郷迄モ追々御入門被仰付、殊更御備組惣鉄砲被

仰出候付テハ、組中之面々一統

御趣意之程汲受吃ト励合可致出精候、依之稽古等之儀向後左之通被仰付候、

一稽古日之儀、一番組ヨリ六番組迄繰廻隔日ニ一組ツ、罷出可致稽古候、左候テ小隊小頭之儀ハ組中急火免許以上之面日ヨリ相動(タカ)、自然一組之内右人柄無之候ハ、外組ヨリ取寄可相動候、

一諸大身分並小番・新番之儀、居所方限之御小姓与江打込可被致稽古候、

一毎組稽古八後ヨリ相始、屹度星帳取仕建、諸大身分・小番・新番・御小姓与拾五歳ヨリ六拾歳迄之向々不殘名前書載置、三拾歳以上拾五歳以下ニテモ罷出候者ハ其通ニテ、何レモ当日其組御小姓与番頭出席何篇可致指揮候条、罷出候面々互ニ礼讓ヲ守一切猥ケ間敷儀共有之間敷候、左星合ニ付テハ夫々当日詰合之御小姓与番頭檢使ニテ六組触役所出役(番カ)致星合、右帳面月末御用部屋江可差出候、

但

進達掛（御小姓与番頭附屬吏ノ名之儀、兼テ受持之

組中稽古日当日可致出席候、

一 毎日八時迄之間ハ当日順番無之、外組之者ニテモ罷出

致稽古候儀不苦候、

一 御流役砲術書籍方へ被掛置候面々ハ毎日罷出、稽古方

ハ勿論、稽古所取始末等何篇氣ヲ付、御道具損物其外

存付候儀ハ不差置掛之御役々可申出候、

右之通被 仰付候条御小姓与番頭江申渡、向々へ不

洩様可致通達候、

正月

豊 後上同

筑 後封久

石 見淨久

將 曹徳久

近 江平久

五六二 琉球国ニ於テ外国人処分示達ニ対スル照

会

阿部伊勢守様へ被為

入、先達テ御書取ヲ以御内達

御承知ノ御一条則御国許へ被仰上越候段被仰述候、尤

御別紙之御意味合大意迄モ得ト御演説被遊候処伊勢守

様御尤ニ思召候、如何様右様少々御行違ノ御事モ為有

之筈候事、

太守様ヨリ急度御請答ニモ被為及間敷候、御書取ノ趣

得ト御承知被遊、猶又御殿重ニ御手当等行届御肝要ト

思召候、勿論琉球国ハ小国ノ由候付多人数渡海六ヶ敷

候ハ、近島迄被差渡後御立相成候様御取計、且又日

本ノ御威光強キ所ヲ第一ニ被成、且流人共異心ヲ不差

起様御取計御肝要ノ事ニ候、当時ハ諸所へ異国船渡来

ニ付、

公辺御手当向御殿重ニ御吟味被仰付事御座候付、琉球

モ折角御手当御殿重ニ御取計有之度事ニ候事、少々ハ

御行違ノ事モ為有之筈候得共、当時ハ猶更鎖細ノ事ニ

テモ能相知（探偵ノ手ニ知ル、ノ意ナリ）申候付、呉々モ

御行届有之候様有御座度事御肝要ニ候、且滞留異国人

共自儘ニ横行イタシ候段御申出モ有之候付、先達テ笑

左衛門へ側士ヲ以段々為致内話少シハ手強キ方ニ取計可然、些強威ヲ見セ付度トノ趣ヲ申入サセ候得共、相談出来兼候段モ御内話有之候由奉伺候事、

五六二ノ二

少將様御事、六月十一日暑中ニ付御機嫌御伺トシテ青

山下野守様へ被為

入、右御濟ノ上、先達テ阿部伊勢守様ヨリ御書取ヲ以テ御承知被遊候御一条、則御国許へモ被仰越候、扱御請答ノ御事如何様御心得被遊御宜敷哉ト御打掛御尋被遊候処、何モ急度御請等ニハ被為及間敷、折角御嚴重ニ御手当向被仰付可然、尤御穩便ノ方御宜敷御内々御達ノ御事候付、決テ表通りノ御受答ニ不被為及、此以後精々御行届有之候様トノ段、下野守様ヨリ御内話ノ由奉伺候事、

五六二ノ三

唐物商法内願ノ事情

○本文書は第五七号文書とほぼ同文なれども再掲す。

一唐物五種ノ御再願ハ不容易品柄故御免許難被成事候得

共、琉球及困窮若哉愛心イタシ候様ニ成立候テハ第一御国体ニモ相拘事御座候ニ付、右等ノ所深ク御取調無御抛御免許ニモ相成候付、御威光ヲ不失折角御趣意立行候様御指揮肝要トノ御事共、細々伊勢守様御沙汰ノ由、從

少將様委細御内話ノ趣被遊

御承知候、猶又御国許江可被仰越トノ段御相応ニ被仰答候由奉承知候事、

右三ヶ条ノ通青山様・阿部様江

御出御内話ノ上被遊

御承知候趣共御直ニ承知仕候、

將曹

五六三 在琉外国人退去処分上申

○本文書は第五八号文書の一部と同文なれども再掲す。

去月廿五日同氏修理大夫齊彬被召呼御書取ヲ以御内

達、種々御内諭ノ趣委細申越、殊

一位様広大御由縁モ有之、格別御親キ所ニテ何事モ

院殿

無御遠慮所ヨリ御内達ノ段分テ致承知、別テ忝次第奉
存候、如御内諭去夏中修理大夫御暇被下候節父子一同
厚

上意ノ趣承知仕、其後度々御達ノ趣モ有之、追々差渡
候者共江寛猛ノ取計厚申含越、滞留異国人共横行ノ振
舞無之様取締向等追々御届ニモ相及、

御安心ノ御事候処、彼国江差渡候人数御届候表トハ致
齟齬居候趣誠ニ恐入儀ニ御座候得共、已ニ昨年渡海為
仕候番頭村橋左膳以下一組ノ人数順季差急為致出帆候
処、其砌順風不宜由御座候間如何様洋中逆風ニモ逢候
哉、今以不致疏着段此節相達、遠海殊荒波ノ事ニテ右
体ノ風災モ有之繰違ニモ罷成候訳御座候間、御聞通ノ
趣ハ恐入候得共何分手当前後ノ次第ハ宜御勘弁被下度
就テハヲノツカラ当秋海ノ時候相成候得ハ、右代ノ者
差渡候賦ニテ一手ノ人数手当仕置、左候テ追々御届申
上置候人数ヨリモ相増差渡咎御座候得共、毎度申上置
候琉球ノ儀ハ、誠ニ海中一孤島ニテ十分用武ノ地ニ無
御座、殊更日本江致服従居候儀、清国ハ勿論外國江モ

堅秘居候国柄御座候得ハ、異国人共目掛江ハ難差出、
右等ノ処ハ深勘考ノ上後患無之様所作有之儀ニ御座候
且中山王ヨリ清国江使者差渡、異国人共長滞琉罷在候
テハ難立行趣ヲ以及歎訴候様可申付越旨相達、去秋池
城親方委細申含為致渡唐置候処、去月廿三日右乗船致
琉着、同日琉球出帆ノ上国船上着ニテ帰帆ノ届申出、
委細ハ池城親方無程上国仕届可申出段申来候得共未致
上着、追テ清国取計振旁ノ儀何レ書面迄ニテハ申解兼
候、仍テ去ル辰年佛朗西船渡来ノ節差渡候家来近々差
出、是迄寛猛ノ勘弁ヲ加ヘ処置仕置候訳巨細御届申上
候様可仕、此末御存寄ノ儀モ有之候ハ、無御隔意御
内諭被下候様奉願候事、

二階堂志津馬

右ハ去ル辰年佛朗西国船琉球江渡来ノ節、番頭ニテ一
組ノ人数召列為被差渡置者御座候処、右付不致上国候
テ不叶用向有之、致帰郷候上勤功旁ノ訳ヲ以役儀御引
揚、当時御側向ヘ相勤候者ニ御座候間、昨年清国ヘ中

山王ヨリ申越趣有之、使者池城親方差向置候処、此度致
帰帆無程上国ノ管候付、清国ノ成行又琉球へ滞留佛・
嘆ノ者振合等委敷承届ノ上、右志津馬極々急ニテ致出
府、初発ヨリ人数等被差渡候一件、其外成行申上候様
被仰付置候付、前広公用人前迄御留守居ヨリ致演説置
候様被仰付候事、

右式通ノ御書付折田八郎兵衛ヲ以テ被仰遣候事、

二階堂ハ去ル甲辰ノ夏佛人初メテ渡来在留ノ時、警衛
長ノ職ヲ帯ヒ滞琉、殆ント三年佛人ノ情況ヲ審ニセル
ヲ以テ、召喚出府セシメ事情具上スヘキ旨ヲ命セシモ
ノナリ、

五六四 新製大砲試験（和蘭新式）

大砲製造所創設以來専ラ野戦砲ヲ鑄造シ既ニ數十門ニ
及ヒ、続テ海岸砲台ニ供フル大砲則チ二十四斤・十八
斤或ハ二十寸ノ忽砲或ハ天山流ノ式ニ依リ一貫目砲ヲ
モ製造シ、此日谷山郷中鹽屋ニ於テ遠撃及、和洋式ノ
優劣ヲ試験ス、平素ヨリ其優劣ハ争フニ足ラサルモ、

和式主張ノ青山等カ如キ頑然悟ル処ナキヲ以テナリ、
故ニ国老中皆ナ出場セリ（鎌田正純日記鈔參看）、

八月十二日宗對馬守義和拜領金

昨年来領分海岸守衛ノ儀ニ付、彼是内願被申立候へ
共、其方家ノ儀ハ古来ヨリ朝鮮国ノ御用相勤候ニ付、
是迄数度格別ノ御手当モ被成下候儀ニテ、殊ニ安永
・文化ノ度相達候趣モ有之、一体海岸守衛ノ儀ハ沿
海ノ諸家何レモ同様ノ事ニテ、中ニハ国地ヲ離候領
分モ有之候へ共、其方ニ限候義ニモ無之、旁以御手
当筋等御沙汰ニモ難被及事ニ候、乍併此節朝鮮人大
坂易地来聘ノ儀順成等専右御用筋彼国へ可及掛合折
柄ニ候へハ、兩様之手当自力ニテハ何分難行届、万
一不行届ノ儀モ有之候テハ御国威ニモ拘候義深心配
ノ段、無余義事ニ付出格之思召ヲ以テ金一万両ニケ
年ニ割合拜借被仰付候間、此上不行届ノ儀無之様精
々心ヲ用ヒ可被取計候、尤返納ノ儀ハ追テ可及御沙
汰候、

五六五 米国人被害風説

七月

昨年松前表ヨリ送越ニ相成候アメリカ人ノ内一人於長崎病死仕候者、日本ニテ被致殺害候様ニエケレス風聞書ニ有之候趣、カヒタン相咄候ニ付、不容易儀ト相考、乍去右風聞書ニハ偽説モ有之候事故、外阿蘭陀人共ニモ承候儀トモハ無之哉ト頻ニ心掛ケ罷在候中、此節渡来ノ外料阿蘭陀人ノ物咄ニ、昨年御当地ヨリ御送返シ〔科カ〕ニ相成候アメリカ人ノ内、ジヨルト申按針役ト懇意ニ致候趣ニテ、同人義日本ノ御取扱御手厚事ト感謝罷在候旨相咄候ニ付、長崎ニテ致病死候アメリカ人ノ儀ニ付、何ゾ聞込候儀ハ無之哉ト相尋候処、右ハ日本ニテ致免狂長崎到着ノ当日逃去候故、日本御役人方へ相願捕方ニ相成医師御招治療等ノ御手当厚有之候得共、右病変症イタシ終ニハ相果候段承候旨ニ付、其儀カヒタンニ相咄候処、左様ノ事ニ候ハ、右エケレス風聞書ノ内ニ有之候趣ハ全ク虚説ヲ記候事ト相見へ候段申

出候、以上、

申七月

西

吉兵衛

五六六 種痘ノ初

此度渡来ノ外料阿蘭陀人儀、格別医業熟達ノ趣ニ有之、殊更官人ノ由所々ノ軍船ニモ乗組数度ノ軍功モ相頭シ給料等モ外蘭人ト違ヒ先ツ知行トカ申様ニ有之、右功ニ寄リ国王ヨリ大一圍ノ印モ可致程ノ官職ニテ、金之〔肩カ〕兩府房等被差免、当地在留ヲモイタシ候由ニテ、彼国ヨリ含モ有之欵、撰人ニテ差渡シ候儀ニ可有之筋、窮理木草ノ儀モ心懸罷在、久々ニテ先年渡来ノ外料シイ〔科カ〕ホルトニモ勝リ候人物ニテ見識モ有之杯、一般ノ世評自然御国地ノ様子探索ノモノニハ無之哉、入津無間モ品々風説有之、右ハ武官ノ装束等筋縫有之ヲ着用、殊ニ美々敷飾リ居、彼国ニヲヒテモ一体武官ニテカヒタン杯商官ノ身分ト品位大ニ違候由風評相立、不容易儀ニ相聞、且又西洋諸州専ラ被行候痘瘡ノ儀ハ、人畜共ニ一度相煩候モノニ有之、其内牛ノ儀ハ惣身ノ内乳ノ

辺へ一ヶ所出来候計至テ安痘ノ由、右ヲ人へ植へ移シ候得ハ必ス万人トモ怪我無之、先年シイポルト杯モ持渡候得共、種痘困方不行届哉伝リ不申、今般工夫イタシ持渡候由、未開キ不申近々通詞共小兒ノ内植移試可致由、右等ノ者共当表諸国修行ノ医杯承込、専ラ蘭法執心ノ族等ハ名医渡来、殊ニ官人一際へノ様種々形容ヲ附、推考ヲ以不取留事申放シ候哉ニテ、外国人ノ儀品々浮怪ノ雜説多ク素ヨリ真偽不分明ノ事ニテ、如何ノ風評有之否哉御懸念ノ次第有之間敷共難申候ニ付日々出役見聞仕、本船出島等出入ノモノ其外トモ探索仕候処、敢テ右様ノ人物ニモ見請不申、入津ノ砌及見候モノ共等、只々金ノ兩肩房ヲ附ケ美麗ノ処ヨリ、一ト口ニ此度官人渡来、格別立派杯事々敷申成シ候処ヨリ自然流布仕、品々風説モ可有之哉、遠海無滞当津着岸ヲ祝ヒ、且ハ御国地初入ノ訳夫々身分ニ応シ衣服等相飾リ、此者船内ニテモ帯劔イタシ居候処、湊入上陸ノ節、「カヒタン」ノ外帯劔不為致訳ヲ以、相制シ為取揚上陸仕、都テ蘭人共對話向ノ様子階級相立候儀更

ニ無之、尤治療ノ儀ハ相応出来ノ由相聞申候、右等ノ趣通詞共ノ内篤ト事実探索仕候処、別紙ノ通申出候間、御懸念ノ筋ハ有御座間敷哉ニ奉存候、則差出候書面相添此段申上置候、以上、

七月

萩原 又作

此節渡来ノ外科〔科カ〕和蘭陀人儀、是迄渡来ノ外科〔科カ〕ト違ヒ官人ニ有之、一休事変リ候様有之趣ノ風聞御座候由ニテ、如何ノ訳ノ事ニ有之哉、篤ト穿鑿仕申上候様被仰付奉畏候、随テ右御沙汰ノ御趣意篤ト探索仕候処、右外科〔科カ〕阿蘭陀人儀此節渡来仕候趣意ハ、一昨年筆者阿蘭陀人パスレイ儀梅毒相煩ヒ、日本医師相頼治療ヲ受候得共一円快方ニ無之、其半ニ阿蘭陀船入津仕、右船ニ罷在候外科〔科カ〕治療ニテ全快仕、万一其儀無之時ハ一命ニモ可相拘答ノ処、全蘭医骨折候故病平癒仕候事トカヒタン相考、是非一人ハ蘭医在留不仕候テハ無心元存候処ヨリ、一昨年出帆ノ比咬啮〔ジャガタラ〕吧頭役共ニ申遣候得共、相応ノ医咬啮吧表ニ居合不申、依之尚又昨年カヒタンヨリ

精々頭役共迄願越候処、漸ク右蘭医役人共ヨリ差遣カ

ヒタン頻ニ相悦居候儀ニ御座候、扱右外料阿蘭陀人官

人ト申触候儀、勿論相違モ無之儀ニ御座候、然ルニ於

日本モ医官ノ面々法印トカ法橋トカ申官御座候通、阿

蘭陀国ニ於テモ同様ノ儀ニ候由ニ御座候、右外料阿蘭

陀人儀ニ付、差当リ何モ懸念仕候儀ハ有之間敷儀ト奉

存候、

一 外料阿蘭陀人肩房付候訳ハ、武方医官ノ者ニ候間房付

候儀ニ御座候、彼邦ニテ武方ニ携候身分之者ハ、都テ

房付候由ニ候、右外料官名蛮語ニテミリタイル・ドク

トル・テウエーデ・カラツセト申候、右ヲ日本語ニ直

シ候得ハ、武力医官第二等ノ者ト訳シ申候、肩ニ付候

房ノ名ハ、イボレットト唱申候、

一 外料阿蘭陀人受用銀ハ、一ケ年廿六貫貳百六十目ニ御

座候、右銀ハ咬啮吧奉行所ヨリ為取候趣、矢張日本商

益銀ノ内ヨリ出候事ト相聞申候、

一 外料阿蘭陀人軍船ニ乗相助候儀一切無御座、陸武方医

官是迄相助候趣ニテ、勿論軍中ニ於テモ軍ニ携候訳ニ

ハ無之、只治療ヲ業ト仕候由、窮理・本草ノ儀ハ相心

得、当時專執行中ニ御座候趣ニ候、

一 外料阿蘭陀人劔ヲ帶候儀ハ、是又彼方武方ノ者一般仕

癖ニ有之候由ニ御座候、

一 右外料阿蘭陀人儀ハ、先年日本ニ在留仕候シーボルト

扱トハ違候人物ノ様ニ相見ヘ申候、

右之通御尋ニ付申上候儀ニ御座候、以上、

七月 西 吉兵衛

齊興公ハ牛痘ノ施法長崎ニ於テ試験セシ旨、在崎聞役奥

四郎カ報告ニ接シ大ニ喜ヒ、施法及ヒ痘種ヲ購ハンカ為

メ侍医前田杏齊元温ヲ長崎ニ遣リ、以來施痘及ヒ痘苗ヲ購

ハシメタリ、前田ハ和蘭医（ホンベ）ニ就テ研究スルコト

数月、接種ノ法ヲ究メテ帰国シ、同年十二月初メテ鹿兒

島ニ施行セリ、然レトモ當時人心未タ其法理ヲ信セス、

却テ有害視スルノミナラス物議囂々、殊ニ漢医連中ハ之

ヲ廢斥セント百万誹譏諷謗ヲ加ヘ、為メニ前田ハ一時名

譽ヲ傷ケシモ公ハ敢テ疑ハス、一般ニ諭告シ製薬館ノ管

轄トシ接種ノ前後ニ服薬ヲ施与セリ、這服薬ハ素ヨリ用

ルニ及ハサルモノナルヘシト雖、人心安ンセサルカ故輕キ廢毒劑ヲ用ヒタリ、夫ヨリ漸クニシテ物議モ消滅シ一般施スニ至レリ、

五六七 松平大隅守届書

○第一

私領琉球国八重山島之内與那國島江去々年十二月六日唐人一人罷居候ヲ、所之者見当、役々差越候処、飢寒之体相見得候付加介抱相尋候処、江南省海州贛榆縣之商船乗組^{〔員脱カ〕}八人浙江縣江差越、帰帆之折逢逆風漂着及破船、乗組之内七人致溺死、一人游揚候段申出候付、小屋調入置、溺死六人ハ死骸不相知、一人流寄候付土葬申付、船滓任ヨリ焼捨釘類相渡中山王城下江送越、猶又衣食等相与宗門疑敷儀無之候付諸事先例通取計、去年九月進貢船ヨリ唐国江送越候段琉球ヨリ申越候、此段御届申達候、以上、

八月十五日○弘化四年丁未 松平大隅守^{○第二}

五六八 松平大隅守届書

○第四

私領琉球国之内久米島江去年十一月十一日・当二月十六日・同三月十一日及三^{〔度カ〕}異国船一艘宛漂来、何レモ橋船ヨリ異国人拾人又ハ七八人宛浜辺江漕来候付、役々差越本国並漂来之次第相尋候得共、言語文字不相通食料払底所望之様子ニ付相与候処、本船江乗婦直致出帆候、当二月十二日同国之内宮古島江異国船一艘、同十六日同国之徳之島江同一艘、同三月九日同国之内大島江同一艘致漂来、橋船ヨリ異国人拾式參人或五六人浜辺江漕来候付、銘々本国又ハ何様之訳ニテ致漂来候哉ト相尋候得共、言語文字不相通、食料乏敷趣手様イタシ候付相与候処、厚礼拜本船江乗婦致出帆候、同四月十六日同国之内鬼界島江同式一艘漂来、橋船ヨリ異国人十七人又ハ八人浜辺江漕来候付同断相尋候処、インキリス・アメリカ鯨漁船ニテ風波強無抛漂来之段手様等ヲ以漸相分、是又食料望之体故相与候処、喜悦之体ニテ致礼拜本船江乗婦致出帆候、右八艘共本船ハ、海

上二三里又ハ四五里程モ沖江繫居委敷不相分候得共、
都テ鯨漁船之様子相見得候、尤去午十一月ヨリ当未四
月迄、右之通琉球属島之内江追々致漂来候段此段申越、
且取締向等嚴重申付置、何モ異変之儀無御座候、且又
琉球江残置候佛朗西人並啖咭喇国医師妻子・唐人共于
今致滞留居、去年佛朗西船帰帆後未着無之、渡来候
ハ、及理解為列婦候様可仕旨、此節琉球ヨリ申越候、
此段御届申達候、以上、

八月十五日弘化四年丁未 松平大隅守

五六九 軍制改革ノ諸令

○本文書は第五四八号文書と同文により略す。

五七〇 御軍賦改正旗章図

○本文書は第五四九号文書と同文により略す。

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

嘉永元年 (一)

〔扉に表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数九三枚）」の記載あり〕

弘化五年戊申
嘉永元年

清曆道光二十八年
西曆千八百四十八年

神武天皇御即位紀元二千五百八年

孝明天皇統仁第百御即位弘化四年丁未九月二年御宝算十八

將軍家慶公第百襲職天保八年戊午九月十二年十一

藩主齊興公第二十七世、当时大隅守ト称ス知政文化六年己巳六月四年十五

世子齊彬公当时修理太夫ト称ス

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球国受封（人皇八十二代）
後鳥羽天皇永五年即子文治三年（六百六十三年）

関白太政大臣鷹司政通公

左大臣九條尚忠公

右大臣近衛忠烈公

内大臣醍醐輝弘公二月罷免

同 德大寺實堅公同月罷免

同 鷹司輔熙公

老中

阿部伊勢守正弘

牧野備前守忠雅

戸田山城守忠温

青山下野守忠良九月罷免

松平和泉守乘全

松平伊賀守忠優

若年寄

大岡主膳正忠固

本多越中守忠徳

遠藤但馬守胤統

本庄安藝守道貫

所司代

酒井若狹守忠義

島津和泉久風

京都町奉行

伊奈遠近守忠舌

島津丹波久長

水野下總守重明

川田信濃佐摸

伏見奉行

内藤豊後守正繩

猪飼 央尚敏
二階堂主計行典
調所笑左衛門廣郷

国老

額姓信濃久喬

諏訪勘解由武敬
菱刈安房隆觀

新納内藏久命

島津石見久浮

島津將監久泰

島津 登久備

岩下典膳道格

島津豊後久寶

島津安房久備

島津壹岐久武

島津 登久兼

末川近江久平

川上久馬久芳

島津將曹久徳旧称碓山

町田監物久祝

川上筑後久封

市田美作義宜

以上二十五名、文化六年己巳ヨリ嘉永四年辛癸二月迄凡四十三
年間国老職ニ在リ、前代ヨリ在職連續ノモノハ〇印ヲ付ス、

本郷内記久珉

目録

総覧

諏訪甚六履歴参考

齊興公日隅州ノ海岸ヲ御巡見

喜界島ニ米国捕鯨船来ル

徳島ニ異国船来リ海陸ヲ測量ス

徳島ニ英国軍艦来リテ測量ス

外異ヲ掃ハント伊勢大廟ニ禱ラセ玉フ

〔所可代ヲシテ辺防ヲ幕府ニ令シ玉フ〕

般若院新築異賊降伏ヲ禱ラシム

第二公子寛之助君御天亡布告

二階堂志津馬在府中乗輿願

市田右近ヲ譴責ス

参考 江田平藏日記抄

参考 種子島時昉記事抄

松前侯ヨリ通知書留守居役所日記抄

参考 鎌田正純家記抄

参考 全上日記抄

参考 江田平藏日記抄

参考 黒田家々記抄

参考 上杉家々記抄

和蘭人風説書

大森村ニ大筒場創設布告

参考 平田宗高家記抄

鎌田正純日記抄

安田助左衛門日記抄

〔示現流伝書差上〕

〔嘉永元申年江戸蕃穀在高（吹塵録）〕

〔近衛家御用部屋日記抄〕

幕令数件

樺山資之日記抄

五七一 総覧

太守齊興公御在国

世子齊彬公御在府

正月

元日

先規ノ如ク御家老・若年寄・大目付及ヒ御側御用人・

御側役・御納戸奉行等御側向御役人ノ年首ノ賀ヲ受ケ

ラレ、尋テ御名代島津周防(全上)殿ヲシテ五社ニ參拜

セシメ玉フ、畢テ御一門四家ノ祝賀ヲ受ケ玉フ、儀式

先規ノ如シ、略ス、

同月二日

神明社及ヒ護摩所構内鶴ヶ岡八幡宮ノ諸社靈符堂・御

看經所、御一門家島津兵庫殿ヲシテ御代拜、

同月三日

御書院又ハ御対面所ニ於テ太身(大)分其他寄合・小番・新

番・御小姓組・与力等ノ祝賀ヲ受ケ玉フ、先規ノ如シ、

同四日ヨリ七日ニ至ル迄年首ノ賀式、先規ノ如シ、略

ス、

同月十一日

例年ノ如ク諸役人進級及ヒ地頭所転遷等ヲ命シ玉フ、

同月十三日

例年ノ如ク御兵具所ニ於テ、与力・足輕等捕リ手初ノ

式ヲ行フ、御家老島津石見及ヒ大番頭・御小姓組頭・

当番頭等出席、先規ノ如シ、

同月二十日

砲術操練初メ及ヒ軍神祭執行セラル、御名代島津周防

(全上)殿臨場、其他御一門家及ヒ御家老・若年寄・大

目付等臨場、開場ノ如シ、

同月二十日(マ)

齊興公日隅二州海岸御巡見、且福山原ニ於テ大操練催

サレ、御城下銃砲隊行軍演習スヘキ旨命セラレタリ、

二月

三日

齊興公日隅二州海岸御巡見ノ為メ御発駕、蒲生郷御一

泊、来ル六日福山原ニ於テ大操練御覽アルヘキ旨達セ

ラレタリ、

同月六日

本日福山原大操練予定ノ如ク施行、齊興公、御家老調

所笑左衛門、御側役二階堂志津馬・海老原宗之丞等ヲ

具シ福山地頭飯屋ヨリ御臨、大小砲銃隊ノ演習ヲ見玉

ヘリ、事後後卷ニ記ス、

同月十三日

齊興公御巡見先大根占鳥濱海岸ニ於テ大小砲演習ヲ覽玉フ(該所ニ砲台築造地選定セラレ装置大砲試験セラレタリ) 御家老調所笑左衛門、御軍役奉行二階堂志津馬・海老原宗之丞、御小姓組頭川上式部・鎌田刑部・川上龍衛・喜入壬生等臨場ス、

同月十四日

全所濱走砲台ニ於テ装置ノ大砲射擲演習ヲ覽玉フ、

同月十五日

南林寺大中公(十五世貫久公)ノ影殿ニ德豊ノ偏額ヲ掲ケ玉フ、齊興公御親筆、而テ同殿改築(二月三日起工)十一月廿九日竣工、遷殿式ヲ行ハル(御作事奉行・同下目付・大工頭等ノ姓名遷殿式ノ部ニ記ス)、

同月十八日

齊興公御巡見濟御帰城、大隅日向ノ二州各郷ニ於テ文武ノ芸及ヒ操練等御巡覽、其事実ハ後卷ニ記ス、磯別邸近地海浜ニ於テ砲術操練ヲ覽玉フ、事実別卷ニ

記ス、

同月二十四日

齊興公大砲操練ヲ天保山ニ覽玉フ(鎌田正純日記抄ニ詳

記ス)、

三月

十五日

嘉永ト改元ス(鹿兒島ニテハ同月廿八日布告)、

同月十九日

鎌田刑部ヲ来酉春御下国ニ就キ御礼使命セラル、

同月二十二日

喜界島沖ヲ外国船通航ノ報至ル(届書後卷琉球外国ノ部ニ

記ス)、

四月

朔日

齊興公若般院(ワカヤ)ノ(当山派修験道)新建築ヲ命セラル、明

年十二月三日竣工ヲ告ク、修験道面高連長院ヲ住持ニ

命シ玉フ、本堂ニ白鳩大權現ノ扁額ヲ掲ケ(齊興公御筆)

夷賊降伏ヲ祈玉フ、同日御城代兼御家老島津豊後至急

江戸ニ出發ス、琉球外国人処分ニ就テナリ、

同月六日

徳島之脱ニ外国船前後二・三艘來港ノ報到ル(屆書琉球外国

事件ノ部ニ記ス)、

同月八日朝

同島西沖ニ異国船一艘來泊龜津港ニ上陸薪水ヲ請フ、

英國ノ漁船ナリト云フ(屆書琉球外国ノ部ニ記ス)、

同月十二日

島津周防殿忠教(久光公旧名)、御家老座へ出席、政務

ニ預ルヘキ旨命セララル、

同月十九日

城北田ノ浦種子島彈正別邸ニ於テ海軍操練ヲ覽ス、御

家老調所笑左衛門、御軍役方係ノ諸役及ヒ御小姓組番

頭川上式部・川上龍衛・鎌田刑部・喜入壬生等砲船ニ

乘リ指揮ス、事實後卷ニ記ス、

同月二十二日

二階堂志津馬ヲ(行健)大目付ニ進メ寄合並ノ資格ヲ与

ラル、琉球ニ於テ外国事務ノ功勞ニ依テナリ、

同月二十五日

去ル十九日船操練ノ人数ヲ褒賞シ玉フ、

同日御使番兼御記録奉行平川宗之進ヲ助教ニ転斥セラ

ル(録高売實規則違背ノ事ニ依レリト云)、

同日伊地知小十郎(季安)ヲ御記録奉行トス、

同月二十六日

谷山中ノ鹽屋大砲場ニ於テ御名代島津周防殿洋式砲術

ヲ見セシム、調所笑左衛門其他諸役人臨場ス、演習ノ

事實後卷ニ記ス、

五月

四日

齊彬公第(ヲ)子寛之助君夭亡(実ハ五日酉刻)(幕府ノ日柄

ニ依テナリ)年四歳(七日ヲ以テ忌辰トス)、江戸大圓寺

ニ葬リ麗光院天質恵明大禪童子ト諡ス(生母伊集院氏)、

同月二十二日

相良甚太夫(長是)ヲ御側御用人トス(履歴及ヒ奇行後卷

ニ記ス)、

此日初テ御軍役奉行及ヒ御軍賦役ヲ置ク、尋テ御納戸

奉行兼御記録奉行得能彦左衛門ヲ御側役兼御軍役奉行ニ、高奉行安田助左衛門、御広鋪番頭稅所七郎左衛門、郡奉行田中清右衛門〔門脱カ〕、御記録奉行添役兼御菜園奉行伊地知小十郎、御作事奉行見習法元六左衛門〔小伝後卷ニ記ス〕、物奉行見習野元源五左衛門等ヲ御軍賦役トス、之レヲ御軍賦役ヲ置カレン初トス、

六月

二日

異国船掛御家老座ヲ廢シテ御軍役方御家老座ト唱ヘシム、之ヲ御軍役改正ト唱フ〔御軍役改正及ヒ祿高改革〔改カ〕或ハ大小砲製造砲台改築或ハ操練等ノコトハ後卷ニ詳記ス〕、

同月二十七日

天保山ニ於テ御流儀砲術大小砲隊操練ヲ覽玉フ、大番頭・御小姓組番頭進退ヲ指揮ス、事実後卷ニ記ス、

七月

十日

大小門闕ノ葺及ヒ諸士風俗匡正文武奨励ノ訓令ヲ発シ玉フ、御親書後卷ニ記ス、

齊興公江戸へ発駕〔午ノ刻御発城〕、扈從御家老調所笑左衛門、御側役吉利仲・伊集院織衛、其他人名略ス、

八月

二十二日

異国渡来ニ臨ミテ、長崎援兵及ヒ東西海岸又ハ御城下警衛各所砲台守備ノ人員ヲ命セラル、

九月

十一日

大砲操練ヲ吉野原ニ催ス〔五十斤臼砲ヲ瓶テ試ム、日本ニ於テ初テ試タル事実後卷ニ記ス、鎌田正純日記參考スヘシ〕、

十一月

二十三日

第四公子江戸邸ニ生ル、篤之助ト命名ス〔母ハ伊集院氏〕

五七二 諏訪甚六履歴 参考

是年伊作物主トナル、命ニ曰ク、若シ異船長崎ニ入港スルトキハ以テ応接ニ供ス可シ、且ツ領内西目海岸防禦ト〔西カ〕シテ兵ヲ遣ハスヘキトキハ、兵備ヲ從へ出役スヘキノ命

ヲ奉ス、

五七三 齊興公日隅州海岸ヲ御巡見

弘化五年申二月三日齊興公日隅州海岸御巡視ノ為メ御出
発、蒲生・國分・福山・末吉・岩川・志布志・柏原・高
山・大始良・小根占・大根占・垂水・櫻島等ヲ經テ同十
八日御帰城、御巡回中各所ニ於テ操練或ハ海岸砲台ノ発
射或ハ砲台改築ヲ命セラレ、随員國老調所廣郷、用人兼
軍事係二階堂志津馬・海老原宗之丞等ヲ初トシテ、軍事
關係ノ吏數十名或ハ、兵士三十名、大砲手二十五名ヲ從
ラレタリ、

五七四 喜界島ニ米國捕鯨船來ル

三月廿四日喜界島ニ異國船一艘漂着シ、同港内四五町許
ノ所ニ投錨ス、乗組ノ異人十三名蓋シ亞米利加國ノ捕鯨
ナリト云フ、食料薪水ヲ請ヒ、居ルコト一晝夜ニシテ去
ル(或ハ二晝夜ト記ス、何ツレカ是ナリヤ)、

五七五 (之脱カ) 德島ニ異國船來リ海陸ヲ測量ス

四月六日德島喜念港ニ異船一艘來ル、同夕又三艘來リ碇
泊シ小艇各一艘ヲ以テ岸ニ登リ薪水ヲ請フ、蓋シ米國ノ
軍艦ニシテ日本及ヒ琉球ノ諸港巡航測量ノ為メナリト、
泊ルコト三日ニシテ去リ、行ク所ヲ知ラス、

碇泊中上陸シテ村内ヲ漫步シ、或ハ民家ニ入り婦女ヲ脅
ス等ノ挙動アリ、殊ニ将官ト覺シキ者ハ山野ヲ跋涉シ草
木土石ヲ拾ヒタリト云フ、

五七六 (之脱カ) 德島ニ英國軍艦來リテ測量ス

同月八日朝同島龜津港ニ異國船一艘又來ル、数名ノ異人
上陸ス、島吏迎接シテ來意國名ヲ問フニ、英吉利國ノ軍
艦ニシテ日本沿海測量ノ為メナルヲ告ケ、薪水及野菜ヲ
買ハント請フ、則チ請ヒニ応シテ与フ、代価ヲ払ハント
云モ謝シテ受ケス、泊ルコト一晝夜ニシテ去リ、行ク所
ヲ知ラス、

五七七 外異ヲ掃ハント伊勢大廟ニ禱ラセ玉フ

四月五日

天皇攘夷ノ事ヲ伊勢神宮江祈ラセ玉フ、

抛干古法今年曆面有恐申者然、近年異船見海上、今春

三月、又見東南海、防禦之備嚴重之由、因茲宸襟不穩、

愈万民安業 宝祚長久御祈、自來八日一七個日、^{〔ケ〕}社

一同抽誠可勤行之旨、可下知 神宮之状、如件、

五七八 所司代ヲシテ辺防ヲ幕府ニ令シ玉フ

五月八日松平玄蕃頭書ヲ幕府ニ致シテ曰ク、外患日ニ迫

ル、兵備宜シク敵ニセサルヘカラス、是ヲ以テ屢々布令

アリ、臣等深く其意ヲ了ス、因テ今ヨリ後言ヲ鹿狩ニ寄

セ藩士ヲ驅テ兵ヲ鍛練セント欲ス、敢テ允可ヲ請フト、

幕府之ヲ允ス、長州侯書ヲ作リテ藩士ニ節儉ヲ主トシ兵

ヲ足シ食ヲ給サンコトヲ論ス、

五七九 般若院新築異賊降伏ヲ祈ラシム

四月朔日修驗道般若院新築ヲ命セラル、此日起工翌年十

二月ニ至リ落成ヲ告ク、這守宇タル修驗道面高中正院カ

自宅ヲ以テ般若院ト唱ヘ一小宇ナリシヲ、請願スル者ア

リテ邸地ヲ拡張シ隣近ノ士邸ヲ合併シ、或ハ道路ヲ新ニ

開キ広大ナル寺門トシ白鳩大權現ト唱ヘ、同殿齊興公ノ

肖像ヲ安置セラレ福祚延満・異賊降伏ノ御禱祈場ト為サ

シメ玉フ、而シテ同二年十二月五日開眼供養ノ式ヲ執行

シ玉フ（廢仏ノ後公ノ御肖像ハ鶴ヶ峯神社内神像殿ニ納祭シ玉フ、）

五八〇 第二公子寛之助君御天亡布告

去ル巳年少將樣齊彬公 御妾腹出生ノ寛之助様御事、思召

有之表向御弘メ無之、然処此節御病氣御養生不被為叶、

去ル五日夜酉刻被遊御天亡候、云云、

五月四日

五八一 二階堂志津馬在府中乘輿願

一筆致啓上候、家来二階堂志津馬ト申者其御地ニ差置

候処、足痛有之馬上許リニテ難相動候間、駕籠御免被

下候様相願候、依之別紙以書付申上候、恐惶、

六月六日

松平大隅守〔齊興〕

阿部伊勢守様

牧野備前守様

青山下野守様

戸田山城守様

若年寄格

二階堂志津馬健行

右家来其御地（公御在国ナル故如此）エ差遣候処、足之痛有之馬上難相勤候間、駕籠御免被下候様相願候、以上、

六月六日

松平大隅守

一筆令啓達候、家来二階堂志津馬事当申年五十一歳（五十余歳ナラサレハ許可セラレサル故年令ハ実年ニアラス）

罷成、足之痛有之馬上許ニテ難相勤候間、其身誓詞御申付駕籠御免可被下候、為其如斯候、恐惶、

六月六日

松平大隅守

右七月九日御用番様へ被差出、大目付ニテ候得共公義へハ若年寄格ト相唱候様被仰付候、云云、

從來幕府ノ慣例ヲ以テ各藩ノ重臣等府下ニ於テハ乘輿スルヲ得サリキ、故ニ各足痛・腰痛或ハ五十余歳ノ年齢ナル等ノ口実ヲ以テ乘輿ノ允許ヲ受ルノ慣例ナリ、之ヲ請願スルニハ藩主ノ名ヲ以テシ、而シテ閣老官宅ニ於テ誓詞血判等ノ成規アリ、則チ二階堂カ請願書是ナリ、随テ藩内ニ於テモ又重役任命ノ日足痛・腰痛等ヲ申立乘輿ノ許可ヲ受ルノ例トハナレリ、何等ノ理由ニテ如斯ノ慣例トナリシヤ、藩内ニ於テハ安永ノ初メ重豪公政務改革ノ時分ヨリ幕府ノ制規ニ慣ハレタリト云ヒ、重役任命ノ当日足痛・腰痛等ノ名義ナルカ故ニ、諺ニ重役（御家老・若年寄・大目付ヲ三重役ト唱フ）ハ悉ナ足腰痛者ト嘲唱セリ、

五八二 市田右近ヲ譴責ス

市田右近〔鑑カ〕
近義

右ハ当務ニ付テハ席頭、殊ニ年背モ相応罷成候付テハ一統ノ目当ニモ可罷成事候処、其儀モ不弁兼々病氣等

申立年中不動勝、剽輕者共相集士ニ不似合振舞有之候段被 聞食通、家格并家柄ヲモ不憚別テ不埒ノ至ニ候、右ニ付テハ屹ト御取扱ノ品モ被為在候得共 慈光院様御由緒ノ訳モ有之、別段ノ御宥免ヲ以御役被成御免隠居被仰付候条、諸帳面等如例可申渡旨壹岐（島津久武）殿御指図ニテ候、以上、

六月十五日

右慈光院様トハ義近ノ曾祖父喜内貞行ノ娘ナリ、大信院殿重豪公ノ妾

將軍家齊公ノ御廉中茂姫君ノ生母、茂姫君ハ後ニ廣大院殿ト諡ス（御諱ハ藤原寔子）義近ハ当時寺社奉行兼大番頭職ナリ、

五八三 参考 江田平藏日記抄

東郷藤兵衛

右流儀（示現流）師範ニ付テハ、御領内数多ノ師範家被召立候乍内モ、為差立儀故 御先代（十八代家久公ヨリス）様ヨリ御取立

上様ニモ齊興公

分テ重ク御取持被思召上折角御引立之事ニ付、藤兵衛儀ハ老年罷成候故、別紙ノ御取訳ヲ以テ彌十郎へ指南方ハ勿論致伝授候儀共何篇為相任、彌十郎儀ハ猶又致出精、流儀ニ不限年若之者共律義礼讓方迄モ致教示候様被遊御沙汰候旨、笑左衛門殿拙者ヲ以テ御方へ申聞候様笑左衛門殿ヨリ致承知候事、

御納戸奉行
御供目付筋

嘉永元年申六月十九日

江田平藏

東郷左太郎殿并左七郎殿父子へモ同文言ヲ以テ申達候事（江田ナル者ハ示現流ノ高弟ナリシ故斯ノ如ク取伝ヲモナサシメタリ）、

五八四 参考 種子島時昉記事抄

水戸前中納言殿御書取

申正月晦日於弘道館御家老エ拜見被仰付、凡七百人程麻上下着用、五十人位ツ、出席、大御番助教石川幹二郎説上之、一同拝聴之、

我等事一昨年ヨリ深慎以來国政向ニ携不申儀ハ勿論、
世上ノ事耳ニモ入レ不申処、此度

勅書致返納候様伝奏ヨリ所司代迄被仰出有之候段、大
老ヨリ申聞有之、猶又速ニ可返上致旨直達有之由、安
藤對馬守礫川ニテ中納言へ致面会候節、伝奏ヨリ所司
代迄被仰出候御書付中納言并家老共迄拜見仕、此御書
付ノ趣ニ被仰出候上ハ、返上^{マツ}不遊被候^{マツ}ハ御違

勅ニ罷成候間、迅速御返上被遊候様申聞候^{マツ}由、早
速返上可致義ニハ候得共、中納言家老役人共ハ勿論、
家中一同名義ノ立候様致度トノ事ニテ、夫モ厚手段ヲ
尽シ候得共、出来不申候得ハ不得止事候間、

勅命ニ依テ公辺へ相納候上ニテ証書モ取置速ニ返納可
致トノ義尤ニ存候、然処國中士民ノ中ニハ

勅書致返納候テハ一切不相成トテ長岡江多人數出居候
者ノ中ニハ虚実ハ如何欤、我等ニテ一切返納不相成候
様致下知候趣、又申立出居候者江品々遣シ我等申付ニ
テ出置候様ニモ相聞、右ハ取留上クル事ニハ無之候得
共、多勢長岡江出居候儀ハ無相違、往来ノ妨ニモ相成

ノミナラス、鎮撫ノ役人エ対シ否書或ハ被下ノ役人ヲ
妨、彼是不作法ニモ有之欤ニ相聞候処、長岡ニ致出張
候得ハ名義ノ立ント云訳モ有之間鋪、詰リ家政向不行
届ニ相当リ中納言事素意不相当候得ハ、旁以早速曳淚
可申ト役人共精々申諭候由之処、不致承伏者モ有之欤
ニ相聞、如何ノ事ニ候、外々ノ義共ニ違
天朝ヨリ致返上候様被 仰出候旨、大老ヨリ申聞候上
ハ速ニ不致返上候テハ不相成、若於相拒ハ

京師公辺江対シ不相濟、家ノ安危ニモ拘リ候程モ難計
候得ハ、詰リ多人數敵重ノ所置ニ至リ可申候、左候得
ハ理義名節モ立不申、所謂血氣ノ勇トモ可申大成過チ
ト存候、此所能々勘考イタシ篤実謹厚ニ心掛、主君家
老始役人共申聞速ニ致承伏候処、精々談判イタシ無滞
迅速ニ為差登候様取扱可申候、弥不致承伏者有之候テ
ハ無己敵重ニ申付候外有之間鋪候間、國中士民一人タ
リ共敵重申付儀數ケ數候得ハ、士民ニテモ主君ノ旧恩
ヲ存シ我教諭ノ処承伏為致候様ニト存候、社稷ノ為メ
士民ノ為心配ノ余リ申聞者也、

正月晦日

家老共江

這書當時モテハヤシタル者ナリ、写シテ少將様齋彬公御手許へ差上候処、此様ナル者見当候ハ早く出セヨトノ御沙汰ニ候、云云中山利善、日記抄

五八五 松前候ヨリ通知書留守居夜所日記抄

私領分三馬屋遠沖江一昨廿日昼四ツ時頃、船嵩凡式千石積位帆柱三本立ノ異国船二艘相見得、段々三里内外ノ所江近寄候ニ付、同所江備置候松前渡海之人数海岸江致出張相固候処、又々九ツ時頃爰月遠沖江船嵩シカト相分兼候得共、帆柱三本立ノ異国船三艘相見得、次第二近寄候旨同所詰家来共ヨリ申越候付、兼テ城下江備置候一番手人数一備今朝同所江繰出、其外海岸浦々固向之儀殿重手当申付、猶又依模様後詰人数モ出張ノ手筈ニ申付置候、此段先御届申上候、以上、

三月廿二日

津軽越中守

写 右四月三日朝海岸御掛リ阿部伊勢守様江被差出候書面之

昨廿二日御届申上候領分三馬屋并装月沖江渡来之異国

船五艘、地方ヨリ沓里内外江近寄候付見分之処、内四艘ハ三千石積位、沓艘ハ五千石積位ニテ同所沖合間起居候処、同三艘ハ廿一日ノ朝何レハ颯走候哉、翌廿一日曉帆形一切相見得不申、残り二艘之内沓艘ハ同日朝六ツ半時頃遠沖江颯走り、沓艘ハ龍濱江向颯行、其後帆影カ景相見不申候得共、猶海岸殿重相固罷在候処、廿二日昼九ツ時頃又々五艘六條之間村ヨリ釜之澤村沖江潮掛リ之様子ニテ、右船ヨリ大筒四五度打放候ニ付、兼テ三馬屋表江備置候固人数何レモ甲冑ニテ藤崎村江致出張相固候旨、同所詰家来共ヨリ申越候、依之今廿四日式番手人数一備繰出申候、其外海岸手当之儀殿重申付、猶又後詰人数モ依時宜差向候手筈ニ申付置候、此段御届申上候、以上、

三月廿四日

津軽越中守

去ル廿二日・廿四日両度御届申上候領分六條之間村ヨリ釜之澤村沖合江潮掛リ之異国船、五艘之内沓艘近寄村々前沖江折々漂居候付、兼テ備置候三馬屋詰物頭一

手六條之間村濱先相固メ、後詰物頭一手之儀ハ藤島村濱先相固メ、一番手番頭一備ノ儀ハ髮月相固メ、内先手物頭一手ハ舍利濱先相固、貳番手番頭一備ハ平館江出張、様子次第其向相固候手筈、且又分地津輕出雲守領分海岸へモ固人数出張為致、其後ハ大筒等打放不申、直様元之処江汐掛リイタシ兎角事情相分兼候付、廿五日之朝五ツ時頃様子為見届橋船壹艘江家来之者三人為乗組差遣候処、元船ヨリ招寄候付、右之者乗移リ、手真似ヲ以テ様子相尋候処、風合不宜落船之旨ヲ以テ手真似相答、尤船嵩シカト見分候処、老艘ハ五千石積位、外四艘ハ貳千石程漁船ノ様ニモ相見得、船中改候処、乗組人数大船ハ百人位、其外ハ三拾五六人位、船底江隠居候哉船嵩不釣合小勢ニテ、頭立候者ハ笠様之物ヲ冠リ其外ハ頭巾様之物ヲ冠リ、着物ハ何レモ腕貫ニテ羅紗之様之品、色ハ華色様之類、胸前牡丹占メニイタシ、股引様之品ヲ着シ、頭立候者共ハ下ニ赤キ衣類ヲ着、何レモ身丈六尺位無刀ニテ、船中ニハ大筒一挺・碇式頭又ハ大筒一挺ツ、外ニ漁道具有之候得共、

大筒小筒等ハ是又船嵩不釣合ニ付、取隠置候哉ニモ難計候、然ルニ異国人ヨリ手真似ヲ以テ地方之頭立候者ニ逢度様子ニ付、橋船江六人乗ラセ召連来候処、外四艘ヨリモ橋船相下ケ漕寄候体ニ付、又々家来之者差遣召連来候、異国人都合貳拾九人藤島村濱先出張所江引付漂着之訳柄以手真似ヲ以相糺候処、言語不相通候得共、(行カ)順風無之故滞在ノ旨ヲ以手真似相答候間、何故鉄砲打放候哉敲重相糺候処、不存旨申募候体ニテ頭ヲ振り致恐怖候様子ニ相見得候、然ル処何カ物ヲ乞候様子ニテ、薪水差出候処頭ヲ振り、頭立候者酒入器様之物差出、酒飲手真似イタシ候付、酒式舛入樽五樽相与候処、土器様之物并絵紙様之物差出候得共請取不申候処、不興ノ体ニ相見得、又々何カ給候手真似イタシ給物乞候体ニ付、味噌七貫式百目入五樽与早速出帆之儀相晰候処、謝礼様之儀ヲ申、東風次第出帆之旨相答候様子ニ付、永々滞船イタシ候ハ、微塵ニ打碎候旨手真似ヲ以テ相晰候処、直様元船江漕戻リ、夕七時過五艘共西之方江向キ次第ニ颯走候間、物見船差出遠見為致候処、廿六

日曉迄ニ弥帆影モ不相見候、猶又海岸固メ向ノ儀ハ敵重ニ手当申付置候、此段御届申上候、以上、

三月廿八日

津輕越中守

右書面彼留守居役筋ヨリ、書面ヲ以テ海岸ノ領主ヘ心得ノ為メ通知スヘキ旨、御老中内達ニ任セ廻書ヲ以テ通達、云云、

五八六 参考 鎌田正純家記抄

弘化五年戊申正月十八日、近年異国船折々地方ヘ漂来ニ付、從 公辺御手当向品々被仰渡候ニ付、御台場御築立相成、其段御届被仰上候付、小根占之儀肝要之場所柄故、時々差越防禦筋等之儀所中之者共ヘ致教示、御手当向敵重行届候様被仰付、御家老調所笑左衛門・御用人伊勢雅樂ヲ以テ承知之、

弘化五年戊申正月二十日、此節就

御巡見福山牧内ニヲヒテ砲術訓練被遊

御視(御覽ト唱フルトキハ其規式アリ、故ニ略シタルヲ斯ク唱フ)候付、為差引被差越、左候テ御視濟之上地頭所ヘ

奉待上候様、川上式部・川上龍衛同様被 仰付、御家

老調所笑左衛門・御側役二階堂志津馬ヲ以承知之、同

二月三日ヨリ福山ヘ差越、同六日訓練無滞相濟、領分

南邑ヘ立寄、左候テ小根占ヘ差入、十二日

太守様南邑飯屋御建、^(立カ)十三日小根占地頭飯屋御泊、一

日御滞在、同十五日

御機嫌能御立被遊、夫ヨリ指宿之様^(渡カ)帰海帰家、嘉永元

年三月^{十五日}改元御弘ス朔日吉野并ニ諸々御馬追御用掛被仰付

若年寄樺山伊織久成・御用人伊勢雅樂ヲ以承知之、

五八七 参考 全上日記抄

正月十二日雨

諸士容貌并ニ風俗沙汰之義被為在云々、承知、

二月二日晴

太守様福山牧内ニオヒテ砲術訓練御視ニ付、差引トシ

テ被遣、

同月三日晴

来ル六日於福山牧内御流儀砲術訓練御視ニ付、御発駕

同月五日晴

上様御着、御側役二階堂志津馬殿旅宿へ差越伺 御機嫌、笑左衛門(調所)・宗之丞(海老原) 殿旅宿へモ見廻候、

同月六日晴

今日調練、成田(正右衛門)・青山(愚知)・野村(彦兵衛) 三家トモ首尾能ク済、

同月十三日曇

今早朝ヨリ大根占鳥濱御休ノ場へ御通掛為御目見御門外へ罷出、云云、

同月十四日曇

濱走御水茶屋へ御巡見砲術調練有之、式部殿(川上)・龍衛殿(川上)三人(則鎌田刑部)へ御側役二階堂志津馬殿ヨリ御用有之ニ付罷出候処、海岸防禦ハ勿論、所中之義万端引受居地頭同様可致指揮、云々、

同月廿二日晴

明後廿四日磯御茶ニテ砲術調練有之、

同月廿四日晴

今日磯御茶ニ調練ニ付大砲稽古場(屋敷カ)(砲術館ノ通唱以下皆

同シ)へ出席、御軍神へ拝礼、調練首尾能相済酒肴ヲ賜(ハル、

四月十二日晴

島津周防殿(久光公旧名)時々出席議ニ参与セラル云々被仰出、

全月十九日曇

田之浦種子島彈正殿前濱崎飯屋(一名田乃浦)御流儀大砲船打調練、

全月廿五日晴

砲術船打調練ニ付御褒詞有之候、

全月廿六日曇

谷山中之鹽屋ニテ、御名代トシテ島津周防殿并ニ御家老衆調所笑左衛門殿砲術調練御見分有之候、

五月十日

砲術稽古場へ調所笑左衛門殿見分有之候、

全月廿三日曇

寛之助様御天亡ニ付伺 御機嫌、

六月二日雨

御軍法役御座、異国船掛跡へ移サル、

全月十七日晴

於天保山調所家老砲術ヲ見分セラル、

全月廿七日曇

於天保山砲術調練御視有之候、

八月廿一日晴

太守様御発駕ニ付テハ、寄合以上乗馬(此時ヨリ番頭平日乗馬スルコトナレリ)致登城候様トノ事ニ付、乗馬登

城ノ事、

全月廿二日雨

山川表へ異国船渡来ノ節警衛方手当被仰出、

九月十日曇

明十一日早天於吉野原調練有之筈、

全月十一日晴

今早朝ヨリ調練有之首尾能相濟、

全月十六日雨

御春屋内客屋へ別勤ニテ、長崎表へ異国船渡来之節御

加勢云々被仰出(長崎援兵人数賦及ヒ出軍ノ準備)、

五八八 参考 江田平藏日記抄

齊興公隔日二州御巡見ノ事実

弘化五年申二月三日鹿兒島御発駕、吉田本城村御口之者(御中間トモ云)岩本織右衛門所御休、蒲生地頭飯屋御泊、士踊御視、翌朝四日御立前百姓大鼓踊御視、加治木領主船手(島津兵庫所有)御休、國分地頭飯屋御泊、強張踊御視、五日小村御新田御覽(両所ニ新田數百丁歩ヲ新築ス)、大汝社地内御休、社人共神舞御視、福山郷士厚地次兵衛所御泊、六日末吉岩川伊勢雅樂領村笠木之段御休、同所之内岩崎村百姓中島門郷左衛門所(後ニ岡富ト唱フ)御泊、七日志布志伊崎田村猶ヶ原御休、志布志地頭飯屋御泊、八日御滞在、同所夏井濱御出砲術調練并ニ大砲打方御視、尤御供外別段鹿兒島ヨリ三十人(銃士三十人、市廣モ其人員ニアリキ)被召連候人数ニテ候、御帰宿之上町人共太鼓踊、百姓御田踊(一名棒踊)御視、九日大崎島津豊前(都城領主)持菱田村庄屋役所

御休、串良柏原中宿郡山郷士田邊泰藏所御泊、十日内之浦御光越之管候処、前夜ヨリ大雨ニテ山御越シ不被遊御出来、御都合御見合ニテ直ニ高山之様御越地頭飯屋御泊、十一日御滞在土踊御視、十二日始良地頭飯屋御休、大始良地頭飯屋御泊、十三日大根占鳥濱郷士前田彦左衛門所御休、小根占地頭飯屋御泊、十四日御滞在、濱走り御台場御出鹿兒島人数砲術御視、十五日田代花瀬御水茶屋御休、大根占地頭飯屋御泊、十六日同所之内松之尾御水茶屋御休、垂水領主飯屋御泊、十七日同所之内海瀉領主茶屋下ヨリ御乗船、櫻島瀬戸御廻リ同所之内藤野村郷士藤崎庄右衛門所御休、横山地頭飯屋御泊、十八日海上廿八町、磯御茶屋へ御上陸被遊御帰殿候、云云、

五八九 参考 黒田家々記抄

三月十二日五島左衛門尉殿御領内柏村沖合ニ、異国船体之大船都合四艘相見候趣、御同所御用達ヨリ長崎御屋敷迄廻状ヲ以テ為知来ル、

三月十三日ヨリ同十五日迄ノ間、對州西海沖合ニ追々異国船都合十隻相見北へ向ヒ乗去候旨、同十六日ヨリ翌十七日迄追々異国船七艘對州西海地方近ク致通船、三月二十九日對州伊奈村ト申所之沖西北之間ニ異国船一艘相見北へ向通船、佐次奈村ト申所之沖合七・八里ノ所ニテ東へ向ケ乗去候趣等、追々於長崎地方聞役ヨリ以廻状申越之、

四月二日對州家老中ヨリ以書状、對州御領海へ多日之間數艘ノ異国船通行之趣申越之、

大意

三月四日巳之下刻頃、對州南之端豆酸村ト申處之沖合西南之方ヨリ、檣四本程建白帆數多掛候異国船一隻東海へ乘来リ、地方四里程之所北東へ通船、城下浦沖ニテ八十里程ニ相見、申之刻頃弥々沖張帆影不相見、同七日巳之刻頃豆酸沖村ニ当リ大砲ノ音一ツ相聞候処、船影ハ一向不相見、云云、

同九日巳之刻頃西海椎根村ト申ス所ノ沖合三・四里之処ニ、同四日同様ノ異国船一艘相見へ北ニ向ヒ乗去リ

候、同十三日辰之下刻頃西海廻村沖合四・五里ノ処へ、橋三本立チ白帆数多掛ケ候異国船四艘相見へ、北へ乗通リ、申之中刻頃帆影不相見、全十四日辰之刻頃椎根村沖合五・六里之所ニ異国船二隻相見へ、午ノ刻頃又々二艘相見へ、廻村沖ニテ四艘一所ニ相成リ大砲四放相聞キ北へ通船、木坂村ト申ス所ノ沖ニテ暮ニ及船影不相見、同日酉ノ刻豆酸沖村ニテ大砲ノ音一相聞候処、日暮船影不相見、同十五日雨天ニ候処、卯之中刻頃豆酸村沖ニ右同様之異国船二隻相見へ西海北へ向乘行、辰之刻頃廻村沖ニテ大砲五放相聞北へ乗去、同十六日曇天霧深ニ候処、未之中刻頃霧晴豆酸村沖八・九里之所ニ異国船一艘相見北へ向ケ通船、申ノ下刻頃廻村沖乗通候節大砲一打放無程日暮船影不相見、同十七日卯之上刻頃豆酸村沖ニ同三艘相見、引続又々二艘相見段々北へ通船、尾崎村沖ニテハ一里程之所通船人体モ相見候程ニ有之、大砲一打放、綱島沖ニテハ太平洋ヨリ又一艘飄来、都合六艘ニ相成午之中刻頃迄ニ何モ北ヲ指乗去候、右之通多日之間数艘ノ異国船通行ニ候、西海

之岸浦々堅ク手当嚴重被申付置候、右之趣追々公義へ御届被申上候、猶此後相替儀モ候ハ、可得御意旨對馬守殿為被仰付申越〔旨脱カ〕、八月二十一日於長崎薩州開役ヨリ以廻状、琉球国へ逗留異国人之内一人神父 仏人当六月病死ニ付外佛人ニ任セ七葬致候旨、其外委細琉球人ヨリ申越候付、御奉行所へ御届仕候段申来ル、十月十一日於長崎薩州開役ヨリ以廻状左之通申来ル、琉球国之内那覇沖へ当七月廿八日異国船一隻見来候ニ付、役々差越海岸警衛致居候処、漸々近寄地方ヨリ四・五里程沖へ卸碇候付、早速通事役々差越候、折柄逗留佛人儀モ遠望鏡ヲ以テ旗印見、本国船相違無之候間差越度申候付、橋船へ乗付漕出、異国船ヨリモ橋船一艘漕来行逢候、弥佛国船ニテ彼方へ橋船へ乗移通事役々共ニモ不程本船へ乗付、来着之次第并乗組人数等相尋候処、人数五百人程乗組歐羅巴ノ属島ヨリ出帆、十日ノ日数ニ来着、爰元ヨリ直ニ廣東・厦門へ差越候段手様等ニテ相通、翌廿九日佛国船乘頭其外水主迄四十

人余橋船三隻ヨリ逗留佛人俱々上陸、佛人召置候寺へ指越候ニ付、布政官乗頭へ面会安否尋相濟、逗留佛人列婦候様可及理舞^(解之)合候処、逗留佛人ノ過品へ勿論敷付迄モ不殘橋船へ相運相応ノ及挨拶、別テ差急逗留佛人

召列本船へ乗組、同日暮時分午未ノ間へ致出帆候、右ニ付テハ、先年来種々難題筋申掛候義共全不申立、無事平穩ニ致出帆國中一統安緒致候、且又逗留英人義、

佛国船来着之御為見廻差越度申出小船ヨリ本船へ差越出帆之節ハ海浜ニテ相別、其後只管迎船相尋候様子ニ相見得無異義罷在候、尤取締向尚又堅固申付置候段琉球役々并警固トシテ指渡置候役々ヨリモ飛船ヲ以テ申越候事、

五九〇 参考 上杉家々記抄

嘉永元年戊申四月異船四艘出羽ノ飛鳥ニ来ル、酒井忠

發^{左衛門尉}兵ヲ出シ之ニ備フ、尋テ越後粟島ニ来ル、警報

米澤ニ達ス、上杉齊憲^{彈正}中里某^{大弼}下ニ命シ兵三百ヲ率

ヒ往テ之ニ戍ラシム、既ニシテ異船帆ヲ掲テ去ル^{上杉家記}裂漢

文稿○案ルニ粟島越後岩船郡ニ対ス、岸ヲ距ル七里、東西十八九町、南北一里許、米沢藩越後領所ノ内ニ在リ、此役真田幸真人ヲ越後ニ遣ハシ、其形勢ヲ視察セシメ、乃チ之ヲ江戸ニ報シ兵ヲ勤、シ命ヲ待ツ、既ニシテ異船粟島ヲ去リ藩警ヲ解クト云フ

五九一 和蘭人風説書

一 当年来朝ノ和蘭陀船五月廿五日咬囉吧表出帆仕、海上無別条今日御当地(江戸ヲ云)へ着岸仕候、右巻艘ノ外類船無御座候、

一 「タイワン」其外日本近海ニ於テ唐船見掛不申候、

一 去年御当地ヨリ十月五日帰帆仕候「スヘルトーゲンホス」^船日数廿四日ヲ経無滞同月廿九日咬囉吧着船仕候

一 去年御当地ヨリ御送り相成候「アメリカ」人三月朔日

「アメリカ」へ向ケ差送り申候、

一 瓜哇中物静ニ御座候、

右之外相替風説無御座候、

カピタン

右之通船頭へとる・阿蘭陀人かびたん承り申候付和解

差上申候、

申六月廿九日

大小通詞

阿蘭陀船 五千六百七十石積

船号 アンテレーセン

象牙 百四十九本千三百斤^(斤)

丁子 五千斤

胡椒 一万斤

錫 三万斤

鉛 二万五千斤

蘇木 十七万五千十斤

砂糖 五十一万七千百廿五斤

別段商徳

水銀 五百二十斤

紫旦 六千八百斤

人参 七百斤

阿仙薬 六百斤

肉豆 三百斤

脇荷物

硝子箸 四拾七箱

小間物類 十箱

焼物類 三箱

タマリンデ 五桶

サフラン 百五十斤

白檀 三千百斤

丸藤 六万七千九百斤

サボン 三百四十四箱

水牛角 九千五百斤

同爪 千二百斤

フレッキ 十二箱

油薬類 貳箱ト三百瓶

皮類 二百六十枚

アラヒヤゴム 千三百四十斤

五九二 大森村ニ大筒場創設布告

武州大森村地先江、此度大筒町打場所御取建有之、貫目以上已下共年々四月ヨリ七月迄、諸向打込稽古被仰出候間、御旗本・御家人並陪臣之向（諸藩士ヲ云）共免許（砲術伝授者）以上之者罷越不苦候ニ付、都テ徳丸

原稽古振合ヲ以可被相願候、尤御旗本・御家人へハ御筒等拝借被仰付筈ニ候、委細戸川中務少輔・井戸鐵太郎へ可被承合候、

右之趣向々へ可被達候、

五月

五九三 柳營大小吏員及大小名総計

一御番衆 二千五十人

一与力 千二百八人

一御徒衆 四百二十人

一同心 凡六千二百二十七人

一水主衆 四百四十三人

凡一万七千八百八人余

一万石已上二百六十六家(大小名ト唱フ)

千二百三十九万石 十万石以上

四百十三万石 三万石以上

百六十一万石 一万石以上

四十六万九千八百八十一石 惣ハシタ

総計一千八百五十九万九千八百八十一石余

一日本国惣人数

二千五百九十一万七千八百三十人 嘉永元年七月ノ調

内訳

男千三百八十一万八千六百五十余人

女千二百九万九千七百七十六人

右高二千五百七十八万六千八百九十五石余

一琉球国 十五島石高

内十二万三千七百石 琉球王持高

一沿海円廻 一千四百五十里(當時測量)

幅員狭処止千常陸州云

御領(幕府)石高七百九十二万貳千四百拾二石余此内

高二百六十一万八千八百三十石余

但御旗本衆其外高家衆交代寄合等ノ所領

高四百十四万二千五百四十七石余

但御料御藏高

高百十六万四千三十五石余

但社寺御朱印高

此総物成百九十八万三千三百五十三石余

但免二分五里取リ

此内米九十九万六百七十六石余

金七百七万六千二百五十七兩余

但三斗五舁入百俵二百五十兩積

此調書ハ川路左衛門尉殿御前へ差上ラレ候ヲ拜見致写置
モノナリ、御日帳ニモ為見合記置候事ト記セリ種子島、時防日記

五九四 参考 平田宗高家記抄

当時西洋各国ノ事ヲ記スルノ書未ダ世ニ多カラス、故
ニ先考広ク搜シ普ク求メテ而シテ之ヲ得ルヤ必ス写シ
必ス鈔ス、最モ砲術書ノ如キニ於テハ力ヲ尽シ之ヲ求
メ、之ヲ实用ニ試験センコトヲ要ス、

先考自ラ奉スルコト儉素、刀劍ノ如キ实用ニ適スルヲ
以テ主トシ、虚飾ヲ装スルヲ好マス、又酒ヲ嗜マス尅
滴モ其候〔巻〕ヲ霑ス能ハス、然トモ宴席ニ方ツテハ高談雄
弁衆ヲ庄ス、賓客ノ響ノ如キ最モ其盛ヲ極メ、平常夜

話客ト雖モ薦蓋甚タ厚シ、

先考横目職ヲ奉シテ琉球ニ渡航スルコト再度、建白シ
テ琉球ノ貢納ヲ停メ、換ルニ砂糖ヲ以テスルノ方法ヲ
述、官之ヲ允可ス、是官民与ニ便ヲ得ルニ因テナリ、
又琉人宜野灣親方ト問答ノ書アリ（迭失之）、琉球ノ地
理制度凡百ノ事悉ク之ニ載セサルモノ莫キナリ、
謹テ按スルニ、我藩軍政ヲ設クルヤ、近世甲州流兵学
ナル者ヲ尊信シ、軍師職ヲ置キ其官ヲ世々ニシテ、而
シテ古戦築城之空談ヲ事トシ、竟ニ古昔我

先公兵ヲ用ユルノ良制ヲ廢絶セシムルニ至ル、其後徳
田邕興（通唱小藤次孫欲軒ト呼）子ト云フ者アリ、其ノ此
ノ如キヲ憂ルヤ憤ヲ発シ書ヲ著スコト数十百篇、兵法
ノ要及ヒ諸家ノ是非ヲ論スルコト頗ル精確ナリ、又以
テ本藩冠防禦ノ術ニ及フ、先考少ニシテ韜鈴之書ヲ講
シ其要領ニ通ス、邕興子著ス所ノ書ヲ読ムニ及ンテ以
テ謂ラク、是レ实用ニ施ス可シト、乃チ其書ヲ写スコ
ト数部ニ及フ、文化甲戌ノ春子カ著ス所ノ民信録ニ序
シ以テ子ノ説ヲ賛シ、且ツ子ノ説ノ以テ今日ニ適セサ

ル者ハ、則チ往々其不足ヲ補翼ノテ批評ヲ其編中ニ加フ、私ニ官議ノ軍政ヲ更革スルニ至ランコトヲ期望スルヤ茲ニ数十年ナリ、

天保六年乙未十一月朔日郡奉行見習ヲ拝ス、大根占郷ニ川上大明神社アリ、大始良郷ニ岩戸大明神社アリ、其郷民民意ニ触ル、ヲ以テ言ヲ為シ農事ニ禁忌多シ、乃チ某ノ季節ニハ播種ヲ禁シ其時ニハ收穫ヲ忌ムノ類之カ為メ往々農期ヲ失シ生成ニ害アルヲ致ス、

先考郡奉行見習ヲ以テ此郷々ヲ管スルヤ、天保九年郷吏及ヒ神官ヲ召シテ其来由ヲ問ヒ、又村吏小民ヲ集メテ示諭懇到、然後状ヲ具シ建白シテ禁忌ヲ除カンコトヲ藩ニ請フ、藩乃チ京都留守居山田一郎左衛門(清安)ニ命シ之ヲ吉田家ニ謀ラシム、吉田家乃チ崇源殿(諏訪神社ノ傍ニアリ)帛納告文ヲ以テ神意ヲ緩フシ、以テ禁忌ヲ除ク、是ヨリ郷民心ヲ安ンシ神意ニ触ル、ヲ念トスルナク、農業時ニ及ンテ之ヲ施シ期ニ後ル、ノ憂ナク、五穀自ラ生成ヲ遂ルコトヲ得タリ、

九年戊戌九月廿五日郡奉行ニ昇リ、十一月九日本職ヲ

以テ高岡地頭代ヲ兼ス、

先考官ニ居ル廉清ニシテ敵ニ贈遺ヲ絶ツ、其郡奉行ヲ以テ高岡地頭代ヲ兼ネ関外四ヶ郷(四ヶ郷)(藩之四境関ヲ設ケ他國人ノ藩内ニ入ルコトヲ禁ス、而シテ高岡・綾・穆佐・倉岡ノ四ヶ郷ハ関外ニ在ルヲ以テ、故ニ之ヲ関外四ヶ郷ト云)ヲ管スルヤ其郷吏事ヲ請フニハ必ス其土産ヲ呈ス、蓋シ當時一般ノ習弊タリ、

先考必ス其物ヲ斥ク、其人ノ強ユルコト再三ナレトモ敢テ之ヲ受ケスシテ曰ク、郷ノ為メニナラス、蓋シ呈スル所ノ物タル之ヲ要スルニ郷民ノ膏腴ニ帰ス、故ニ言フコト爾リ、

先考邑ヲ治ルニハ民ニ益スルヲ以テ急務トス、是レ故ニ事ノ民ニ便ナラサル有レハ、命令ト雖モ直言シテ理非ヲ白ス、敢テ權貴ヲ避ケス、民ヲ奨ヲ農ヲ励マシ又士人ヲ鼓舞シ以テ文武ヲ研磨セシメ、郡務ノ暇子弟ヲ官舎ニ集会シ經史ヲ講論シ、又壯士ヲ励シテ影乃流劍法ヲ講シ勝負ヲ試マシム、夫レ高岡ノ地タルヤ関外ニ属スルヲ以テ、武者修業家来テ劍法ヲ試ミ勝負ヲ争フ

コト少カラス、故ニ士奮ツテ劍術ヲ練磨ス、高岡郷士市來正之丞ト云者アリ、地頭館ノ書吏タリ、劍術ヲ善クス、

先考任竣ツテ府ニ帰ルノ後、正之丞ヲ勸メテ遊歴シテ武者修業ヲ為サシム、正之丞或ハ筑後柳河大右進ノ門ニ入り、或ハ江戸島田虎之助門ニ居リ、或ハ天下ヲ遍歴シテ遠ク奥羽ノ隈ニ至リ劍法ヲ研究シ、其妙ヲ得テ帰ルヤ、

先考既ニ歿スルノ後タリ、又同郷士黒江綱助ト云者アリ、才俊ニシテ業勤ム、其父ヲ順介ト云蘭医ヲ業トス、先考綱介ヲ勸メ江戸ニ遊ンテ蘭学（當時欧学只蘭学有ツテ開ケタルノミ）ヲ学ハシム、綱介乃チ箕作阮甫ノ門ニ入り勉学シ業大ニ進ム、官命シテ琉球ニ遣ハス、蓋シ異国人在留スルヲ以テナリ年月ヲ詳ニセス、蓋シ弘化四年ニ在ルカ琉球ヨリ返ニ及ンテ

先考已ニ歿ス、又大坂ニ往テ尾形浩庵（精カ）ニ蘭学ヲ学フ、数年ニシテ早世ス、惜ヒカナ、綱介天之二飯ス二年ヲ以セバ其成ルコト測ル可ラズ、綱介曾テ語テ曰ク、

僕箕作ノ門ニ居ルヤ他藩生徒若干、就中長州萩藩四人最多数タリ、人僕ヲ指シテ以テ謂フ、薩藩人ノ蘭学生徒タル珍シイ哉、（海老原清忠）雍齋翁常ニ宗高ニ語ツテ曰ク、僕幼

ヨリ直次郎君ノ教ヲ受ケ、後軍政更革ノ日ニ及ンテ大ニ有力ニ預ル、終始恩ヲ蒙ルコト深シ、故ニ僕（調所広郷）ニ言テ重ク君ヲ挙用センコトヲ欲シ、而シテ之ヲ遂クルコト能ハス、以テ遺憾トス、然リト雖トモ僕後ニ待ツ所ノ事アリキ、謂ラク、軍局ヲ府下ニ設ケ砲台ヲ諸所ニ築キ常備兵ヲ置キ、附スルニ歩卒ヲ以テシ大ニ操練ヲ興シ、海防ヲ蔽ニシ且内海ノ沿浜ニ新田ヲ墾キ以テ軍資ニ充ント、蓋シ其時ニ当リ之ガ惣宰タラン人ハ君ヲ舍テ其レ誰レカ之ニ当ランヤ、之レ万人ノ目スル所ニシテ独リ僕ガ吹拳ヲ待ツノミニアラサルナリ、僕ガ後ニ俟ツ所アツテ君ノ恩ヲ報セント欲スル所以ノ者是レ也、而シテ君不幸ニシテ世ヲ棄テ僕亦尋テ官ヲ罷ラレ誠ニ慨ム可キナリト、
嘉永元年戊申（即弘化五年）二月二日先考遽ニ中風ヲ病テ八日ニ至リ終ル、享年六十、

先考性剛直ニシテ世ニ阿ラス人ニ媚ビス、調所大夫ノ如キモ亦憚ル所アルニ至ル、其御馬預ノ如キ閑官ヲ以テ身ヲ終ル、蓋シ其故ニ因ル也、嗚呼
順聖公襲封ノ後ニ方ツテ 先考ヲシテ尚ホ在ラシメハ蓋シ其才用ヲ展ル所アラン、毎ネニ懐ヘトモ及フコト
靡シ、

先考ノ弟諱ハ宗敬、通唱八郎太、宗高ハ其長子也、宗政君白坂氏ニ娶リ女子三人アツテ男子ナシ、故ニ宗高入ツテ宗正君ノ嗣ヲ繼ク、
明治二十二年九月中旬

不肖嗣子平田宗高誌謹

此編宗高子孫ニ為サンカ為ニ誌シタルモノナレバ、若シ他人ニ之ヲ見バ可笑モノモアル可キ也、之ヲ了セヨ、

五九五 参考 鎌田正純日記

〔頭注〕嘉永二年ノ誤
嘉永元年己酉正月二十五日 雪天 巳

一今日モ昨日同断出勤不相調候事、

一今日ハ 大守様齊興公御暇給之上使御引受ニテ候事、
一今晚田中源五左衛門殿・葛西四郎太殿・平田直之介殿
・相田清次殿・伊地知十郎左衛門殿・田原藤太郎殿追々入来ニテ候、田中氏ハ跡ヘ居残九ツ半頃緩々被相出候事、

二月

四日癸 曇 四ツ時分少雨

一今日御発駕齊興公ニ付五ツ前ヨリ出勤、五ツ半時御発駕被遊、一代与力共奏者御祝儀相勤者、
〔マ〕
左候テ八ツ前頼合御暇ニテ相帰候事、

一八ツ前ヨリ宮之原主計當時在番頭殿、早川五郎兵衛留守居、田中源五左衛門物奉行殿同伴隅田川登イタシ、
左候テ夜入八ツ時分相帰候事、

閏四月

三日 雨 庚
一今日快気、致用心出勤見合候事、

鎌田圖書

右ハ 御着城之御礼使先規之如シ被仰付候付、来ル七

日御用番様其外様へ勤方被仰付候条可申渡候、

四月 豊後取次宮之
原主計

閏四月

七日 雨甲
戌

一今日御老若様へ御届廻勤之筈ニテ別勤ニテ候事、

一八ツ後ヨリ打立、同伴御留守居早川五郎兵衛ニテ、御

用番松平伊賀様御老若都合十二間へ廻勤、供川畑源之

助・角野藤兵衛・山次左衛門・肥平左衛門・神田六

郎右衛門、用達足輕田中彦之丞、右一人ハ上下着用ニ

テ候、外ニ御留守居方外番足輕光陸先九三人鍵・草り取・

中柄・对挾箱・合羽籠三荷・乗馬・沓籠押一人、尤乘

物ニテ候、左候テ七ツ半過無滞相濟相帰候、支度服紗

麻ニテ候事、

一右ニ付心祝トシテ葛西四郎大殿・肝付清右衛門殿入来

且中山次左衛門殿・同尚之介殿ニモ一刻入来ニテ候、

薬丸猪右衛門殿・福崎七之丞殿ニモ暫入来ニテ候事、

一田中源五左衛門へモ申遣置候得共、差支之由ニテ看一

折被遣候事、

閏四月

十五日 雨壬
午 四ツ時分ヨリ晴

一今晚七ツ半時出宅、同伴御留守居井上逸作殿ニテ登

城、已上刻御白書院へ公方様・右大將出御、礼使勤並

ニ自分ノ御礼兩度之御目見無滞相濟候、左候テ 西丸

へ登 城、御奏者番御謁ニテ八ツ前比退 城ヨリ御老

若様へ御礼廻、右相濟八ツ過相帰候、行列先日通ニテ

御城内へ罷通候、家来兩人上下着用イタシ候、一人ハ

御供夫田中彦之丞、一人ハ川畑源之助ニテ候事、

一七ツ後ヨリ致心祝、直触以上且兼テ出入之人數二十人

余入来ニテ、相応ニ振廻イタシ、夜五ツ前ヨリ追々被

帰候事、

閏四月

十九日 晴丙
戌

一今朝六ツ過出宅、同伴御留守居半田嘉藤次ニテ登城、

於檜間御老中松平伊賀守様ヨリ御奉書御渡被成、且紗

綾二卷拜領被 仰付、御敷居外ニヲイテ右礼申上、御

奏者番様御取合ニテ候、左候テ九ツ半比退 城ヨリ久

世様へ罷出御座申出候処、無程 御奉書御渡被成候、
夫ヨリ御本丸御老若様へ廻勤イタシ七ツ前相帰候、供
行列先日登 城通ニテ、服ノシ目半切ニテ候事、

一 今四ツ時ヨリ今里御茶屋へ少將様(齊彬公) 被為入、
御鉄砲之由ニテ御家老衆並ニ主計(宮原)・拙者被召候
旨、昨日御小納戸藥丸猪右衛門ヨリ致承知、勤濟次第
罷上ル賦候処、前件通り被成候ニ付不得罷上、尤其段

ハ前広藥丸且御家老衆へモ葛西四郎太ヲ以申出置候事
一 今晩田中源五左衛門殿・葛西四郎太殿・東郷左七郎殿
入来ニテ候事、

一 今日式日中急キ致着候事、

閏四月

廿一日 曇子 問々雨

一 今日ハ四ツ前出宅、支度服紗麻、同伴御留守居付役勤

永田正兵衛ニテ、先達駕籠御免誓詞之御礼(先規ノ如シ)

廻トシテ、御目付戸川中務少輔殿・鶴戸甚左衛門殿へ

參上、御近親佐竹次郎様 日光宮様へ御使者相勤、妙

王院へ立寄支度等振廻有之、右住持御別当ニモ挨拶ニ

被出候、左候テ暫イタシ退座、七ツ前相帰候、供略行
列ニテ家来四人・鍵・御挾箱・中柄・小者・合羽籠一
荷・台輪ニテ候事、

一 七ツ半過ヨリ堀頭ウナキ屋へ参リ、尤田中源吾殿・中
山次殿・黒葛原吉殿先キへ被参居候付参候、左候テ夜
入五ツ過帰掛中山殿御長屋へ立寄相帰候事、

六月

廿一日 晴亥

一 今日四ツ八ツ致出勤候事、

一 今晩迫水孫次郎殿・葛西四郎太殿入来ニテ候事、

一 暮過御家老衆ヨリ只今御用申来致出勤候処、篤之助様

(齊彬公第マコ子) 昨晚ヨリ御病氣之処、極々御大切ニ被

及候付、御国許へ極々急キ飛脚被差立、且伺御機嫌御

通達等出候付、致諸首尾四ツ過退出之事、

六月

廿二日 曇子 今晩雷雨

一 今朝淡路守(島津淡路守忠寛) 殿御家老澁谷直記殿御用

向ニ付入来ニテ候事、

一今日四ツヨリ出勤、長話ニテ七ツ後致退出候事、

一篤之助御天亡之段今申中刻御弑相成、明後二十四日御

内葬(大圓寺)ニテ、御滞棺中ハ御停止通ト被仰渡候、

宥伺 御機嫌有之候事、

一夕方ヨリ葛西四郎太殿・鎌田源泉殿・黒葛原吉左衛門

殿・川南清兵衛殿・大田才之助殿入来ニテ候事、

六月

廿四日 曇寅庚 後晴

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一今夕方ヨリ東郷左七郎殿・迫水孫次郎殿・大田歳之助

殿追々入来、四ツ半頃被帰候、

一今夕篤入院様御内葬有之候事、

六月

廿七日 曇巳癸 間々雨

一今日ハ篤入院様御中陰三十五日御法事ニテ、五ツ時ヨ

リ大圓寺へ相話、且 大守様 少將様御代香ヲモ相勤

左候テ八ツ半頃相済帰宿、供毎 御代参之節通、

但駕籠ニテ候事、

一今晚黒葛原吉左衛門殿・鎌田源泉殿・葛西四郎太殿入

来ニテ候事、

八月

朔日 雨寅丙 晝雷鳴

一今日ハ 大守様(齊興公)ヨリ御大刀献上御使者ニテ、

晝七ツ半時ヨリ出宅 御本丸へ登 城、同伴御留守居

付役勤立花直記、左候テ九ツ時分献上(先規ノ如シ)相

濟、御請取之御奏者番石川日向守様、夫ヨリ退 城直

ニ相帰候、本行列先陸三人・駕籠脇六人・乗物・中柄

・小者・对狭箱(狭之)・合羽籠三荷・引添抑一人ニテ候事、

一今晚迫水孫次郎殿・葛西四郎太殿・平田直之介殿入来

ニテ候事、

一宮之原源之丞殿今日着ニテ七ツ後一刻見廻ニテ候、左

候テ彼宅へ参候様使ヲ受候得共啓人ニ付相断候事、

一今日之供之内御供使田中彦之丞為用達相付、一人ハ山

次左右衛門御城内迄通候事、

八月

十一日 曇丙子 四ツ後晴八ツ後少雨

一今日ハ於大圓寺 篤入院様四十九日御百ヶ日御法事ニ
付六ツ半時ヨリ出宅相詰、且大守様・少將様御代香ヲ

モ相勤メ、八ツ後相濟帰ル、供 御參代通、尤駕籠ニ
テ候事、

但支度白帷子長袴

一今晚葛原吉左衛門殿入来ニテ、葛西四郎太殿ニハ八

ツ半比ヨリ入来ニテ候事、

八月

十一日 ^{〔二カ〕}曇^丁 四ツ時分少雨

一今日ハ 公義釈奠ニ付 大守様ヨリ御太刀馬代献備（

先規ノ如シ）之御使者ニテ晝七ツ時出宅、同伴御留守居

付役勤永田正兵衛ニテ、五ツ時分相濟四ツ時宿、^{〔掃脱カ〕}供廻

台輪・家来四人・鑓・中柄・小者・片狭箱・合羽籠ニ

テ候事、

但シ服染帷子長袴ニテ候事、

一夕方ヨリ葛西四郎太殿・藥丸猪右衛門殿、迫水孫次郎

殿・太田才之助殿追々入来、四ツ前ヨリ赤松守衛殿・

野良八郎不計入来、九ツ前被帰候事、

九ツ前藥丸猪右衛門殿同道、中山次左衛門殿宅へ參候
事、

十一月

三日 晴^丁
西

今日四ツ八ツ致出勤候、左候テ外御庭 稻荷社へ拜礼

被仰付候間致參詣候事、

昨夜田町御屋敷内失火、大工木屋ヨリ失火、一棟焼亡

ニ付大守様・少將様御差扣之義御伺相成候処、不被及^{〔マ〕}

及其儀旨御用番様ヨリ御即答ニテ被相達候段被仰渡、

於席々恐悅申上之候事、

一七ツ時分ヨリ上村休兵衛殿、夫ヨリ葛西四郎太殿ニモ

入来、暮前被帰候事、

一暮前ヨリ平田直之進殿所へ参り合客東郷左七郎殿・町

田孫六殿・田中源五左衛門ニテ候、左候テ四ツ過相帰

候事、

十一月

廿五日 晴^己
未

一今日ハ於櫻田御殿從 右大將（家定公）様 御簾中様之

上使 御名代嶋津淡路守ニテ御引受ニ付、曉七ツ時揃

四月 笑左衛門

ニテ出役、四ツ前向 上使共相濟、夫ヨリ平田直之進

右之通り申四月廿五日承知、鷲ノ間御座未熊ノ間へ

殿・井上逸作殿・半田嘉藤次殿其外御目付五人同道清

罷出候、御家老豊後殿・近江殿・笑左衛門殿、御側

水樓ニ集会、左候テ夜入過相帰候事、

御用人御側役二階堂志津馬・吉利仲・海老原宗之丞

但中途羽織袴ニテ参候事、

御記録奉行勤得能彦左衛門、御広敷番頭税所七郎右

十二月

衛門、郡奉行田中清右衛門、御作事奉行見習法元六

廿三日 晴丙 立春

郎左衛門、御徒目付野元源五左衛門、御記録方添役

一今日従公方家慶公様以上使、於御広敷御前様(齊彬公御

伊地知小十郎此人数ニテ、宗之丞以下ハ毎日暮迄長

夫人) 御拝領物被遊、右ニ付朝五ツ時揃ニテ出役、九ツ

詰ニテ致取調候、

半時相濟候テ退出、左候テ八ツ後ヨリ大圓寺へ御代参

一御軍役方被召立

相勤、夫ヨリ緩々相咄、葛西四郎太殿・鎌田源泉殿ニ

御三代様御軍法ヲ基本ニ被相立候付、右松家甲州流軍

モ被参会候テ四ツ前相帰候事、

学師範家差上候方可然旨、宗之丞ヨリ承趣有之候得共

一相帰候処、無程徳永助之進殿・川北十郎殿・橋口權九

拙者儀ハ後見被仰付置預リ物ニ候得ハ、御差障相成候

郎入来ニテ候事、

訳何トカ御沙汰無之候テハ、一統ノ門人中へ申諭モ出

五九六 参考 安田助左衛門日記抄

来兼候趣ヲ以、不都合ナカラ断申出置候、然処其後田

安田助左衛門

田中清右衛門

右御軍役方取調掛被仰付候条、可申渡候、

右ハ先祖代ヨリ甲州流軍術師範家ニテ御扶持米四石被

下置候得共、此節師範家并被下置候御扶持米差上、家ニ付伝来ノ書籍都テ御軍役方へ差上度旨願申出、御軍賦ニ付テハ、御先代、御三方様御時代ノ御軍法ヲ基本ニ相立、其外和漢ノ作法用捨斟酌イタシ、一家ノ流儀等ニ不相泥宜ニ從ヒ取調候様被、仰出、御備向モ追々堅固ニ御治定、御先代様ノ御作法御中興ニ相成候軍学ノ儀、人数組引進退致指揮事業ニ候処、甲州流軍法ノ内ニモ、古流右松十郎太・田中清右衛門、新流園田與藤次伝来ノ次第ニ依リ流儀相分レ、向々致指南候テハ、現事ニ臨ミ何レモ習得候趣ニ応シ立迫リ、隊伍進退不揃相成一体ノ御軍備ニ致相違、此節格別之、思召ヲ以被召立候御軍備ノ妨可罷成、旁存慮ノ趣共別テ心入奇持ナル儀ト被、思召上候、依之願之通師範家并書籍差上候様被仰付候、左候テ是迄多年数多ノ門人教導方ニ付テハ、旁入価ニモ為相及筈ニ候間、別段ノ御取訳ヲ以テ一往御扶持米是迄ノ通被下置候、

右可申渡候、

五月 笑左衛門

右之通り申五月廿五日被仰渡候付、翌々廿七日右松家門人一統肝付家(兵部、喜入郷領主)へ集會、壹岐(島津)殿仰談ノ上流儀等差上候筋御内意願書差上候、

園田與藤次

右松十郎太

右ハ兩人共先祖代ヨリ甲州流軍学師範家被仰付置、御切米迄モ被下置候処、此節師範家並御切米家ニ付伝来ノ書籍差上度旨、十郎太儀ハ幼少故門弟共ヨリ願申出、此節厚、思召ヲ以、御先代、御三方様御時代ノ御軍法ヲ基本ニ被召立候付、向々流儀致指南候テハ隊伍進退不揃相成、御軍備妨可相成儀ニテ、願之趣奇持成心入候、依之都テ願之通差上候様被仰付候条、可承向へ可申渡候、

六月 笑左衛門

右之通六月七日一統承知、

五月廿二日御軍賦役勤御役料米三十五俵、右之通り当

御役ニテ被仰付御役料米被下置候旨承知仕候、
一御軍役奉行・御軍賦役、此節 思召ヲ以新規ニ被相立
候、尤御軍賦役ノ儀御目附兼役被仰渡候、

得能彦左衛門

安田助左衛門

税所七郎左衛門

田中清右衛門

御軍役方
御家老座書役

田中治右衛門

田代孫九郎

右御軍役方御用ニ付キ、谷山ヨリ山川表・知覽・鹿籠
ヨリ川邊筋廻勤被仰付候条、可承向へモ可申渡候、

七月 近江

笑左衛門

右之通り七月十四日承知、八月五日出立、諸所調練
見分此節初テ候、十三日帰府、

九月十一日於吉野原御流儀砲術調練被仰付候付、陣小

屋致掛方候様被仰付、九月八日小屋具木竹寄セ方那
へ相達、同日御作事奉行入足召列差越、翌九日致掛方、
十日組頭六人御側役其外御役々惣勢着陣、其夜一宿、
十一日調練別テ都合能相濟候、惣人数五百人余陣屋ニ
テ銘々へ兵糧相渡、小屋ハ一坪ニ式人半ツ、ノ賦、甲
州流ノ法ニ則ルニテ致割方候処、陣中ノ次第考通少モ
混雜無之候、

得能彦左衛門

安田助左衛門

造士館助教横山安之丞

御軍役方
御家老座書役

上野 彦助

右ハ御領内海岸へ異国船渡来ノ節ハ、注進次第早速平
日支度ノ儘ニテ可被差越候付、兼テ其心得可罷在候、
左候テ渡来ノ事情相分候ハ、成丈無事平穩ノ致取計候
儀肝要ノ事ニテ、何様難題申掛候テモ不失 御国威様
理解、平和ニ為致帰帆候様取計第一ニ候、若又佐多・

山川等ニ渡来ニテ押々 御城下へ可乗通候カ、又ハ不法ノ振舞有之戰爭ニモ可相及時宜成立候ハ、兼テ被定置候御人数組被差出候儀共ハ勿論、旁致勘弁無手拔様可取計候、右之趣兼テ相含応対、其外西洋風俗等ノ儀共相心得、至其節臨時ノ御用弁候様可致内達事、
右之通申九月十二日近江殿ヨリ海老原宗之丞ヲ以致承知候、

安田助左衛門

税所七郎左衛門

御軍役方
御家老座書役

相良彌兵衛

右ハ御軍役方御用ニ付、西目筋諸所廻勤被仰付候条可申渡候、

九月 近江

右之通り九月十六日承知、市来ヨリ出水迄ノ浦々米穀・味噌・薪・人馬・船数等相糺、急速長崎へ張出ノ御手当無滞様イタシ置候、左候テ海老原氏出府掛

於出水訓練有之、近郷ハ勿論菱刈表ヨリモ参リ候テ、惣人数千三百人余ニテ候、十月八日帰府、

安田助左衛門

税所七郎左衛門

法元六郎左衛門

右御軍役方御用ニ付、蒲生表ヨリ高岡筋諸所廻勤被仰付候条可申渡候、

十一月 近江

右之通り被仰付十二月三日出立、訓練武芸見分廻勤

同廿二日帰府、

五九七 示現流伝書差上

嘉永元年戊申七月九日達

御流儀示現流

右ハ東郷肥前重信事示現流鍛術相伝、是迄致連続居候処、宰相(齊興)様多年被遊御信仰、此度東郷藤兵衛ヨリ御相伝申上御伝書等都テ差上候付 思召之訳被為在

以来右之通相唱候様被仰付候条、此旨東郷藤兵衛へ申渡、可承向江モ可申渡候、

七月

近江末川久平

一 粃四万式千六十九石余

同 断

浅草御藏

合四拾六万式千五十九石余

右之通御座候、以上、

酉二月

御取筒方
廻米方掛

五九八 嘉永元申年江戸蕃穀在高(吹塵録)

申十二月晦日有高

小菅納屋

一 粃貳拾七万千八百九拾五石余 御 囲 米

全所

一 粃八百四拾四石余 廻米方掛同断

全所

一 粃六百六石余 竹垣三右衛門取扱同断

全所

一 粃貳千六百三十三石余 伊奈半左衛門取扱同断

本所御藏

一 粃十式万七千八拾三石余 御 囲 粃

浜御藏

一 粃壹万六千九百貳拾九石余 御 囲 粃

大坂越後御買上ケ

十月十一日(吹塵録)

旧幣引替所来西十月迄又延ル、

五九九 近衛家御用部屋日記抄

嘉永元年戊申秋冬

七月

廿日 辛卯 天晴

一 薩州運光院大隅国大始良郡代大仙院参殿入峯ニ付、

毛氈一枚・金子二百匹献上、且又御祈禱之義相窺也

如例年御祈禱被仰付候旨 返答也、

八月

五日 丙午 天快晴

一 青蓮院宮諸大夫ヨリ以書狀、喜久宮御方被召返輪王寺御附第被 仰出、入道宮御末男滿宮御方被遊 仁 孝天皇御養子 青門御相統被仰出候旨為御知申來、右ニ付取次中御歛使相勤候筈也、

九月

十日 庚辰 雨下

一 薩州留守居ヨリ以書狀、宰相儀齊興御參府途中為參勤先月廿一日国元発、中途無滯候得ハ、来廿六日伏見へ着、翌二十七日同所発足之積ニ御座候、且着御^{〔留之〕}怡逼留中、御尋又ハ御内々ヨリノ御使、毎々之通御使御差向ニ御座候哉、左候ハ、御使御名前等御作定之上為御知可被下候、尤着前日御使御差向有御座度、左候ハ、錦屋敷ニテ御引受申候旨申來、

十月

廿六日 丙寅 天晴

一 附武家以手紙 天觀院様御逝去ニ付、両所・郁君御

方ヨリ御贈經御機嫌伺被為進、御使明後廿八日巳刻所司代可被出旨申來、

九日 己卯 天晴

一 同所去十八日松平和泉守事、御本丸ニテ可相勤旨松平伊賀守・久世出雲守連判之列被仰付、出雲守義ハ右大將様へ被為附、大和守ハ名改候旨申來、十一月

一大嘗會田奉幣發遣為上卿

御參、吉刻己兼日奉行ヨリ刻^{〔限力〕}限依被急

正辰一点御出門也、御衣紋山科左衛門督殿、御前日野西勤ケ由長官殿御出迎、兼御出迎柳原大納言殿・勘解由小路中務權少輔殿等卯半刻參集、御料理御湯漬等如例、

一 早天内侍所江御初穗金百匹御奉納御使取次中、

一 尋常御装束

御冠紙捻 御袍 御下襲打裏 御素袴^{固紋打裏}

御赤大口 御柏紅 今度被略 御劍蒔繪師之形 御

玉帶^{無文九文} 御平緒紺地 御帖白檀紙 御檜扇 御襪練

先於陽明門代御下車、被經建春門・承明門外、從直廬御昇殿御休息、辰半刻計從同所御下殿、陣之儀被始被敷政門・宣仁門等御着陣如御次第宣命草并清書等於弓場代御奏門候此時番長近衛等從日華門相廻、宣陽殿迎御奏聞之時相從、畢不着陣、直々出宣仁門從和德門御退出、令向神祇官代、其儀於陽明門外御乘車、清和院京極通荒神口河原坂橋吉田道順路御參向、樓門手前ニテ御下車、引門外江御出迎柳原殿

勘ヶ山小路殿等列立、并錦織中務大輔殿・萩原右兵衛佑殿等御出迎被申、樓門内吉田傳從三位殿御出迎有之衣冠、柳原殿ヨリ御幣長相濟候旨被告、直ニ御下車、右番長前行近御裾入樓門浮橋手前、右之方主水司供御手水此時前驅持御券、畢令浮橋渡、治鳥居前ニテ被下、御裾前行止リ召使候御裾南門檀下ニテ政官御揖、左少弁胤保答揖蹲踞、外記蹲踞直ニ令入南門着座、給如御次第使々參着御作法有リ、御幣物御馬等發遣、次三社奉幣使進発、事訖御退下、召使直御沓南門外政官御揖如初、畢テ西ノ方神樂所へ御休息、吉田殿

ヨリ御茶果被差上、吉田殿一族衆御挨拶被申、此間ニ御供揃置次還御、於樓門外御乘車、被徑本路申刻過帰、御万端無御滯被為濟候テ恐悦不過之者也、
一 此日宣命祭主三位依右着座、依御目參軾、石清水久我大納言殿、加茂下上使德寺中納言殿兼日依頼、旧例并文政近例ヲ以乍座賜之、云云、
一 還御即刻尋常御供立御細代ニテ御參 内、神祇間ノ義無異儀相濟候段被仰上直ニ御御退出、
〔衍カ〕

廿一日 辛卯 天晴

一 大祀御当日也、前行大臣御參、
一 早天内侍所御最花金百匹御奉納取次中布衣着用、
一 午半刻ヨリ御衣文山科左衛門督殿・御前日野西勘ヶ由長官殿御出迎、石井宮内卿殿・高野左衛門佐殿等御參集、御衣文一之間御料理御出迎、大書院御酒御湯漬出之但外山三位殿裏松左兵佐殿參上無ケ於禁中御出迎被申、
一 御裝束
御冠紙捻 御袍 御下襲 裾打裏 御柏紅小袷服紗張 御
單紅豎髮 御表袴固文打裏 赤大口 玉御帶無文巡方

萌繪御劍師々形 御平緒 紺地梅 御笏 御檜扇

御帖白檀紙 御襪練

先差車御車代於中門廊車寄御乘車御查御簾等、所役如例、自四脚

門御出車、於陽明門代御下車此儀、(自力)入建春門并土戸

等、被徑(経)會昌門代外承明門自直廬階御昇殿御休息承明門外

東軀仕切ニテ雜色長以下止之大臣宿所ニ休息、少外来于休所

前軀隨身等奉從月華門北歸ニ休息申合東西相分、

乞前軀面會俊徳出逢、諸司小忌日蔭蔓等分配候旨申

之受之、畢入大文画御劔箱 非藏人口江青侍中持參御衣

文之衆へ相渡置、酉半刻頃御催自直廬階御下殿、

先是於御休所小忌御冠巾子撤御劔 御衣紋

之衆奉仕被經會昌門代承明門外無御燈提前軀 入昭訓門

代日華門於壇上御裾クルク 并廻立殿前庭幔内給召使養幔

俟幔外前軀、出御廻立殿此已前量程番近衛 出昭訓門外退休所着同殿坤角座給

後宮内輔長(少駈カ) 延朝臣取御杓幔外之召使江渡ス、宸儀御

歩自廻立殿御歩御前行右方御躡此已前量程番近衛 悠紀殿着御、御座之後同殿

歩躡布單傍曲折被繰御裾御前行 悠紀殿着御、御座之後同殿

巽座着給先是御前行訖於其辺着御、查給 召使役之時宜六位藏人内々告之、神饌訖還御廻立殿

御前行如初入御之後最初脱給所ニテ御經南殿階下 到殿上小

從為便利、東西休所江相分 南殿橘樹辺幔仕切アリ、西廊

居故如是依東西往来不便也 代並弓場辺無庭燎如闔、臨期小舍人申談密々弓場之

辺ニ脂燭差置照其路、御往来無難也、

子刻前主基出御、御催自直廬階御下殿神仙門外迄前軀一

襪、番長近衛 入神仙門被經殿上小庭無名門等、廻立殿

等一兩輩相從 坤角江御進神仙門御入之時御裾クルク卷ニシテ

出御已前被脱御杓、長延朝臣取之召使ヨリ渡、如初

主基儀訖還御廻立殿之後、南殿階下殿上小庭等ヲ被

經、自直廬階御昇殿于時 被脱小忌被帶御劔、大祀無

御帶被遂行、御悅並御機嫌御伺被遊直ニ御下殿、被

經承明門外前軀隨身等相從雜色長 於陽明門代御乘車、經

本路御帰亭、于時寅半刻無御帶御勤仕、恐悅不過之

者也、

廿二日 壬辰 天晴

一 此日辰日節会也 内弁左大臣尚忠(九條) 公御參役

ニ付、庭上御見舞被仰進御使長雄務之、

一 右ニ付宮内少輔長延朝臣 賀須 引卒參役也、

廿三日 癸巳 天晴

一此日巳日宴也、吉刻辰因茲

内弁御参也、從辰刻頃御衣紋高倉前大納言永雅卿刑〔部脱力〕卿長谷信好卿兼御出迎、

御出迎大藏卿豐岡博房万里小路等追々参集但博房不参於宮中御出迎

御衣紋於一ノ間御料理出之、御出迎於大書院末間湯

漬杜康等出之、御衣紋如左、

御冠紙捻儲揚緒御袍 御下襲 裾

御表袴 御柏紅小 御單紅髪 御大口赤

御玉帶有紋 御平緒紺地梅 御劔劔

魚袋金 御笏 御檜扇 御帖白檀紙

御襪練

先差車御車代於中門廊車寄御乘車重政進御沓、長教供、御簾囊之、俊良助之

四脚門御出車、於陽明門代御下車廉囊之、右番長前行

御右左番御後御左近衛一座執御裾進退 量外記局前程

下御裾少時取之、自建春門并土戸於土戸外、被經会昌

門代承明外臨期昭訓門代御入、雜色已下喰違機自直廬階令昇

給此間前經会昌門代外馳付光範 御休息午半刻悠記宴被始

但無時下同階給、右番長前行以下被經会昌門外入昭訓

門代御出迎前驅御進昇東福門代前砌入同門給、西行入

東西南端幔内給番長着東廊代座給此儀見次群卿出外弁

後御起座、於陣後被押御笏紙近衛以繞飯被着御靴同人奉

前驅廻居 次着東廊代兀子給昭訓北第二間元兀子警声、入

化德門 東福門代東行經東廊柱外

着兀子、但依無出 内侍臨東檻、次東福門下前砌科南行御

引練 到左仗南頭給向西御一揖、向乾御二拜謝、了右

廻被經本路東廊、西行於東面階下御一揖昇階給、簧

子南行曲折纏入庇当間着兀子給、次開門次召舍人大舍

昭訓門 次小納言就版異位重行小忌第宜敷尹群卿謝座造酒

外称唯 自階辺 謝酒訖昇殿着座、次供進賜臣下儀、次第訖

馳來授空蓋 一献倭舞御下殿家礼輩五御下殿、次御下殿立行事兀子前給

御昇殿次二献風俗三献御酒勅使等訖渡西給、從階下

并西廻廊出石殿門給右惣西廻廊休息、直此廻雜色、于時前驅於

前驅二人取松明右番長前行如初西刻過是刻内々也、旧例 從直廬

階御昇殿西半刻主基宴被催自同階御下殿入石殿門給右惣

於門外被着御靴、番長近 着西廊代兀子給、内侍臨檻謝座

衛侯西廊辺通行神仙門 謝酒空蓋如悠記了昇

訖御昇殿、次群卿参列次謝座不仰謝酒空蓋如悠記了昇

殿着座、次御膳供進一如初、次一献田舞御下殿一如

悠記和舞、次主基鮮味行事弁卒国司并膳部執之、立

庭中内弁問、宜何曾弁申云、主基所献レル御賀宜膳

屋ニ給へ、弁承揖退入次ニ献風俗次三献御插頭内弁

御起座被奉之、了群卿下殿拜舞、了内弁御下殿、次御

拜舞群卿引時也御復座次臣下插頭此間檢校行酒、次御下殿

着兀子給令番長召外記々々ニ兒參侍參時人進次被奏見參于時人進

射場令職事奏聞給 天覽了返給再着行事兀子給、返

賜杖於外記退令番長於少納言……預候西廊辺賜見參於少納言、了御

復座、次參議向祿所次御下殿群卿召下殿就祿所賜祿、了乍

御座向良御一揖、出光範門代給、於幔外脱御靴被改

浅沓、令放御笏紙御退出、不被撤御插頭、

其路被經会昌門代外前驅已下松明御挑灯等心得如初自東南幔外

雜色奉從出土戸并建春門給、

於陽明門代御乘車御香御簾一、如御參節

右無滯被為濟恐悦不過之、于時子半刻頃

此日昭訓門代日華光範門代月華

会昌門代承明應天門代建礼門也是擬大極殿故也、

廿四日 甲午 天快晴

一此日豐明節会也、内辨内大臣輔熙公、

廿五日

一大嘗会無滯被為濟候ニ付、為御祝儀三種一荷御献上、

御使布直垂俊良、

御裏樣ヨリ生鯛 一折御献上、御用布衣着用、

十二月

十五日 乙卯 晴寒風飛雪

一此日女御御入内也九条左大臣尚忠公御女吉刻午刻之処

及遲々西半刻頃御門前通御寒風強積雪ニテ、殊ニ及

夜陰甚御混雜苦々數事也、前驅殿上人九人、同諸大

夫六人、次御車細代後騎頭辨俊克次出車次左大臣殿

探御毛御車代前、次公卿六人等也、御拜見所四脚御門

驅諸大夫八人

冊明放シ置ニテ敷、後口幔張真中仕切半分計幔張、南之方而御所條

无上竟院殿・広幡殿父子等御拜見所北之方御裏樣君樣方御拜見所

也、尤依先例御簾無之所吹雪強ニ付臨期冊

江簾ヲ掛卷簾上ハ屋根裏長押ヨリ幔ヲ張也、兩御所樣御衣冠、

女御樣御通之節御立隱女儀樣御被衣也、四脚門前青
侍兩人麻上下警固、表御門前同仕丁頭兩人着麻上下
御裏樣御附之輩无上覺樣御供方薩摩屋敷留守始等拜
見願御門前ニテ拜見、(脱之)因ヨリ内御家中輩拜見表御門

ヨリ四脚御門迄之間棧敷修理職ヨリ渡ル、此処惣女
中・家中・家内雑人等拜見也 表御門ヨリ西棧敷ハ常御修理
大工人足溜也、此所少々々々入魂

下之雜拜、
見云々

一御覽所諸大夫一人御側一兩人候之先例云々、

一午刻過无上覺院様御成、於御覽所御 〔カ、ヤ〕 様御一緒ニ御
拜見也、

一廣幡殿御父子御參於引所御拜見也、

一今日御歛御參御使一切無之、

十六日 丙申 晴

一兩御所御參 内、女御様へ御成昨日御入内被為濟候

〔カ脱カ〕
御也、御板輿布衣兩人供奉 政

御先三人退紅白丁九條様へモ被為成被仰置、午半刻

過御 於省中御祝酒出云々、

一御入内無滞被為濟候付、禁中江御太刀馬代銀一枚塩

鯛一箱ツ、女御江錫昆布一箱ツ、御樽代式百匹ツ、

自兩御所被獻、御使長雄布直垂、於女御々殿御引二

方金被下、

一右同所ニ付御裏御殿ヨリ省中女御々殿へ

御献上、御使御用人務之、

六〇〇 〔幕令数件〕

府内浪人取締

御目付三宅市左衛門達 〔將軍家令条〕

三月

廿一日

江戸五里四方

御拳場 〔放鷹場ノ一唱〕ニ前々ヨリ住居ノ浪人、御料私

領寺社領共浪人差置候ハ、吟味之上御用懸御目付迄

可相届旨、去十月中御触面ノ通申達置候処、今以不相

届向モ有之候付、早々相届候様可申達旨、主膳正殿被

仰渡候、依之有無共早々被申達候事、

三月

三宅市左衛門

諸秤量改布令

牧野備前守三阿彌ヲ以御渡 〔將軍家令条〕

五月

廿五日

諸秤ノ儀古来ヨリ守隨彦太郎役人相廻改候処、近年ハ私事ノ様ニ心得候哉、諸秤数多致所持候者モ、秤少々出シ見セ、不宜秤ハ隱置、或ハ秤所持不致旨ヲ申、改不請者モ有之候様相聞候、前以相触候通守隨方ヨリ役人相廻改候節、諸秤不隱置不残出シ改請候様可致候、最紛數秤ハ取上候筈ニ候、此旨急度可相守者也、

右之趣東海道・東山道・北陸道并丹波・丹後・但馬都合三十三ヶ国、御料ハ御代官、私領ハ地頭ヨリ可被相触候、

右之通先年相触候処、可取上秤モ守隨方へ不相渡場所
有之、猥ニ秤売買致シ、緒等モ手前ニテ取替、掛目不同ノ秤遣候者モ有之候趣相聞不届候、前々相触候通、守隨方役人相廻改候節、諸秤不残改ヲ請、西三十三ヶ国ノ秤東三十三ヶ国ニテ通用無之、取上ニ相成候筋ノ秤ハ守隨方へ可相渡候、最諸秤新古ニ不限守隨方ノ外ニテ売買致問敷、手前ニテ衡并錘緒等取替申間敷候、若諸秤隱置改不請猥ニ売買致シ、或ハ手前ニテ衡并錘

緒等取替候者有之候ハ、急度咎可申付候、

右之通先達相触候、向々へ猶又可被相触候、

五月

烟火取締令

大目付柳生播磨守達(將軍家令条)

五月

十六日

於佃沖年々揚花(烟花ノ通唱)致候者共、近来玉揚ノ方重モノ様ニモ相聞候、一体揚火之儀火矢ハ実用ノモノ候ハ申迄モ無之候処、実用ノ方心掛薄ク候テハ、往々武用ノ為ニモ難成事ニ候間、向後諸流共業前修練ノ儀專一ニ致シ、実用ノ方厚ク心懸候様可致候、

右之通天保十四卯年相達候処、近来又々玉揚ノ方重ニ相成、横打へ至テ無數ノ趣ニ候、畢竟火術之儀ハ武備専用ノ業ニ候処、名聞ニ拘リ火矢打揚數少ニテ実用ノ心掛薄ク候テハ、更ニ修業ノ詮モ無之候間、卯年相達候趣篤ト相弁、武用専実ノ処銘々相勵、熟練致候様厚

可心懸候、

右之趣向々へ猶又寄々可被達候、

八月

古金銀貨幣交換布令 (將軍家令条)

阿部伊勢守達

十一月

十一日

古金銀・真字二步判・古式朱銀并文政度ノ文字金銀草
字式分判・式朱銀・一朱銀共通用停止之分、当申十月
迄引替候様去末年相触候処、今以引替残モ多ク有之ニ
付、引替所ノ儀猶又酉十月迄是迄ノ通被差置候条、諸
事先達相触候通相心得、右期月ヲ限リ引替候様、御料
ハ御代官、私領ハ領主地頭ヨリ入念可被申付候、
右之通可被相触候、

十月

六〇一 樺山資之日記鈔

三月

大久保利通氏蒲生へ類家有之被誘候間、外ニ兩人同道
ニテ差越、帆足氏大久保親類へ泊リ馳走被致候、翌日
亭主七十余ノ人案内ニテ城山見物ニ参ル、又ハ池見ニ
行、諸方廻リ五日滞在イタシ候事、

六月

二十二日 晴

未明ニ打立高島氏鎌齋同道、加世田躍見ニ行、谷山石
坂ニテ夜明ケ柳カ谷ニ休ミ、夫ヨリ伊作ノ湯治ニ入り
日入時分行着、郷士ノ宿ニ泊リ夜ナラシ見ニ差越シ九
ツ時分ニ濟候、昨年モ高嶋氏ト企、柳カ谷迄差越候処、
御チヨウジ (御停止乎) ニテ相延ヒ候由、イツレモ帰り
被成候空敷引取候事、

二十三日 晴

五ツ時分ニ日新寺へ致参詣、帰候テ飯仕舞、四ツ時分
ヨリ躍見ニ差越シ、初テノ見分ニテ勇々敷覚候、九ツ
過ニ濟候間宿へ帰り打立候処、五ツ時分ニ帰着候事、